30th

国際親善総合病院 移転30周年記念誌

International Goodwill Hospital

社会福祉法人 親善福祉協会

国際親善総合病院

移転30周年記念誌

病院の理念

良質な
医療の実施

信頼される
医療の実施

親切な
医療の実施

病院の基本方針

- ■安全で安心な医療の提供
- ■利用者の満足度の向上
- ■地域から求められる医療の提供
- ■働きがいのある職場環境の実現
- ■安定した経営の保持

患者さんの権利・責務

■安全で良質な医療を平等に受ける権利

患者さんは、差別なしに安全で良質な医療を受けることができます。

■提供される医療を自ら選択する権利

患者さんは、担当医師、病院を自由に選択し、又は変更することができます。

患者さんは、自分自身に関わる治療等について、自由な決定を行うことができます。

■自己の診療に関する情報について十分な説明を受ける権利

患者さんは、病名、病状、治療内容について、十分な説明を受けることができます。

また、患者さんは、いかなる治療段階においても他の医師の意見（セカンドオピニオン）を求めることができます。

■尊厳とプライバシーが守られる権利

患者さんは、その文化、価値観を尊重され、尊厳が守られます。また、診療過程で得られた自らの個人情報とプライバシーが守られます。

■生活の質と生活背景に配慮された医療を受ける権利

患者さんは、単に医学的に適切な治療を受けるだけでなく、生活の質と生活背景に配慮された、よりよい医療を受けることができます。

■診療に協力する責務

診療に協力し、自ら治療に積極的に参加する気持ちをお持ちください。

■患者さんご自身の健康・疾病に関する情報を提供する責務

治療について適切な判断をするために、患者さんご自身の症状や健康に対する情報、あるいは希望を医療従事者に正しく説明してください。

■病院の秩序を守る責務

すべての患者さんが適切な医療を受けられるように、病院の規則や指示を守ってください。

ご挨拶

移転30年にあたり（コロナを超えて）

社会福祉法人 親善福祉協会
国際親善総合病院
理事長　山下 光

国際親善総合病院が関内の中心から西が岡に移転し30年が経過した。尤も、この病院は、文久3年から数えて2013年に創立150周年を祝っているので、今頃、移転30年の記念誌を発行するのかと思われる方もおられると思う。しかしながら、関内時代の職員は205名であったが、今はクリニックを含めると840名（グループでは1,240名）である。標榜する診療科も昔は8科、今は25科である。同じ病院と思えないぐらい変化している今、記録を残さなければ30年前に入職した職員もほとんど残っていないので、全ては歴史の闇に消えるので本誌を発刊することにした。

医療界広しといえども、この病院ほど幸運に恵まれた病院はあるまい。それも3回もである。

昭和19年に山手の病院（横浜一般病院）は英米人が中心に経営していたため、敵国資産として接収されたが、直ちに無償で独、伊、スイス、満州及び日本の理事が運営する財団法人に払い下げられた。これが1回目の幸運である。

横浜一般病院は、横須賀の海軍病院の分院として賃貸することを強要されたが、この病院には外国人患者が入院していたため、代替の病院として日本鋼管が保有していた関内の関東病院を110万で海軍の仲介により譲り受けることが出来た。支払いは昭和21年から開始することになっていたが、翌年の敗戦により100倍のインフレが発生し、110万円の借金は1万円の価値に下がり、ただ当然で病院を手に入れることができた。これが2回目の幸運である。

平成に入る直前、移転計画を模索している最中に、狂気のようなバブルが始まり関内の土地を坪4,000万円以上で売却し、無借金で西が岡の土地・建物及び医療機器を整備し60億円の現金が残った。これが3回目の幸運である。

横浜の中心地から西が岡への移転は、都落ちと反対も多く、医師も看護師も相当数は退職した。当然患者も激減し、初年度の赤字は24億円でその赤字は平成7年度まで続いた。しかし、産婦人科の業績が伸び、外来患者も月間25,000人（今は14,000人）と増加して10年近く黒字が続いた。その後も産科の休止等もあり赤字に悩む時代が続いたが、最近は、緩和ケア病棟、地域包括ケア病棟の開設や多くの科の総合的な力で軌道に乗りつつあるところに、コロナウイルス騒ぎで御多分に洩れず苦労している。しかし、何時までも続く悪性の強い疫病は歴史上存在しないが、このような疫病の猖獗を境に歴史や生活が変わるのも歴史の教えるところである。

恐れず、侮らず、将来の変化を予測しながら、職員と共に国際親善丸を新たな海域に押し出して行きたい。

社会福祉法人 親善福祉協会
国際親善総合病院
病院長　安藤 暢敏

ご挨拶

移転30周年によせて

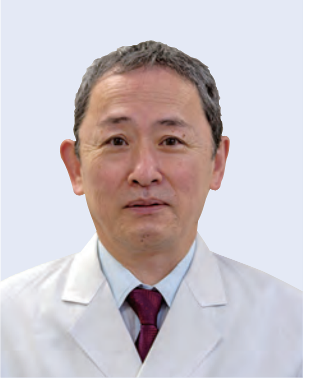
社会福祉法人 親善福祉協会
国際親善総合病院
病院長　安藤 暢敏

国際親善総合病院が関内から西が岡に移り、開院したのが1990年５月でした。本年は30年目の節目の年になります。この間、地域の皆様、そして近隣医療機関、行政機関の皆様方からいただいたご交誼とご支援に、あらためてお礼申し上げます。また市中心部から市西部の新開の地である西が岡への病院移転という壮大な事業を決断し遂行された故 森 英雄前理事長をはじめ、病院の発展を今日まで支えて来られた先人の方々のご努力に敬意を表します。

平成の始まりからこの地での医療がスタートし、当時は外観、内装ともに洗練された病院との好評を得ていましたが、30年を経てさすがに病院の老朽化、狭隘化が進み、村井前病院長時代に新館棟建設や本館棟改修整備事業に着手しました。平成の終わりにこれらの再整備が完了し、３テスラMRI導入などの大型医療機器の整備も終了し、再整備とともに緩和ケア病棟の新稼働、中断していた分娩の再開、弥生台駅前のサテライトクリニック“しんぜんクリニック”の開院など、院内院外でまさに国際親善総合病院の総力をあげてのイノベーションが進みました。また急増する訪日あるいは在留外国人への対応として、外国人患者対応力の強化や院内標示、必要書類の多言語化などを進め、外国人患者受入れ機関認証制度(JMIP)による施設認定を受け、病院のルーツやその歴史、そして病院の名に恥じない外国人患者に対応しうる体制整備を進めております。本年には地域医療支援病院の認定も受けました。開院当初の常勤職員数は360名でしたが、その後いくつかの職種を外部委託とした中で本年初は600名超となり、ハード、ソフトともに急性期総合病院として大きく成長して参りました。

そのような中で迎えた30周年のこの年に、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが襲来しました。病院は感染防止対策室が中心となって保健所など行政と連携をとりつつ、重点医療機関協力病院という立場で陽性および疑い患者さんの入院を受け入れ、同時に発熱外来を設けPCR、抗原検査を利活用しつつ、近隣クリニックの先生がたや患者さんからのご依頼、ご相談に応じて参りました。院内感染クラスターは発生せずに今日まで運用できましたが、感染の先行き不透明な中、引き続き緊張感をもって対応して参ります。

今回のコロナ禍という病院財政にとって厳しい逆風の中、あらためて思い起こすのは病院の理念である「良質で、親切で、信頼される医療の実施」です。これは1998年に神奈川県下で認定第１号となった病院機能評価の初回受審時に、当時の掛川病院長を中心に策定した病院の規範となるべき標語で、この理念を職員一同あらためて胸に刻みながら、地域医療の中核病院として次の10年、30年にむけて歩みを続けて参ります。これからもご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



開院30年間と今後

副院長・脳神経外科部長　**飯田 秀夫**

1994年４月より赴任しました。赴任当初は、泉区を中心とする横浜市西部地域の救急医療の実施、泉区を中心とする横浜市西部地域の専門・救急医療の実施を行っておりました。このころの救急患者は、各年齢層の患者が比較的均等に来院、入院している印象がありました。しかし、最近は高齢者が中心となっています。高齢者の医療には、認知症の問題、既往歴の問題、本人の生き方・家族の考え方などいろいろな問題がありますが、これらの問題は避けて通ることはできず、解決していかなければならないと実感しております。また、最近は嚥下性肺炎などの感染症の患者が増えており、肺炎の起因菌も抗生剤が効かない細菌になりつつあり、抗生剤の使用方法を地域全体で考えなくてはならなくなると思われ、近隣医療機関のみなさまよろしくお願いいたします。

最後に、わたしがこの病院に赴任して、医師・看護師・薬剤師・理学療法士など数多くの方々との出会い・別れを経験しましたが、いろいろな考え方をもった多くの方々と一緒に仕事などができたことは自分の宝物です。職員一人ひとりが健康で、いろいろな面で成長し、病院の色々な問題を解決できるよう皆様のご指導・ご協力よろしくお願いいたします。

西が岡移転30周年に寄せて

副院長・循環器内科部長　**清水 誠**

子曰く「吾　十有五にして学に志し　三十にして立ち　四十にして惑わず　五十にして天命を知る、六十にして耳順い　七十にして 心の欲する所に従いて矩を踰えず」。

30年を人生に例えると何でしょうか。論語の中で孔子は自らの人生を「…三十にして立ち…」と表現しています。このことから30歳のことを而立などと表記されることもありますが、おそらく自信がつき自立できるようになった、という意味だと思います。西が岡に移り30年、病院建設、機能・機構の強化、再整備事業などを通じて当院は発展し、地域にしっかりと根付いた関係を確立し、病院として基盤を確立してきたのではないかと思います。ただし、孔子の言に沿えば、次の不惑の40、知命の50に向かうためにはさらに前に行くエネルギーが必要ではないでしょうか。地域からの信頼と協力を糧に、一層の努力と知恵を出し合い職員が団結して新しい姿の病院を築く、そのためのグランドデザインを打ち出していくことが必要と思います。コロナ禍の年が30周年と重なったことは偶然かもしれませんが、世の中が大きく変わろうとしているこの時期に、単なる日常の繰り返しではなく、今後我々はどの方向に向かい、何を目指すのか考える必要があるのだと思います。

地域における当院の使命

副院長・外科部長　**佐藤 道夫**

私は、2015年に当院に赴任し、泉区の国際親善総合病院の一員として6年間を共にしてきました。この6年の間にも、病棟・外来の再整備、緩和ケア病棟の開設、内視鏡センターの新規移転、病院機能評価の更新と外国人患者受け入れ医療機関の認証取得等、発展を続けてきました。私が所属する外科も、新たに腹腔鏡下肝切除術と内視鏡下甲状腺手術の施設認定を獲得し、年間総手術件数は2015年の533件から2019年には640件まで増加しました。現在コロナ禍で多くの病院でクラスターが発生している中、当院は現在まで院内感染を発生することなく通常診療を継続し地域医療に貢献できています。

このように進化できるのも、医師会の先生方をはじめとした地域の医療関係者の方々のおかげと感謝に堪えません。また当院は総病床数287床と総合病院の中では比較的小規模ではありますが、その利点を生かして職員のチームワークと診療の機動力には長けていると自負しています。今後もいっそう精進し、地域から愛される親善そして頼られる親善へと成長していきたいです。

地域に根差した急性期病院をめざして

副院長・看護部長　**楠田 清美**

私は移転開院時の平成2年5月に就職し、勤続30年を迎えました。病院の歴史とともに自身のキャリアを築けたことに感謝したいと思います。開院当初の看護部は7部署・看護職員数173名でスタートし、現在では14部署・看護職員数が約400名となり、地域に密着した急性期病院としての役割を果たすために活動しています。開院時は全床急性期病床でしたが、高齢化社会にむけた地域包括ケアシステムを構築すべく当院でも病床機能の再編により緩和ケア病棟・地域包括ケア病棟を開棟し現在に至っています。30年間の看護部の歴史を年報で振り返りますと、歴代の看護部長が人材確保に奔走されたことが綴られています。現在では看護大学・専門学校も増え確保困難時代を脱してきており、横浜西部地区の医療・看護の質をさらに向上させていくことが責務であると考えています。記念する30周年の年に、現場は新型コロナウイルス対策で公私にわたり過去に経験したことのない負荷がかかっていますが不満を言う看護スタッフはおらず、その頑張りは見事であると思います。平成2年開院時の院長を中心に幹部が目標とした「患者も職員も惹きつけるマグネットホスピタルをめざす」病院づくりが受け継がれてきた証であると思います。看護の質向上をめざし、またどのような医療環境におかれても柔軟性を持ち、時代に合わせた医療・看護ができる病院構築に尽力していきたいと考えます。

祝辞

国際親善総合病院での8年2か月間

渡辺こどもクリニック
院長　渡辺 豊彦
（元 小児科部長）

昭和63年秋に加藤英夫先生に呼ばれ、大学を辞めて国際親善総合病院で仕事をしないかと誘われました。大学卒業後母校に残りたいと思って、入局先を考えていた時に小児科教授の講義があり､素晴らしい教授に会えた感動が未だに忘れません。その方が加藤英夫教授でした。入局して、肝臓グループに入り、入戸野博先生の指導を受け、小児外科の駿河教授の患者さんから検体をいただき、研究することができました。その加藤先生が定年退職後に国際親善総合病院の院長になられたことは承知しておりましたが、まだ、助手になれたばかりで、もう少し大学に残りたい気持ちはありました。入戸野先生から、自分も行くから、2人で国際親善総合病院の小児科で頑張ろうではないかと言われました。入戸野先生は、いずれは大学教授になられるのであろうと思っておりましたので、動揺しないわけがありません。その夜に妻と相談しました。結婚式の仲人で、私の尊敬する加藤先生とグループ長の入戸野先生と一緒に仕事が出来るなんて、断る理由などありません。12月末に横浜関内相生町の病院を見学に行きました。昭和64年1月から来てくれないかとのことでした。しゃぶしゃぶをご馳走になり、承諾しました。1月からとは、1月1日からだったのです。いきなり当直です。それも全科当直だったのです。昭和64年は1週間で平成元年に変わりました。平成2年のゴールデンウイーク中に泉区に引越し、新しい建物の病院になるとのことでした。建築工事現場を見学に行きました。一戸建て住宅とマンションが建設中でした。横浜のチベットと言われていたそうですが、現在は、とんでもなく良いところです。がむしゃらに仕事（診療）をしました。毎日へとへとになるまで仕事をしましたので満足感はありましたが、当直もあり、日曜日も病棟や救急外来に顔を出しましたので長続きはしませんでした。加藤英夫先生が突然お亡くなりなられたことがショックでした。8年経って、平成9年2月末で退職させていただきました。沢山の事を勉強させていただき、今の私があるのだと感謝しております。有難うございました。

親善とともに30年

多和田レディースクリニック
院長　多和田 哲雄
（元 副院長・産婦人科部長）

移転30周年おめでとうございます。30年いろいろありましたが今回のコロナパンデミックほど酷いことはありませんでした。親善病院は感染対策・安全管理に関して早くから取り組んできたので幸い院内感染は制御されているようですが、病院の皆さんの日々のご苦労は計り知れないものがあると思います。さて私はこの30年間親善病院とともに人生を歩んできました。30年間の思い出はあまりにも多すぎて何を書いてよいか悩みましたが、産婦人科の変遷についてお話させていただきます。

「産科セミオープンシステム」とは端的に言うと「健診は診療所で、分娩は病院で」という周産期に特化した病診連携システムです。師匠の賛育会病院吉田浩介先生が提唱したシステムで、私はこれを横浜でさらに発展させたくて平成元年9月に親善病院へ来ました。近隣の開業医をまわってシステムについて説明し、病院で定期的に連携会・研究会を開いたりして5年くらいで軌道に乗ってきました｡システムのお陰で分娩数が急速に増えたため当直室と医長室を改築して産科棟が増床されました。平成13年には当システムが評価され第23回母子保健奨励賞をいただきました。愛子様ご誕生の年で天皇皇后両陛下よりお言葉をいただきました。振り返るとここで運を使い果たしたようで、その後平成16年初期研修医制度の導入がつまずきの始まりで大学からの医師派遣が滞り、徐々に診療に支障をきたすようになってきました｡平成21年には小児科病棟が閉鎖となり産科も風前の灯となりました。マラソンに例えると出だし好調で折り返し点まではずんずん加速、後半はバテ気味でゴール前の上り坂で息切れしてついにリタイアといったところです。平成22年に今村利朗先生にバトンタッチし、しばらく分娩継続できましたが平成26年ついに分娩停止となりました。その後平成28年4月多田聖郎先生が着任し分娩再開に向け再出発となりました。平成29年4月より分娩再開となりその後徐々に分娩数は増え令和2年10月で再開後累計分娩数1,000例に達し、往時の活況を取り戻しつつあります。令和3年5月には私の次女も親善病院で分娩させていただく予定です。分娩再開にご尽力いただいた多田先生はじめ退職しないで頑張ってくれた助産師スタッフたちに心より感謝します。私は平成22年に親善病院の近くで開業し10年たちました。今では産科セミオープンは横浜中広く普及し、私は親善病院との病診連携を中心に非常勤医として病院で外来、手術に参加させていただいています。変わりゆく親善病院に一抹の寂しさを覚えますが、これからも親善ファミリーの一員でいたいと思います。30年間本当にありがとうございました。親善病院のさらなるご発展を心よりお祈りいたします。

移転開院30周年に寄せて

やよい台クリニック
院長　山本 くるみ

移転開院30周年、誠におめでとうございます。日頃より地域住民に寄り添いながら高度先進医療を推進し、近隣医療機関との連携など格段のご理解ご支援を賜り、この場をお借りし厚く御礼を申し上げます。当院は弥生台に1982 年に開院し、徒歩数分の場所に貴院が移転して以来、30年に亘りお付き合いをさせていただいています。競合する医療機関が比較的少ない地域を選び新規開業し、ようやく軌道に乗り始め数年もたたないうちに貴院が当地に移転ご開院され、その当時は病診連携ということもなかったため、しばらく患者数が減りこのまま開業継続していくことにとても不安であったことが懐かしく思い出されます。

親善病院ご開院当時の循環器内科部長であった山中修先生に開業医と病院の距離を少しずつ縮めていただきました。患者さんの診療情報提供書をお送りするとご丁寧なお電話をいただいたり、貴院で定期的に開催される勉強会でお会いした際には、ご熱心に経過等のご説明をしてくださいました。そして山中先生がご退職されるまでの約10年の間に貴院との医療連携を構築することができ、それ以降は地域医療連携室のきめ細かなご対応もあり、多くの患者さんからの信用も保たれており感謝しております。

またここ数年は貴病院副院長の飯田秀夫先生が泉区医師会理事としてもご多忙の中ご協力下さり医師会としても大変助かっております。

私事ですが2012年には母を、2019年には初代院長であった父（田中隆夫）を貴病院にて看取っていただき、私自身も人間ドックで毎年お世話になっており、本当にありがとうございます。

今後とも一層の連携推進とご指導をお願い申し上げますとともに、貴病院の益々のご発展と関係皆様のご健勝をご祈念申し上げましてお祝いのご挨拶とさせていただきます。

国際親善総合病院30周年

ポーラのクリニック
院長　山中 修
（元 循環器内科部長）

懐かしい人から電話。2004年までお世話になった国際親善病院の事務の伊藤美恵子さんから。彼女とは病院の移転開設時からの知己。創設時の同じ釜のメシを食った仲でいつも冗談を言い合える。ギリギリのブラック・ジョークがよく入る明るい人。病院オープン時はお互い「ヒラ社員」だったが、その彼女も今や「総務課長」、押しも押されぬ重鎮となられた。電話には「ハロ〜」と第一声応答。第2声は「あいかわらず声はカワイイじゃん」「山中センセを省いて30周年は語れませんワ」そんな軽口の応酬で、この寄稿を頼まれた。

「新しい病院をゼロから創る」のは、順天堂浦安病院に続いて二度目の体験だった。クリーブランドクリニック留学から帰国、直ぐに順天堂循環器内科の山口教授から、「山中君。アメリカ帰りのキミにちょうどいい名前じゃないか。ぜひ行ってくれ」と。その折の、当時の加藤院長、城所副院長との出会いは、「国際親善ものがたり」に「しゃぶしゃぶに釣られて」と題して紹介した。

「好きに創っていい」。加藤先生のこのひとことが染みいり、30代・40代の湧き出るエネルギーは循環器内科にとどまらず、内科全体、医局、病院組織にまで拡がって、自由奔放に働かせていただいた。誰よりも近く病院の横に私居を購入し緊急時はいつでもはせ参じ、二人の子どもも病院で生まれ、人生の15年を奉職しそしてたくさんの宝物を病院からもらった。創立時の医師たちは6大学リーグ、順天、昭和、横市、北里、日大、東邦で構成。それぞれから特性のある野戦味のある若手医師が集まった。「いいとこ取り」をしてみたら元気の良いプロ集団ができあがった。順天堂のみの狭い世界から出てみたら楽しかった。現場の診療、学会活動、院内・医師会勉強会、救急外来、ICU開設、研修医教育認定と指導、先駆的病診連携活動などなど、時代に即して走り抜いてきた。組織のつくりかたを掛川院長から学んだ。そして、50歳を目前に気づいた。「もう一回、原点回帰の医療をゼロから好きに創ってみたい」。外来での何気ない会話、生まれ・育ち・教育・職場などの人生環境への配慮、毎日の食生活習慣の指導、疾病への向き合い方や闘わないアドバイスなど、人生にかかわる医療の原点を横浜市中区コトブキに見いだした。

現在の本職であるポーラのクリニックでの診療には、在宅看取り以外に、内科、皮膚科、整形、心療内科、泌尿器科のプライマリが要求される。

そのため、退職前8ヶ月間、役職を退き「無給研修医」となって国際親善病院各部長の外来にて親切に指導していただきました。そのおかげさまで今を生きている。

いただいたたくさんの宝物に感謝しつつ、今後の病院のさらなるご発展を祈ります。

移転開院30周年に寄せて

昭和大学藤が丘病院
病院長・消化器内科教授　髙橋 寛
（元 消化器内科部長）

国際親善総合病院が移転開院30周年を迎えるに当たり、心よりお祝い申し上げます。

私と国際親善総合病院との関わり合いは、私が昭和大学藤が丘病院から派遣される以前に遡る。私の実家は旧国際親善総合病院と同じ中区で結核を専門とする病院を経営しておりました。昭和53年に実家の病院に勤めている職員が胃潰瘍穿孔のため、旧国際親善総合病院に入院治療を受けていましたが、不幸にも亡くなられました。担当医師より病理解剖を勧められ、家族の希望で当時医学部の5年生であった私と、院長であった私の母親が杏林大学での病理解剖に立ち会うことになりました。そこで、主治医であった内科の故樋口良雄先生に初めてお会いしました。

その後、親善病院とは特に関わりはありませんでしたが、故城所仂副院長（当時）が平成2年に泉区への新規移築にあたって私の恩師である藤田力也教授に医師派遣を要請され、消化器内科医長として赴任しました。新病院に赴任のご挨拶にお伺いした折、樋口先生と再会しましたが、先生が私のことを憶えていてくれたことには感激しました。

新病院の開院当時は6大学からの医師派遣があり、それぞれの大学間のシステム（文化？）の違いを調整しながら新しい病院での診療が始まりました。病棟や外来の運営、当直やon call体制など、さまざまな運用について議論を重ねてスタートしました。それぞれの大学の良い所を活かされたと思います。病棟運営は当時4階病棟の看護師で、現在の看護部長である楯田清美さんと共に円滑な病棟運営ができたことは感謝です。消化器内科は私と神長憲宏先生、杏林大学からは瀬尾洋二先生の3名の医師でスタートし、内視鏡を使った検査・治療を中心とした医療を目指しました。1年間かけてなんとか消化器内科の体裁が整いましたので、平成3年に藤が丘病院に戻ることになりました。その後は故鈴木悟司先生が消化器部長として長い間病院を支えてきたことは周知のことです。

一時、藤が丘病院との連携が途絶えた時期がありましたが、平成24年より再び親善病院のお手伝いが出来るようになりました。現在は日引太郎部長および中西徹医師の2人体制ですので十分なサポートとは言えませんが、非常勤として私どもの医局員が内視鏡検査を中心にお手伝いしている状況です。医局を挙げての協力体制が出来るのは、これまで真摯に地域医療に取り組んでこられた国際親善総合病院の病院力に惹かれてのことと思っております。今後も微力ながら協力体制を維持・増強していく所存ですので、宜しくお願いいたします。

「DNAを次世代へ」

リハパーク舞岡
施設長　本田 守弘
（前 総合内科部長）

30余年前、西が岡の造成工事現場を内科医長の樋口良雄先生と見学し、土煙舞う原野の中に新病院を空想してみましたが、此処に患者さんが来てくれるの？が私の初印象でした。もう一つ、市内であっても区を跨いでの病院移転という大事業を決断した森英雄理事長の胆力に驚いたのを覚えています。

当時、加藤英夫院長がメイヨークリニックのような病院を作りたい、と夢を語っていました。後年、メイヨークリニックの創設者の一人、Dr.ウイリアム・J・メイヨーのオフィスの壁に掛けられ、今はヘリテージホールに展示されているラルフ・ウォルド・エマソンの金言の話を知り加藤先生の志の一端が分かった気になりました。

「人よりも優れた本が書けるなら、人よりも良い説教ができるなら、あるいは人よりも良いネズミ捕りをつくることができるなら、たとえ森の中の一軒家に住んでいようと、その家へ向かう道は踏み固められることだろう」

30年目新病院への道は踏み固められた観がありますが、如何でしょう。

新病院立ち上げの同志達と過ごした時間は、私の人生の貴重な思い出になっています。呼吸器内科の鈴木光子先生はチャーミングでシャープな女医、今は千葉県印西市で開業し地域医療で貢献しています。消化器内科の温厚な高橋寛先生は母校の教授から院長になり活躍中です。循環器内科の山中修先生は寿町にNPO法人「さなぎ達」を設立し開業、振幅の大きな行動に驚かされましたが第4回赤ひげ大賞を受賞、「医者の原点」を実践されているようにお見受けしています。歯切れの良いブログも楽しみです。

創立150周年記念を平成26年に企画実行された山下光理事長の真意を汲んで、1863年以来のDNAを次世代に繋げて頂きたいと切に願っています。

国際親善総合病院
西が岡移転30周年によせて

国際親善総合病院
前 皮膚科部長　山田 裕道

国際親善総合病院職員の皆様、役員の皆様、移転30周年を迎えられお祝いを申し上げます。私はまさにこの移転の時に36歳で入職し、令和元年に定年退職となりました。医師人生のほとんどをここ西が岡で過ごしたことになります。当時の医師の顔ぶれをみますと、前病院からの移転組の先生が少数おられた他は大部分が新規採用組の若手医師でその年齢は30〜40歳であったと記憶しています。私とほぼ同世代の部長・医長の医師たちによる実に若々しい病院だなという印象が残っています。

さて当院の歴史は157年に及びますが、その間病院の名称も経営母体も所在地も幾度となく変更があり、非常に複雑になっています。ここでは西が岡に移転する前を紹介したいと思います。移転前当院は横浜市中区相生町3丁目55番地にありました。病院の跡地には現在はマンションが建っています。この相生町時代の昭和21（1946）年に病院名称の変更があり横浜一般病院から国際親善病院となりさらに昭和42（1967）年に現在の国際親善総合病院に改称しています。それではなぜ国際親善なのか？私も赴任した当初その理由が解りませんでした。その後当院の創立150周年記念事業の一環として創立以来の古文書を研究する機会がありその理由が見えてきました。当院は元は文久3（1863）年にThe Yokohama Hospitalとして始まった外国系の病院でした。しかし昭和19（1944）年帝国政府の指導により組織改編があり国際親善協会が病院に役員を派遣し資金を提供することとなりました。国際親善協会は、東アジア・東南アジアの各国および同盟国（ドイツ、イタリア、タイ王国）との親善をはかる政府の外郭団体で、華族がその代表を務めておりました。昭和21（1946）年の病院名称変更の時点ではこの国際親善協会はありませんでしたが、病院には国際親善協会出身の役員が現職でいらっしゃり、これを記念しての名称採用ではなかったかと私は推測しています。

国際親善総合病院
泉区移転30周年にあたって

国家公務員共済組合連合会 立川病院
消化器外科部長　亀山 哲章
（前 外科部長）

泉区移転30周年おめでとうございます。

私は、2005年（平成17年）より10年間国際親善総合病院外科にて勤務しておりました。

国際親善総合病院では、主に内視鏡外科手術を中心とした外科医としての臨床のほかに親和会（職員のレクリエーションを担当）の代表を長年やらせていただきました。食事会や観劇、スポーツ観戦など院外での催し物や院内での餅つき、バーベキュー、ドッチボール大会などはとても良い思い出です。また例年企画および司会を担当した忘年会では、多くの職員の方々にご協力いただき、とても楽しい会になっていました。特に自分が最後に司会させていただいた2015年の忘年会では病院の全部署が参加した「心のプラカード」ビデオ作成は最高傑作となりました。

そして最も印象深いことは、2008年（平成20年）8月に第1回のキッズセミナーを開催させていただいたことです。あのころは、横浜市内を始め全国でもキッズセミナーはほとんどやられていない状況であり、どのように企画していけばよいのかもよく分からない中からのスタートでした。病院で本物の器具に触れ、実際に動かすことが子供たちの重要な体験になるはずだという信念のもと、総務課伊藤さんと四苦八苦しながら企画し、学校や院内のさまざまな部署へ働きかけ、なんとか実現できました。企画、開催まで様々な反対意見もありましたが、開催された後は、参加者からの絶賛の言葉にほっと心をなで下ろしたことが懐かしく思い出されます。その後は、年々内容をブラッシュアップしながら2015年夏まで主催させていただきました。

キッズセミナーは、今でも継続開催されていると聞き、嬉しく感じております。

地域貢献の一環として始めたキッズセミナーが地域に受け入れられ、根付いていることに感謝すると共に、これからの国際親善総合病院のますますの発展を祈願し、お祝いの言葉に代えさせていただきます。

移転30周年
おめでとうございます！

藤沢市民病院
腎臓内科部長　酒井 政司
（前 腎臓・高血圧内科部長）

国際親善総合病院の皆様、この度は『移転30周年』誠におめでとうございます!

小生在職中は皆様方には大変お世話になりましたこと、この場をお借りして感謝申し上げ、また祝辞を述べさせていただく機会をも賜り、重ねて感謝申し上げます。

在職中の出来事一つ一つが今でも懐かしく思い出されますが、その中から血液浄化・透析センターの設立、感染防止対策室での活動、そして親善山登り隊の3つについて触れさせて頂きます。

2010年当時、病院経営が厳しさを増していたさなかではありましたが、当時の病院長 村井勝先生のご決断と多くの方々からの温かいご支援をもとに血液浄化・透析センターを開設して頂きました。これにより増加する慢性腎臓病患者さんの救命はもとより、自宅・社会復帰へと質の高い医療が提供できるようになりました。今後も腎臓・高血圧内科を始め貴院の益々のご発展を願ってやみません。

また院内感染防止対策室での活動につきましても、副院長の飯田秀夫先生より一からご指導頂き学ばせて頂きました。ノロウイルスのアウトブレイクに伴う一時的な病棟閉鎖やHIV患者さんの診療体制構築、レジオネラ対策など幾度となく難局が訪れましたが、多くの関係者の方々に支えられて活動を継続することができました。今なお全世界的に感染防止対策の重要性が一層高まっておりご心労が絶えないことと存じますが、ご健勝をお祈り申し上げます。

最後に診療とは別の話で恐縮ですが、親和会としての『親善山登り隊』についてです。画像診断・IVR科部長の加山英夫先生を隊長に、様々な職種からなる山好きの方々にご参加頂き楽しいレクリエーションの場となりました。理事長の山下光先生におかれましては毎回率先して参加して下さり、登山中の疲れを知らない体力に一同驚かされつつも、下山後には気さくに皆と親睦を深めて下さり楽しい山談議に花を咲かせて頂きました。

紙面の都合上まだまだ書き足りない事ばかりではございますが、国際親善総合病院は長い歴史と伝統を有し、心温かく素晴らしいスタッフが揃い、今後も泉区唯一の総合病院として地域の方々に愛され、益々ご発展されることを祈念しております。

検査室　30年を振り返り

国際親善総合病院
前 診療技術部長兼臨床検査科長
志村 等

平成元年、当時加藤英夫院長に移転する新病院の検査室を造るように声を掛けていただいて入職し、令和2年7月に定年退職したので国際親善総合病院検査室での30年は検査技師として共に歩み、集大成と言っても過言ではありません。

移転当時を考えると乗り越えてきた苦労ばかりが思い出されます。国際親善総合病院が順風満帆で30年を経たわけでない事をつくづく実感しました。設計図やフロアー配置図を見ることなく、目の当たりにした新しい検査室は実験台を並べた広い理科実験室で病院も新しさだけで患者の導線を考慮していない部署配置、狭く開けづらいドア、小さく見難い案内表示、カーペット敷きの外来廊下、事務所レベルの吸排気システム、全館一体型の温度調節できない空調システム等々。当時の病院建築を知らない建築設計会社を選び、それを指摘指示できない病院の人材不足を感じつつも、5月の連休の前後1か月は休みなしで引っ越しと検査室整備に追われました。加藤院長の口癖の「日本のメイヨークリニック」を目指すという信念のもと、一診療科を一大学医局に依頼し中堅医師を派遣してもらい、新規採用職員が一丸となって数年で泉区唯一の総合病院として外来患者が1日1,200名になるまでになりました。検査室も検体数や検査項目が増加し、手書きの検査伝票から検査システムへの移行に際し予算が無いため検査センターのシステムを代用し、高額機器が必要な免疫検査を実施するため、試薬会社に交渉して購入せずに使用するようにしたこと。病理検査室開設では病理診断を依頼するため、昭和大学や順天堂大学にお願いに行ったことなど思い出します。その後、医療政策や病院機能の改定が年々のように行われ、医局制度の変化で医師派遣の問題や診療科の再編もあり、病院機能の拡充を図るために新棟を建築し、手狭になった診察室や病室の全面改装が居ながらで行われた病院再整備では看護部と協力し独立した外来採血室を設置しました。

検査室の名称も「中央検査室」「中央検査科」「中央検査部」「臨床検査科」と変化しました。今まで当院に関与してきた多くの技師をはじめ職員によって今の検査室があると思います。これからも地域の基幹病院として地域医療を担う国際親善総合病院の益々の発展と病院の要望に応えられる検査室になることを願っています。

病院移転開院30周年おめでとうございます

元 看護部長　秋田 六子

平成5年、当時時代の先端を行く素晴らしい病院に、第4代目の看護部長として就任しました。それから約10年の長きにわたり重責を負う日々でしたが、顧みれば懐かしい事柄も数限りなく甦ってきます。なかでも、現場を担う若いスタッフの積極的でチャレンジ精神旺盛なことは現場重視の私にとってこの上もなく有り難く、スタッフと同じ目線で数々の問題改善、改革に取り組むことが出来たことに感謝すると共に、誇りに思っております。

また、森理事長、掛川院長、坂本事務長、他部署の方々に多大なご支援を頂き、成果を上げなければと若い課長たちが（当時婦長）一丸となって奮闘したことは、今でも鮮明に記憶に残っております。病院機能評価を神奈川県の第1号として取得し、全職員が一様に喜んだ時、私は皆がこの病院を好きで、愛しているのは間違いないと思い熱いものを感じました。

後半、ある意味で病院の安定期へと移行するなか、次なる課題、人材育成、チーム医療の推進を永遠のものと位置づけ、質の高いケアとは何ぞやと自分自身に問い続け、国際親善総合病院の発展を願いながら平成14年に任を終えました。定年退職後、やがて20年になりますが、この経験は大切な私の人生のよりどころと思って感謝しております。

最後になりましたが、有能な人材に恵まれた国際親善総合病院の、更なる前進をお祈りいたします。

看護を学び、成長した思い出

元 看護部長　佐藤 久子

移転開院30周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。

私は、平成6年から10年間在職させて頂き、看護部内の院内教育を担当致しました。

その教育推進では、多くの皆様に支援や協力をいただき、看護部内が大きく成長していく姿を実感することができました。中でも、毎年3月末に江の島に出かけて行った新人合宿研修、夜遅くまで看護を語り合った事例検討会などが、懐かしく思い出されます。また、看護部長として病棟に出向いた時には、かつての新人たちが立派に成長し、リーダー看護師として活躍する姿に触れることが出来、大変嬉しく、また安堵致しました。引き続き教育を充実・発展させて、質の高い看護師を育てていただきたく思います。

今、コロナ禍の苦難な時代に病院が遭遇されているのではと懸念されます。しかし、貴院に於かれましては理念を全うされ、益々地域に貢献されますよう、期待致しております。

祝辞

来客を大切にする急性期病院において

元 看護部長　野原 千代子

この度は、移転開院30周年おめでとうございます。心よりお祝いを申し上げます。

私は、縁あって2003年4月に親善病院に就任いたしました。親善病院で過ごした4年間は、私の現役看護師としての役割を締めくくる貴重な思い出となりました。

親善病院の当初の印象は、急性期病院でありながら穏やかな雰囲気で、職員の対応も物腰やわらかく心地良いものでした。

また、外来の一画には重厚な絵画が掲示され、豊かな気分になれる工夫もありました。

病院として「来客を丁寧に迎える」という姿勢が周知徹底されていると感心しました。

看護部の課長達は、中間管理職として役割を充分に果たしてくれました。

中堅看護師の活動も目を見張るものがありました。認定看護師としての活動や助産師として「母乳育児支援」等、医療の質向上に寄与していました。職員は病院に愛情があり、親善病院の発展を願い努力している方々でした。

30周年記念に寄せて

前 看護部長　松田 慶子

移転開院30周年をお祝い申し上げます。

厳しい医療環境の中で地域の住民の方々にとり、なくてはならない病院として信頼され、質の高い医療の提供とともに、安定した経営が行われていることにお慶び申し上げます。

私は、平成20年より勤務させていただきましたが、職員の一人ひとりの方が病院を愛し、病院のために働く意識も高く、誇りを持ち勤務されていたことを思い出しています。

また、看護部門においては病院のバックアップのもと、職員の継続した育成にも力が注がれ、学ぶにつれて高まる意欲を支援する体制もあり、平成23年からは看護部長も内部登用で昇格し、現在も遺憾なくその力を発揮しています。また、今回の世界的感染症に対しても、その高い専門性を持つ職員の力が発揮されていると思っています。

病院を愛する一人ひとりの職員のもと、国際親善総合病院が今後益々の発展を遂げられることを念じております。

目次　Contents

2　病院の理念

3　患者さんの権利・責務

4　ご挨拶

4　山下 光　理事長
6　安藤 暢敏　病院長
8　飯田 秀夫　副院長
清水 誠　副院長
9　佐藤 道夫　副院長・外科部長
楠田 清美　副院長・看護部長

10　祝辞

10　渡辺 豊彦　渡辺こどもクリニック　院長（元 小児科部長）
11　多和田 哲雄　多和田レディースクリニック　院長（元 副院長・産婦人科部長）
12　山本 くるみ　やよい台クリニック　院長
13　山中 修　ポーラのクリニック　院長（元 循環器内科部長）
14　髙橋 寛　昭和大学藤が丘病院　病院長・消化器内科教授（元 消化器内科部長）
15　本田 守弘　リハパーク舞岡　施設長（前 総合内科部長）
16　山田 裕道　国際親善総合病院　前 皮膚科部長
17　亀山 哲章　国家公務員共済組合連合会立川病院　消化器外科部長（前 外科部長）
18　酒井 政司　藤沢市民病院　腎臓内科部長（前 腎臓・高血圧内科部長）
19　志村 等　国際親善総合病院　前 診療技術部長兼臨床検査科長
20　秋田 六子　国際親善総合病院　元 看護部長
佐藤 久子　国際親善総合病院　元 看護部長
21　野原 千代子　国際親善総合病院　元 看護部長
松田 慶子　国際親善総合病院　前 看護部長

24　特別企画　歴代病院長対談 ～受け継がれる「親善」の精神～

29　第Ⅰ部　親善のあゆみ

History

30　1981～1990
32　1991～2006
34　2007～2014
36　2015～

国際親善総合病院系譜

38　理事長・病院長
39　各部長職

42　3.11　～あの日を忘れない～
44　創立 150 周年を振り返って
50　数字から見る国際親善総合病院　管理部長 林秀行

55　第Ⅱ部　親善の今

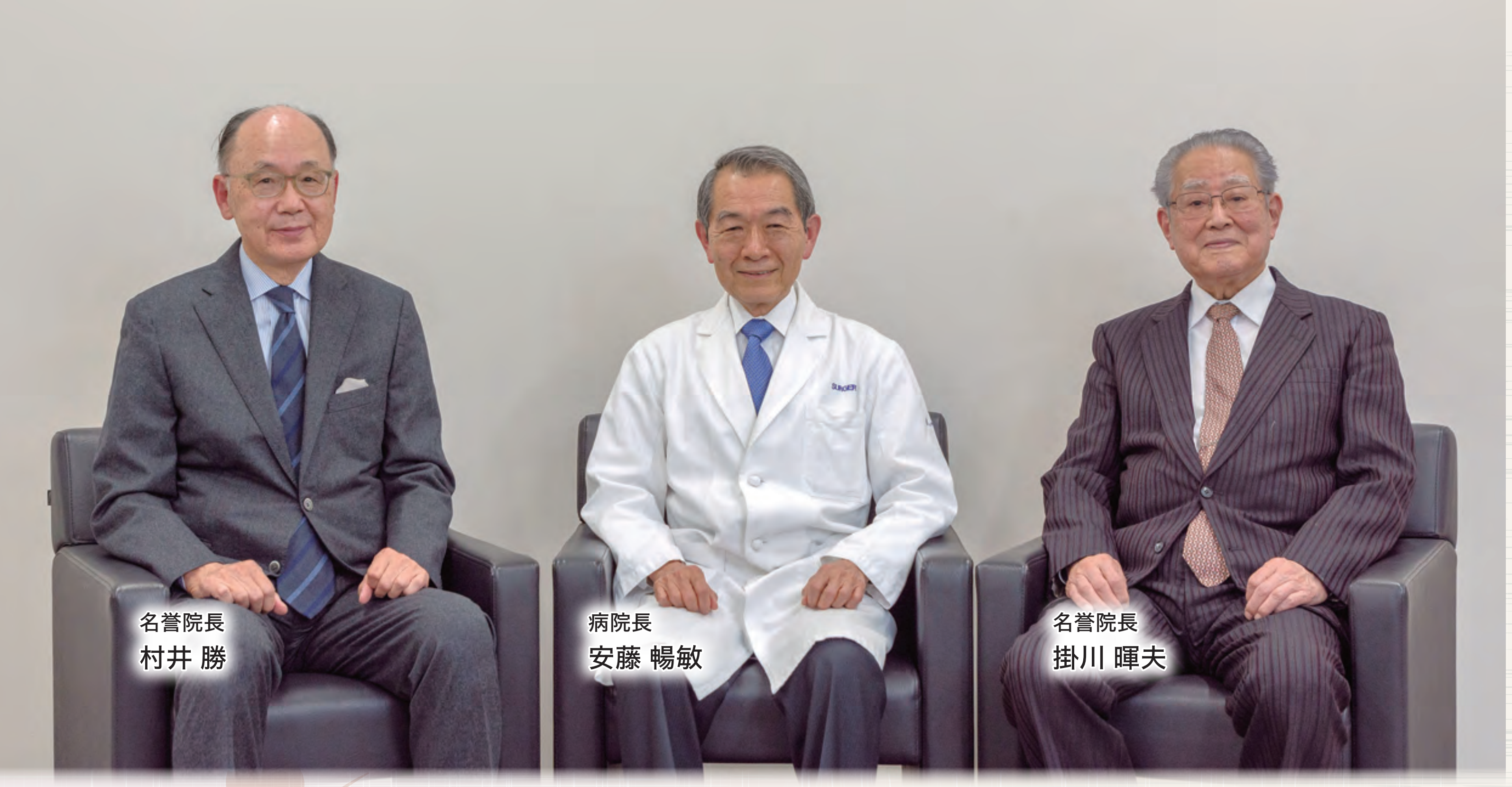
56　各診療科・部門・診療技術部門紹介
95　歴代研修医紹介
99　感染防止対策室紹介・インタビュー
～新型コロナウイルス感染症（COVID-19）との闘い、そして共生へ～

105　第Ⅲ部　そして未来へ

106　若手職員座談会
110　未来への展望
114　Memories

121　資料編

134　シンボルマーク
135　職員一言メッセージ
142　編集後記



特別企画

—— 歴代病院長対談 ——

受け継がれる「親善」の精神

2020年5月に泉区西が岡移転30周年を迎えた国際親善総合病院。
平成の始まりからこの地で良質な医療を提供し続け、病院を牽引してきた歴代病院長に
今日までのあゆみをそれぞれの観点から語って頂きました。

取材日　2020年12月2日

◆30周年を迎えて

—まずはこれまでの道のりを振り返っていかがですか

安藤：当院に関わる全ての皆様に改めてお礼を申し上げます。ここ数年は再整備事業により、新館棟建設や本館棟改修整備事業の完了や、大型医療機器の整備、緩和ケア病棟の新稼働、分娩の再開、「しんぜんクリニック」の開院など、院内外で当院総力あげてイノベーションが進みました。現在は新型コロナウイルス感染症対応に追われていますが、次の10年、30年に向けて歩み続けるためにも、これからも成長し続けていかなければなりません。

村井：当院は移転以来、地域の急性期中核病院として順調に発展を遂げてきましたが、これもひとえに先人の方々がそれぞれの時代に弛まぬ努力を続け築き上げてこられたお蔭です。私の在任は2007年から８年間でしたが、その間、森英雄前理事長、そして山下光理事長のご指導の下で永年の懸案だった病院再生整備計画が進んだほか、150周年記念事業など思い出深い出来事が多くありましたね。

掛川：私の副院長時代、城所病院長先生から拝聴したことですが、30年前の西が岡移転時に病院長をお務めになっていた加藤名誉院長先生は、この立地を米国のロチェスターになぞらえ、「国際親善総合病院を日本の『メイヨー』に」と職員を鼓舞したとされています。着任期間中はとにかく、そんな先輩の想いを継承すべくひたすら走り続けた記憶があります。

—「日本のメイヨーに」という言葉がありましたが

村井：メイヨー・クリニックは患者のニーズを第一とし、毎日全ての患者に最善の治療を提供するというミッションを掲げた全米で最も優れた病院の一つに数えられていますね。

掛川：ええ。日本のメイヨーを目指す第一歩として、まずは「病院の現状を忌憚なく他人から評価されること」からはじめようと、日本医療機能評価機構の認定を目標としました。しかし、当時病院は当事者が常に謙虚で反省し改善を重ねていくもので、他人からとやかく評価されるものではないとの意見が多かった。

安藤：そのような理由で、当時は積極的に受審する病院が少なかったようですね。日本にはおよそ8000の病院がありますが、現在でもそのうち1／4しか受けていないというデータもあります。

掛川：ええ。しかし外部から評価して頂いてこそ本物。審査条件は厳しかったですが、県下第1号認定を取得しました。それをクリアするため、同じ目標に向けて皆がひたすら努力する。病院全体がひとつになった瞬間でもありましたね。

先人の想いを継承すべく ひたすら走り続けた

村井：認定後は各病院から見学が増えたとか。ちなみにその際に掛川先生によって策定されたのが現在の当院の理念ですね。

掛川：理念を明確に提示することが病院長の責務でもありましたから。「良質で、親切で、信頼される医療の提供」。先輩方の意見を参考にさせて頂きながら決めました。職員の皆さんにはこの理念をあらためて胸に刻んでいって頂きたい。

—ほかにも印象深い出来事が沢山あると思います

村井：掛川先生は得意な歴史に合わせて本院を徳川幕府になぞられたことがあります。加藤・城所病院長時代を関東の地に移封を命じられ、住民と融和を図り自己の存在を周知徹底することに邁進した家康に。そしてご自身を幕府の組織形態を磐石なものとした第2代将軍秀忠に。そして3代目家光以降に受け継がせ、

徳川幕府、すなわち国際親善総合病院の300年の基礎を築くことを願うものです。自身の責任の重さを身に染みて感じた瞬間でしたね。

掛川：印象深い出来事といえば、医師会の先生方との週１度の会合です。関内から西が岡へ移転してきたころは、やはり大きな総合病院ができるということで、もともとこの地で開業された先生方からはやはり不安の声が上がっていましたから、貴重な意見交換の場でもありました。今では共に地域医療を支える良い関係になっています。

村井：先ほども申し上げましたが、2013年に実施した150周年記念事業も我が病院にとってそれは大きな出来事でした。記念式典では職員一同が先人の業績を敬い歴史を誇りに思うと同時に、あらためて医の原点に立ちかえることを誓いました。また記念講演会の演者として森喜朗元総理も駆けつけてくださいました。当時は東京オリンピック招致活動が話題となり時の人としてマスコミを賑わせていらっしゃる方が泉区にきて頂けるということで一層盛り上がりましたね。

―新型コロナウイルス感染症との闘いもまさに歴史に残る出来事ですね

安藤：感染拡大に伴い、当院も行政からの要請で重点医療機関協力病院として緊張感をもって対応してきました。2019年には病院機能評価の4回目となる更新認定（3rd G：Ver.2.0）がありましたが、評価は全90項目、そのうち82項目が「A」、6項目が「B」でした。そして残り2項目が最上級評価の「S」。このうちのひとつは「感染予防」に関する項目でした。

―それほど感染予防対策のレベルが高いということでしょうか

安藤：今回のコロナ禍においても、2020年2月の半ばから、感染症看護専門看護師などが所属する感染防止対策室が中心となって対応してきました。各方面のご協力もあり、院内感染ゼロを続けています（2021年1月現在）。まだまだ終わりの見えない闘いではありますが、とにかく区内医療機関との連携を更に強化し地域医療を守りぬきたい。その一心です。

150年以上受け継がれてきた想いや情熱は誇り

―ずばり、国際親善総合病院の魅力とは

村井：やはり長い歴史があるところでしょうか。当院の前身は1863年、現在の中区に、欧米人を中核とする委員会により設立されたヨコハマ・パブリックホスピタル（YPH）、さらにこれを承継したヨコハマ・ジェネラルホスピタル（YGH）です。そこから150年以上受け継がれてきた想いや情熱は誇りであり、今後も引き継いでいかなければならない責任でもあります。

掛川：YGHの委員会が運営した関内の横浜一般病院では昭和20年の横浜大空襲の際、職員総出の消火で類焼をまぬかれ診療を継続したという話もありますね。地域の医療を守るためにはまず自分たちが務める病院を守る。今でもそういった精神の人が多い。とにかく人が良いんです。あと、私が好きだったのは病院長室から見る緑豊かな景色でしょうか。昔は弥生台駅の方までバッチリ見えたんですよ。

安藤：確かに立地条件には恵まれていますね。緑があって空が広い。心晴れやかな気分になります。2018年に再整備が完了したこともあり、他の病院の方から「きれいな病院ですね」と評価いただきます。そういった雰囲気も関係してか、職員間の風通しも良いのではないでしょうか。縦割りに囚われず、自由闊達さがあります。

◆未来への誓い・期待すること

―これからの親善に期待することは

掛川：名前のイメージから「外国の人専用の病院ですか」なんて在任当時もよく問われたものですが…今後は「国際親善」の名に相応しい、つまり外国籍の方も気軽に受診できるような機能が揃った病院になって欲しい、といったところでしょうか。泉区内には県営のいちょう団地があることも起因して、大半は中国かベトナムの方です。近年ではボランティアの医療通訳を年間100件ほど依頼しているそうですね。

安藤：はい。新型コロナの影響で意味のない数字とはなってしまいましたが、インバウンドが今年度にも4千万人を超過するだろうともいわれていましたね。ただ今後10年、20年先を見据えれば今後も増加していくであろう訪日、あるいは在留外国人への対応は必ず必要になってきます。すでに、当院でも外国人患者対応力の強化や院内標示や必要書類の多言語化などを進め、外国人患者受入れ医療機関認証制度（JMIP）による施設認定を受けました。

村井：そうですね。合わせて医療ツーリズムに対応出来るような体制が必要でしょう。国際的なイベントが開催されれば観光客が増える事は間違いないし、その人たちが次に何を求めるかを考えれば医療問題は欠かせない。まずは国内の外国人対応の充実を図り、それを基盤に外国人を海外から呼び込む。外国人対応の充実は、医療ツーリズムの基盤ともなりますね。逆に言えば、自国在住の外国人に喜んでもらえる対応ができない医療レベルであったなら、その国に医療を求めに海外から足を運ぶということはありえないですから。

―最後に職員に向けてメッセージを

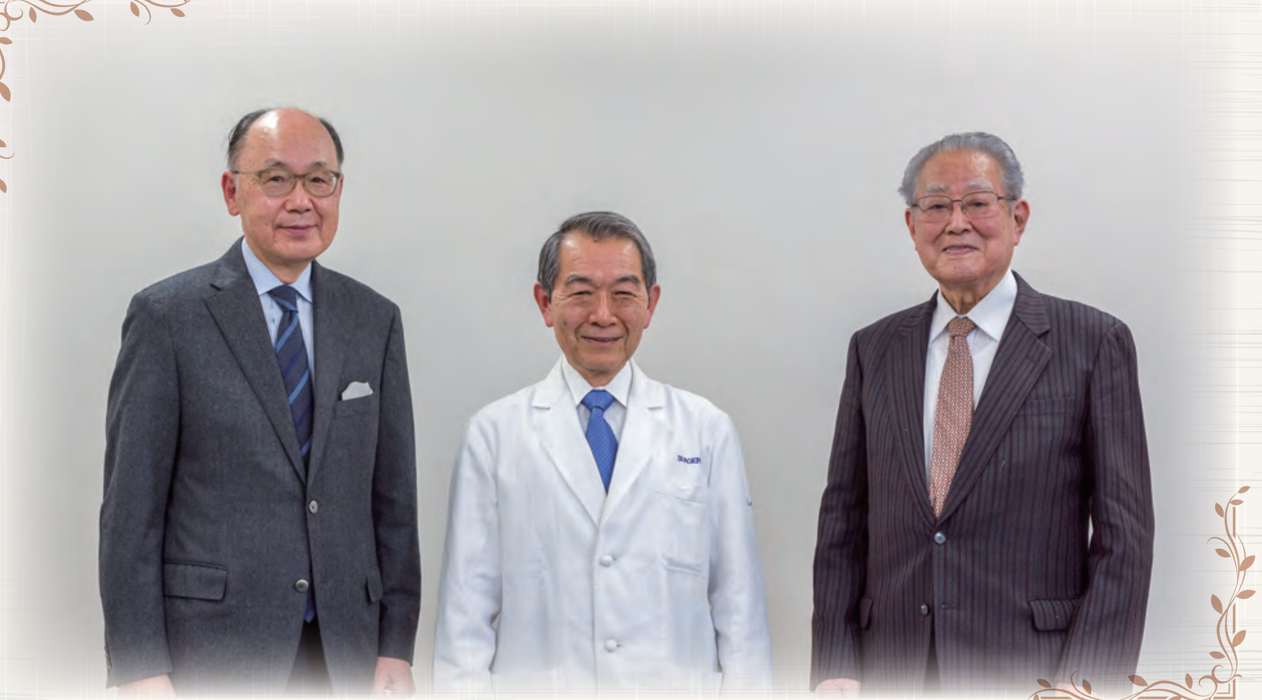
村井：医療を含めた社会情勢は非常に厳しいですが、私たちの病院は不幸にして病を得た方々の立場に立ち、ともに病に立ち向かうという医の原点を追求することを通じ、広く社会に奉仕する病院であり続けたいと願います。この現状を職員全員で打破し、良質な医療、親切な医療、そして信頼される医療の実施という病

近隣医療機関との連携を強化し地域医療を守りぬく

院の理念推進に努力していきましょう。

掛川：150年以上前から先輩たちの知恵と汗と涙の結晶が今日までの親善を形作ってきたと思います。或る学者の名言に「過去が歴史ではなく、現在を決定する過去が歴史である」というものがありますが、現職員諸兄等が病院の現状を真摯に考え改善し、向上に研鑽し、努力する姿を示すことが後輩に語り伝えられ歴史として残されると考えています。各自、その意気込みで努力し、先輩の業績を参考に医療の原点に立ち返り、社会から負託された使命に対する責任を果たしていって欲しい。

安藤：「自分の病院が好きでなければ、良い医療は提供できない」。私も諸先輩方から何度も教わった言葉です。自ら働きやすい職場をつくるためには、仕事を好きになり、スタッフ同士がお互い尊重しあい、院内の問題を解決し、皆が気持ちよく働ける環境づくりを行うことが大切です。職員の皆さんにはこれからもこの国際親善総合病院を好きであってほしい。これは一番シンプルだけれど、一番重要なことではないでしょうか。その上で、この病院に「何をしてもらえるのか」ではなく、この病院のために「何ができるか」を考えて欲しい。実際に考えてくれている職員も沢山います。今こそ、私たち一人ひとりにできることは何かを考える必要があることを胸に留めておいてください。



第Ⅰ部

親善のあゆみ

1981年(昭和56年)

1月　●森 英雄 理事長 就任

1985年(昭和60年)

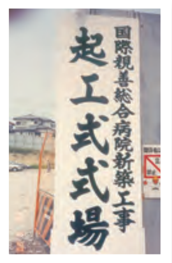
1月　●加藤 英夫 病院長 就任

1987年(昭和62年)

9月　●医師会との基本協定成立

1988年(昭和63年)

●病院建設発注(大成建設)、宿舎花水木発注(三井不動産建設)



1990年(平成2年)

5月8日　●横浜市泉区西が岡に移転開院

一般内科・消化器内科・循環器内科・呼吸器内科・神経内科・心療内科・小児科・外科・脳神経外科・整形外科・産婦人科・皮膚科・泌尿器科・眼科・耳鼻咽喉科・放射線科・麻酔科の17診療科、300床

国際親善総合病院
新築・移転 オープン
外来診療は8日から

1990年5月4日 10面 神奈川新聞、同社提供、複製禁止

8月　●法人名を「社会福祉法人親善福祉協会」に名称変更
（病院の名称は「国際親善総合病院」を継続）

History 1991～2006

1991年(平成3年)　7月

●ICU・CCU開床

●新病院開院一周年記念誌

●加藤 英夫 病院長 退任

1995年(平成7年)　4月

●加藤 英夫 名誉院長 就任

●城所 仂 病院長 就任

●外来人間ドック開始

当時の病院だより▶

1997年(平成9年)　4月

●城所 仂 名誉院長 就任

1997年(平成9年)　4月

●掛川 暉夫 病院長 就任

●内分泌内科開設

●産科棟を増築

8月

●オーダリングシステム導入

1998年(平成10年)　10月

●財団法人日本医療機能評価機構から病院機能評価（Ver. 4.0・一般病院種別B）の認定証を発行される（神奈川県内第一号）

1999年(平成11年)　6月

●中国からの看護留学生受入

2001年(平成13年)　3月

●厚生労働省から臨床研修病院に指定される

4月

●地域連携室開設

2003年(平成15年)　11月

●財団法人日本医療機能評価機構から病院機能評価(一般病院)の更新認定証を発行される。

2004年(平成16年)　5月

●腎臓内科開設

2005年(平成17年)　4月

●呼吸器科開設

2006年(平成18年)　4月

●救急部開設

親善のあゆみ　2007年(平成19年)～2014年(平成26年)

History 2007～2014

2007年(平成19年)

4月
- 掛川 暉夫 名誉院長 就任
- 村井 勝 病院長 就任

2008年(平成20年)

1月
- 中央手術室1室増室
  中央材料室改修

4月
- 院内保育園開園

11月
- 助産師外来開設

2009年(平成21年)

1月
- 山下 光 理事長 就任

2月
- 財団法人日本医療機能評価機構から病院機能評価（Ver. 5.0・一般病院）の更新認定証を発行される

4月
- 医療安全管理室設立

6月
- 医療機器管理室設立

7月
- DPC導入

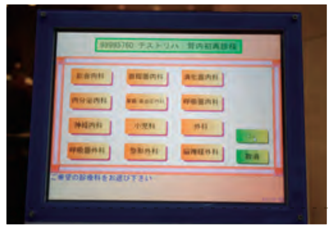
2010年(平成22年)

2月
- 2B病棟用途変更(小児科病棟→血液浄化・透析センター)

4月
- 人工膝関節センター開設

2011年(平成23年)

5月
- 電子カルテ導入
- 院外処方開始



2012年(平成24年)

2月
- 内視鏡センター開設

4月
- 感染防止対策室設立
- 患者サポート室設立

2013年(平成25年)

7月
- 国際親善総合病院創立150周年式典

- 外来化学療法室設立

2014年(平成26年)

1月
- 創立150周年記念講演会

8月
- 新館棟工事着工

2015年（平成27年）

4月

●村井 勝 名誉院長 就任

●安藤 暢敏 病院長 就任

8月

●新館棟開設

10月

●本館改修工事着工

2016年（平成28年）

4月

●緩和ケア病棟・患者総合相談部・健康管理室・入退院支援室設立

がん緩和ケアを語る

2015年9月23日 6面 神奈川新聞、同社提供、複製禁止

2017年（平成29年）

1月

●サテライトクリニック開設準備室設立

4月

●分娩再開

11月

●しんぜんクリニック開設

2019年（平成31年／令和元年）

3月

●病院機能評価（Ver.2.0・一般病棟2）の更新認定

年代	理事長の系譜	病院長の系譜
1981年（昭和56年）	森 英雄	
1985年（昭和60年）	↓	加藤 英夫
1995年（平成7年）	↓	城所 仂
1997年（平成9年）	↓	掛川 暉夫
2007年（平成19年）	↓	村井 勝
2009年（平成21年）	山下 光	↓
2015年（平成27年）	↓	安藤 暢敏

診療科目	年代	氏名
一般内科→総合内科	昭和52年	樋口 良雄
	平成 6 年　5 月	本田 守弘
	平成20年　9 月	中山 理一郎
消化器内科	平成 2 年　5 月	高橋 寛
	平成 4 年　4 月	鈴木 悟司
	平成18年　4 月	岡﨑 博
	平成22年　4 月	鹿野 千行
	平成22年　10月	横山 顕礼（医長）
	平成23年　7 月	久行 友和（医長）
	平成24年　4 月	猪 聡志（医長）
	平成25年　4 月	日引 太郎
循環器内科	平成 2 年　6 月	山中 修
	平成16年　4 月	有馬 瑞浩
	平成16年　4 月	中山 理一郎
	平成19年　9 月	清水 誠 ＊有馬、清水部長2人体制
糖尿病・内分泌内科	平成27年　4 月	本間 正史
呼吸器内科	平成 2 年　5 月	鈴木 光子
	平成 5 年　11月	高田 信和
	平成 8 年　4 月	久保田 勝
	平成10年　4 月	泉 靖弘
	平成11年　4 月	吉村 尚高
	平成25年　7 月	中田 裕介
呼吸器外科	平成17年　4 月	藤森 賢
	平成18年　8 月	中川 知巳（医長）
	平成20年　4 月	中村 雄介（医長）
	平成21年　5 月	古泉 貴久（医長）
	平成22年　4 月	大岩 加奈（医長）
	平成25年　4 月	生駒 陽一郎（医長）
	平成28年　4 月	濱中 瑠利香（医長）
	令和 2 年　4 月	成毛 聖夫
腎臓内科→腎臓・高血圧内科	平成16年　5 月	尼ケ﨑 安紘
	平成21年　4 月	酒井 政司
	平成30年　4 月	安藤 大作
脳神経内科	平成 2 年　6 月	宮川 弘一
	平成 6 年　11月	三富 哲郎
小児科	平成元年　1 月	入戸野 博
	平成 4 年　1 月	渡辺 豊彦
	平成 9 年　3 月	石川 明道
	平成22年　8 月	堀田 英夫
	平成28年　4 月	畑岸 達也

診療科目	年代	氏名
外科	平成元年　9月	中川 浩之
	平成10年　1月	森脇 稔
	平成19年　7月	亀山 哲章
	平成27年　4月	佐藤 道夫
整形外科	平成元年　10月	横山 一彦
	平成4年　4月	北見 圭司（医長）
	平成5年　4月	関口 昌和（医長）
	平成6年　4月	北見 圭司（医長）
	平成8年　4月	利根川 雅俊
	平成9年　7月	大高 文典（医長）
	平成10年　4月	小宮 宏一郎
	平成12年　4月	関 忍（医長）
	平成15年　8月	宮坂 敏幸
	平成21年　4月	野村 栄貴
	平成24年　1月	山下 裕
脳神経外科	平成2年　5月	遠藤 昌孝
	平成6年　4月	飯田 秀夫
産婦人科	平成2年　5月	多和田 哲雄
	平成22年　2月	今村 利朗
	平成26年　4月	鈴木 幸成
	平成27年　4月	毛利 順
	平成28年　4月	多田 聖郎 ＊毛利、多田部長2人体制
	令和2年　4月	地主 誠 ＊多田、地主部長2名体制
眼科	昭和62年　6月	杉田 美由紀
	平成3年　6月	磯部 和美
	平成4年　6月	岡田 和四郎
	平成15年　4月	椎野 めぐみ
	平成18年　4月	鈴木 高佳
	平成21年　4月	永野 葵
	平成22年　4月	平井 香織
	平成27年　4月	四元 修吾
	平成29年　4月	大西 純司
耳鼻咽喉科	昭和64年　1月	木村 裕（医長）
	平成2年　12月	寺山 善博（医長）
	平成3年　12月	堀越 秀典（医長）
	平成4年　12月	寺山 善博（医長）
	平成5年　12月	山中 由美（医長）
	平成6年　8月	折原 廣己（医長）
	平成8年　9月	大林 聡子（医長）

国際親善総合病院 系譜 各部長職

診療科目	年代	氏名
耳鼻咽喉科	平成10年　6月	吉邨 博孝（医長）
	平成11年　6月	清水 昭邦（医長）
	平成12年　12月	三宅 孝功（医長）
	平成14年　12月	高橋 圭一（医長）
	平成15年　6月	殿内 一弘（医長）
	平成16年　6月	安田 真美子（医長）
	平成18年　6月	瀬戸 由記子（医長）
	平成21年　4月	山本 雅史（医長）
	平成23年　6月	佐々木 優子（医長）
	平成26年　6月	井田 裕太郎（医長）
	平成28年　10月	大久保 はるか（医長）
皮膚科	平成2年　5月	山田 裕道
	令和元年　4月	李 民（医長）
	令和元年　10月	松井 矢寿恵
泌尿器科	昭和54年　6月	穂坂 正彦
	平成2年　9月	高橋 俊博
	平成4年　6月	北見 一夫
	平成11年　6月	村井 哲夫
	平成28年　4月	滝沢 明利
理学診療科→放射線科→画像診断・IVR科	昭和41年　8月	谷井 東助
	平成4年　4月	平岩 隆男
	平成13年　7月	長濱 敏郎
	平成16年　10月	加山 英夫
麻酔科	平成2年～平成7年	森本 冬樹（医長）
		出原 郁（医長）
		中溝 玲恵（医長）
		日比野 美治（医長）
		能美 俊浩（医長）
		小沢 芳樹（医長）
	平成8年　4月	森本 冬樹
	平成31年／令和元年4月	佐藤 玲恵
緩和ケア内科	平成28年　4月	村井 哲夫
病理診断科	平成26年　4月	光谷 俊幸
心療内科	平成2年　5月	平 陽一
	平成8年　10月	中島 弘子
	平成9年　12月	滝井 英治
	平成12年　1月	久松 由華
	平成12年　11月	羽仁 真奈美
	平成15年	心療内科閉鎖

3.11 東日本大震災　～そのとき私たちは～

副院長　飯田 秀夫

当院では2011年3月11日は4月1日より初めての電子カルテシステムを起動させるため、飯田・梅田清隆（薬剤部長）中心に職員全員は準備が忙しい中の出来事でした。

地震時、ICUは呼吸器装着患者・大動脈バルーンパンピングの装置をつけた患者がいましたが、左右に機械が動いただけで、問題ありませんでした。

手術室では開胸手術が行われていましたが、止血後一時中断し、ライフライン・建物に問題ないことを確認し手術を再開しました。

ただ、地震の影響でエレベーターは止まり、停止中手術患者は術後一旦ICUまたは2階病棟へ入室させました。

救急外来での傷病者の搬入は特に多くありませんでした。

交通機関が止まっていたため、面会者の方で帰宅できない家族は患者のそばに付き添いベッドを置き泊まっていただきました。

その日の夜、当院西が岡地区は煌々と電気がついて明るかったですが、駅に向かう場所は真っ暗だったのが印象的でした。

その後も、当院は計画停電になりませんでした。その後、横浜市の要請で清水誠（循環器内科）・谷崎義徳（脳神経外科）・葉山国城（麻酔科）・佐々木妙子（研修医）先生に気仙沼地区を中心とした東北での医療支援にあたってもらいました。

電子カルテシステムは、最終的に同年5月1日に起動し、現在もバージョンアップした同じシステムが止まることなく稼働しています。

3.11の地震は特に当院への直接の影響はあまりありませんでしたが、2020年新型コロナウィルス感染が流行しており、大きな地震に対して災害救護場所を発熱の有無で傷病者の場所を分けるなどの傷病者の搬入の訓練を行い、災害に備えて行っております。

横浜市災害派遣医療チームに参加して

診療部長　清水 誠

【平成23年4月11日午後2時46分】

「私の腰が痛いのは若いころからで…」気仙沼市郊外の公民館を往診していた私たちが、側腹部痛を診てほしいという高齢女性の話を聞いている時、市内各所から長く続くサイレンの音が聞こえ、あちらこちらからお寺の鐘の音が響いた。マグニチュード9.0の地震とそれに引き続く未曾有の津波によって東北関東各地に大きな被害をもたらした東日本大震災からちょうど1ヶ月目のこの日この時、1分間の黙祷が行われ、我々は診察途中であったが手の動きを止めた。既往歴を話していたこの女性も周りの雰囲気に気付いて言葉を止め、公民館の中でゲームをしていた子供たちも静かになり、辺りを静寂が一瞬包んだ。「あの時からすべてが始まったんだね」女性は小さな声でつぶやき、1ヶ月間の記憶が蘇ったのであろうか、涙ぐんでいた。

横浜市災害医療派遣チームの第9班として当院の清水・佐々木医師が、第10班として谷崎医師が、震災と津波により市の中心部も含め壊滅的な被害を受けた宮城県気仙沼市に派遣されました。横浜市内の2次救急病院などから参加医師・看護師を募集し、5−6名のチームを結成し、4日間ずつ現地で主として避難所の救護室にて診察にあたりました。

横浜市健康福祉局の手配で往復の車・現地での宿舎・食事などは確保され、市の職員に運転手兼事務員として同行していただきました。担当した避難所の中学校では、体育館に約300名の被災者が、マットを敷いて毛布にくるまって避難生活をしており、中学校の保健室を臨時の診察室にして被災者の診療にあたりました。診療内容は我々が行った頃には外傷などは皆無で、集団生活のストレス（不眠）や慢性疾患（高血圧、喘息）、花粉症、感冒、胃腸炎など日常的な疾患の患者が主で、薬剤は不足なく供給されていました。電気・携帯を含めた電話は復旧していましたが、上下水道・ガスは開通していないため、集団生活と仮設トイレで衛生面では不安があり、急性腸炎などの発生には特に注意していた時期でした。

東京都や山形県などから来た医師看護師・薬剤師などと一緒に短い期間でしたが医療を真に必要としている人の力になるという面で医療の原点に触れた思いがしました。

震災・津波の被害の惨状には言葉もなく立ち尽くすしかできませんでしたが、この貴重な経験を日常診療に生かしていきたいと心に誓いました。温かく我々を送り出してくださいました村井病院長をはじめとするスタッフ、そして休診等で御迷惑をおかけいたしました患者さんに心より御礼申し上げます。

病院だより　平成23年5月10日号より

創立150周年を振り返って

記念式典・祝賀会

1863（文久3）年、現在の横浜市中区に、国際親善総合病院のルーツであり、外国人居留民からなる委員会による公共病院「The Yokohama Public Hospital」が誕生しました。それから150年。先人が医療を含めた近代文明を日本に伝えた功績に感謝し、その実績を深く心に留め、医療を営む社会福祉法人として、社会に貢献する意識を再確認するため、2013年7月13日、ホテルニューグランドタワー館3階ペリー来航の間で、国際親善総合病院創立150周年記念式典が開催されました。

当日は山下光親善福祉協会理事長の主催者挨拶にはじまり、来賓の御挨拶として元内閣総理大臣森喜朗氏、神奈川県知事黒岩祐治氏、横浜市副市長の鈴木隆氏のスピーチがありました。祝辞はその後、横浜市医師会副会長白井尚氏、横浜市病院協会長吉井宏氏と続き、泉区医師会長鈴木正比古氏の御発声で乾杯となり祝宴へと移りました。

会場には当院に所縁のある医師会・病院関係者や行政関係者、大学関係者や職員OB、現役職員も含め計213名が集まり、賑やかな情報交換や挨拶の場となりました。

その後、当院と同じルーツをもつ特例財団法人ブラフホスピタル理事長のリム・カーヒン氏および、同理事のメリー・コーベット氏から温かい祝辞をいただきました。その後、当院での勤務経験もある横浜総合医学振興財団理事長井出研氏からも祝辞をいただいた後、当院の村井勝病院長より、主催者を代表しての挨拶が行われました。 当院の150年におよぶ歴史の重みと、未来に向かって更に成長していく想いを込めた「さらなる一歩を明日へ」という力強い言葉で締めくくられました。（本文中の肩書きは当時のもの）

リム・カーヒン理事長

メリー・コーベット理事

森 喜朗 元総理大臣

黒岩 祐治 神奈川県知事

村井 勝 前病院長

社会福祉法人親善福祉協会　国際親善総合病院
創立150周年記念式典・祝賀会

記念講演会

2014年1月11日には150周年記念講演会が泉公会堂で開かれました。当日は特別ゲストとして元内閣総理大臣 森 喜朗氏が登壇し、村井前病院長との出会いや総理就任前後の政界の出来事、そして150周年を迎える当院への敬意の言葉を頂きました。

150周年記念講演会を終えて

150周年記念講演会実行委員会委員長
看護部副部長　志村 由美子

150周年記念講演会は平成26年1月11日(土)、泉公会堂で開催されました。新しい年を迎えたばかりの冬晴れの午後、多くの参加者をお迎えすることができました。

この記念すべき講演の演者として森喜朗元総理にお越しいただけたことと思っています。

150周年記念講演会実行委員会では演者の選定に難航し、なかなか決定しないなかで村井勝病院長から森元総理のお名前が挙がりました。ご本人から承諾のお返事をいただいた時は、実行委員一同感激し講演会準備にも力が入りました。講演会の参加は事前申し込みとしましたがわずかな期間で定数を超え、森元総理の人気の高さが伺えました。昨年(2013年)は東京オリンピック招致が決定し、時の人としてマスコミを賑わせていらっしゃる方が泉区に来ていただける機会は希少なことです。当日もキャンセル待ちの方も含め、592人の方に参加していただき盛況な会となりました。

講演会に先立ち、当法人理事長 山下光の開会あいさつがあり、つづいて森元総理の「わが人生」と題された講演が始まりました。政界の大物と言われる所以か、最初から会場の皆さんを引きつける登場でした。通常講演会では演者が登壇すると演壇のみ明るくし、会場の照明は落とすのが恒例ですが、森元総理は会場の明かりをつけることを指示され、会場の参加者の顔が見え、反応が確認できるように配慮される所など最初から話に引き込まれていきました。

村井病院長との出会い、病気になってからの出来事、総理就任前後の政界の出来事、大学時代やラグビーの話など人生の一端をお話しいただきました。随所に総理の生き様として「人のために動く・働く」「相手を思いやる気持ちを持つ」などストレートに心にはいってきました。ラグビーのスピリッツである「ワンフォアオール、オールフォアワン」は、スポーツのみならず医療に携わる人、あらゆる人、社会生活のなかでも大切なことです。また、話のなかに村井病院長への感謝の気持ち、150周年を迎える当院への敬意の言葉を盛り込むなど相手を思いやる気持ちを感じました。時には、歯に衣着せず単刀直入な言葉があるのですが、ユーモアがあってなぜか笑ってしまうほど和気藹々とした講演会でした。

森元総理の話を直接聴けたことは貴重であり、内容も素晴らしく会場の方も十分満足したお話でした。時間の都合上1時間の講演でしたが、明日への活力が湧いてくるそんな内容でした。そしてもちろん去り方も「これから病院長の貴重な話があるから帰らないように」とお言葉を残し、盛大な拍手と共に仕事に戻っていかれました。

最後は村井病院長から病院の歴史、今後の展望について話があり、盛況のうちに会を終えることができました。実行委員をはじめ職員で、受付から誘導、照明や音声までを分担し、当院の長所である結束されたチーム力を発揮できた会でもありました。

『創立150周年記念誌 国際親善ものがたり』(2015) より

数字から見る国際親善総合病院

管理部長　林 秀行

日本病院会雑誌（1994年4月）に森英雄前理事長の寄稿「国際親善総合病院の縁由と現状」があり、その中に以下の記述がある。

「本年度ようやく減価償却前トントン、結果的には相当額の減価償却費がそのまま欠損という状況で、これは私なりの常識では、異状といってよいのではないかと思っております」

さて最近の業績はどうであろうか。直近の決算である2019年度、およびそれから過去5年にわたって決算状況を見たものが表1である。

19年度の当期活動増減差額は△107百万円。減価償却費が200百万円であるから減価償却費がそのまま欠損という状況ではない。さらに言えば、病院は法人本部に対して土地・建物賃借料を370百万円支払っている。病院の土地・建物は法人本部が所有しているため、建物の減価償却費分を賃借料という形で病院から法人本部に支払っている。これを勘案すると欠損額は減価償却費を463百万円下回っていることがわかる。

5年前を見てみよう。14年度の当期活動増減差額は△510百万円。減価償却費、土地・建物賃借料を合わせた額は367百万円であるため、欠損額はこれを143百万円上回っている。したがって前理事長が冒頭のように嘆いていた時期よりも業績はさらに悪化している。しかしその後の推移を見ると、16年度を除いて欠損額は減価償却費＋土地・建物賃借料を下回っており、その額も縮小しているため、業績は改善してきていると見ることができる。ただし依然として当期活動増減差額は赤字が続いている。

事業活動計算書の他に業績を示す指標として資金収支計算書がある。表2は社会福祉法人親善福祉協会の19年度資金収支計算書を法人本部、病院、福祉施設、クリニック、収益事業（本部）、同（病院）に分類して見たものである。福祉施設には特別養護老人ホーム2カ所、介護老人保健施設、地域ケアプラザ、訪問センターがそれぞれ1カ所含まれる。クリニックは17年11月、相鉄線弥生台駅前に開設したサテライトクリニックである。また収益事業（本部）は主に不動産賃貸、同（病院）は主に駐車場運営を行っている。

これを見ると19年度は法人全体で441百万円の黒字となっている。資金収支計算書では減価償却費が計上されない。したがってキャッシュフローベースで見れば、年間で441百万円の現金が積み上がっていることがわかる。これを法人本部、病院などの事業主体別に見ると、法人本部および福祉施設がそれぞれ255百万円、221百万円の黒字、病院がほぼ収支トントン、その他が赤字となっている。

ただしここで注意しておかなければいけない点がある。法人内では、それぞれの事業主体同士が複雑な資金のやりとりを実施している。理由はさまざまであるが、19年度では事業区分間長期貸付金、拠点区分間長期貸付金、事業区分間繰入金、拠点区分間繰入金なる科目により事業主体間で資金の移動がある。これらはすべて表2における「その他の活動収支」に含まれる。また前述したように病院は建物の減価償却費分として法人本部に対して土地・建物賃借料を支払っている。表1でも見たように、19年度はこの額は370百万円であり、これは表2では「事業活動収支」の病院支出および法人本部収入に同額が計上されている。

これらの資金移動が含まれていると、それぞれの事業主体の本当の資金収支状況、すなわち真の収益力を見ることができない。そこで前述の事業区分間長期貸付金をはじめとした4つの資金移動科目および法人本部・病院間の土地・建物賃借料の収入・支出をすべてゼロにした場合の資金収支計算書を作成してみると表3のようになる。資金

表1　事業活動計算書の推移　（百万円）

	2014年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度
サービス活動収益	6,406	6,770	7,045	7,549	8,187	8,433
サービス活動費用	6,903	7,107	7,347	7,796	8,268	8,554
土地・建物賃借料	36	36	36	224	406	370
減価償却費	331	377	358	165	179	200
サービス活動増減差額	△498	△338	△302	△248	△81	△121
経常増減差額	△510	△357	△312	△249	△84	△117
当期活動増減差額	△510	△357	△451	△223	△55	△107

表2　資金収支計算書（2019年度）　（百万円）

	法人本部	病院	福祉施設	クリニック	収益事業		合計
					本部	病院	
事業活動収支							
収入	539	8,478	2,570	294	19	46	11,946
支出	266	8,262	2,195	343	1	10	11,077
事業活動収支差額	273	216	375	△49	18	36	869
施設整備等収支							
収入	0	0	2	0	0	0	2
支出	155	126	37	1	0	0	319
施設整備等収支差額	△155	△126	△35	△1	0	0	△317
その他の活動収支							
収入	164	90	5	15	0	0	274
支出	27	176	124	1	20	37	385
その他の活動収支差額	137	△86	△119	14	△20	△37	△111
当期収支差額合計	255	4	221	△36	△2	△1	441

表3　資金収支計算書（2019年度）資金移動なし　（百万円）

	法人本部	病院	福祉施設	クリニック	収益事業		合計
					本部	病院	
事業活動収支							
収入	169	8,478	2,570	294	19	46	11,576
支出	266	7,892	2,195	343	1	10	10,707
事業活動収支差額	△97	586	375	△49	18	36	869
施設整備等収支							
収入	0	0	2	0	0	0	2
支出	155	126	37	1	0	0	319
施設整備等収支差額	△155	△126	△35	△1	0	0	△317
その他の活動収支							
収入	0	40	5	0	0	0	45
支出	0	137	20	0	0	0	157
その他の活動収支差額	0	△97	△15	0	0	0	△112
当期収支差額合計	△252	363	325	△50	18	36	440

移動科目の中には、それ以外の勘定科目と資金をやりとりしている部分もあるため、法人全体の収支差額合計は表2と表3で一致はしないが、ほぼ等しくなる。

これを見ると、病院と福祉施設がそれぞれ363百万円、325百万円の黒字、法人本部が252百万円の赤字となっている。法人本部自体は事業を行っているわけではなく、収入は病院からの土地・建物賃借料の他は、受取利息配当金等であり、そこから人件費、事務費、外部借入の返済等を差し引くため赤字となる。440百万円の黒字を生み出しているのは病院、次いで福祉施設であることがわかる。クリニックは開設からまだ2年5カ月と間もないため、50百万円の赤字を計上している。

次に表3と同じように事業主体間の資金移動をゼロにした資金収支計算書における当期収支差額を、事業主体別に過去5年にわたって見たものが表4である。

これを見ると14年度から17年度まで連続して法人全体で赤字が続いている。とくに15年度から17年度の赤字幅が大きい。これは病院新館の建築および本館の大規模な改修という約48億円にのぼる再整備事業を実施したことが主な要因となっている。

再整備事業の主体は法人本部であるため、同本部は15、16、17年度とそれぞれ△1,920百万円、△707百万円、△1,959百万円と大きく赤字を計上している。

病院も17年度まで連続して赤字を計上しているが、18年度には黒字に転換、19年度には黒字幅をさらに拡大させている。16年4月に緩和ケア病棟開設、17年4月には約2年9カ月ぶりに産婦人科における分娩を再開、本館の改修工事が終了して17年8月末からは病棟がフルオープンした等の効果も出てきている。

再整備事業の影響は貸借対照表の推移からも見て取ることができる。14年度の決算期である15年3月期から直近の20年3月期まで法人全体の貸借対照表の推移を見たものが表5である。

15年3月期の資産合計は24,386百万円、5年後の20年3月期は24,471百万円とあまり大きな変動はない。しかしながらその内訳は大きく変化している。

15年3月期の流動資産は8,880百万円、100%を超えていれば健全とされる流動比率が1,036.2%もあり、100%以内が健全とされる固定比率は71.3%、また自己資本比率は89.1%と高水準にある。したがってこの時期は超がつくほど優良な財務内容であったといえる。

これが主に再整備事業による現金流出により流動資産は19年3月期に5,732百万円まで減少、代わりに固定資産が15年3月期の15,506百万円から18年3月期には19,472百万円まで増加している。また外部借入を増大させた影響もあり流動負債+固定負債は同期間に2,652百万円から5,260百万円に増加した。

以上により流動比率、固定比率、自己資本比率は、18年3月期以降若干改善したものの、20年3月期と15年3月期を比べるといずれの指標も悪化している。それでも20年3月期は流動比率258.5%、固定比率93.4%、自己資本比率81.0%と依然として優良のレベルを維持している。

表1でも見たように、病院は直近決算の19年度でも当期活動増減差額は△107百万円と赤字を計上している。しかしながらこれは減価償却費、および減価償却費に対応した土地・建物賃借料を差し引いた数字であり、表4で見たとおり法人内資金移動修正後の当期収支差額は18年度より大きくプラスに転じている。当期活動増減差額の赤字は再整備事業による減価償却費負担の増加が大きく影響している。

再整備事業の着工は14年8月、表1には無いが13年度の当期活動増減差額も△105百万円と赤字を計上していたため、病院の収益力が再整備事業後の減価償却費に耐えられないことは、事業開始前でも予測できたのではないか。私が当病院に入職したのは16年4月であり、当時の資料も残っていないため詳細は不明であるが、そうであれば現在の赤字はある程度想定内であり、さほど悲観することはないとも思われる。

しかしながら建物、機械設備等はすべて時間とともに確実に老朽化していく。減価償却費に見合った資金を積み上げていかなければ次の設備更新時に資金が不足することになる。また今は手元に現金があるからといって、投下資金を上回る収益を見込めない投資や不採算業務を続けていけば、資産をあっという間に食いつぶしてしまう。今一度、気を引き締めて今後の病院経営にあたっていくことが肝要と考える。

なお表5で見たとおり、幸い財務状況は引き続き良好な状況にある。資産を有効に活用して社会のニーズに合わせて事業を拡張していくことも今後の検討課題になっていくであろう。

今は天に在られる森前理事長に「異状とはほど遠い良好な状況になった」と思っていただきたい。

表4　当期収支差額の推移（百万円）

	2014年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度
法人本部	5	△1,920	△707	△1,959	△65	△252
収益事業（本部）	6	7	△8	△3	17	18
小計	11	△1,913	△715	△1,962	△48	△234
病院	△325	△110	△207	△293	279	363
収益事業（病院）	18	23	9	16	43	36
小計	△307	△87	△198	△277	322	399
福祉施設	58	247	135	206	232	325
クリニック				△482	△84	△50
合計	△238	△1,753	△778	△2,515	422	440

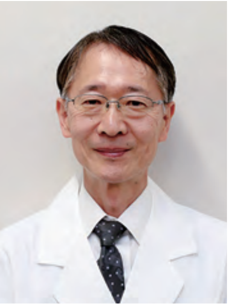
表5　貸借対照表の推移（百万円、%）

	2015年3月期	16年3月期	17年3月期	18年3月期	19年3月期	20年3月期
A流動資産	8,880	7,186	6,527	5,782	5,732	5,958
B固定資産	15,506	16,674	16,699	19,472	19,032	18,513
C資産合計	24,386	23,860	23,226	25,254	24,764	24,471
D流動負債	857	943	1,177	2,993	2,530	2,305
E固定負債	1,795	1,773	1,529	2,267	2,290	2,351
F純資産	21,734	21,144	20,520	19,994	19,944	19,815
G負債・純資産合計	24,386	23,860	23,226	25,254	24,764	24,471
流動比率A/D	1,036.2	762.0	554.5	193.2	226.6	258.5
固定比率B/F	71.3	78.9	81.4	97.4	95.4	93.4
自己資本比率F/G	89.1	88.6	88.3	79.2	80.5	81.0

第Ⅱ部

親善の今

1 総合内科



部長

中山 理一郎

初期の段階での内科疾患の根本原因治療を目指して

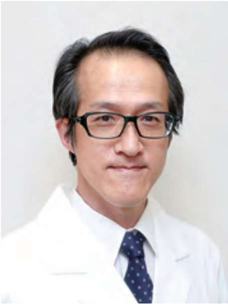
診療内容

当科では様々な免疫低下･血液疾患･アレルギー疾患・不明熱・呼吸器疾患・神経疾患・内分泌疾患の精査治療を行い、必要な場合希望専門外来・専門病院に紹介をしています。また当日の心不全マーカー BNP（脳性ナトリウム利尿ペプチド）、心筋梗塞マーカー:トロポニンI・肺塞栓・大動脈血栓マーカー D-dimer・肺炎球菌抗原・マイコプラズマIgMやアレルギー性呼気NO等が緊急測定で可能です。

特色

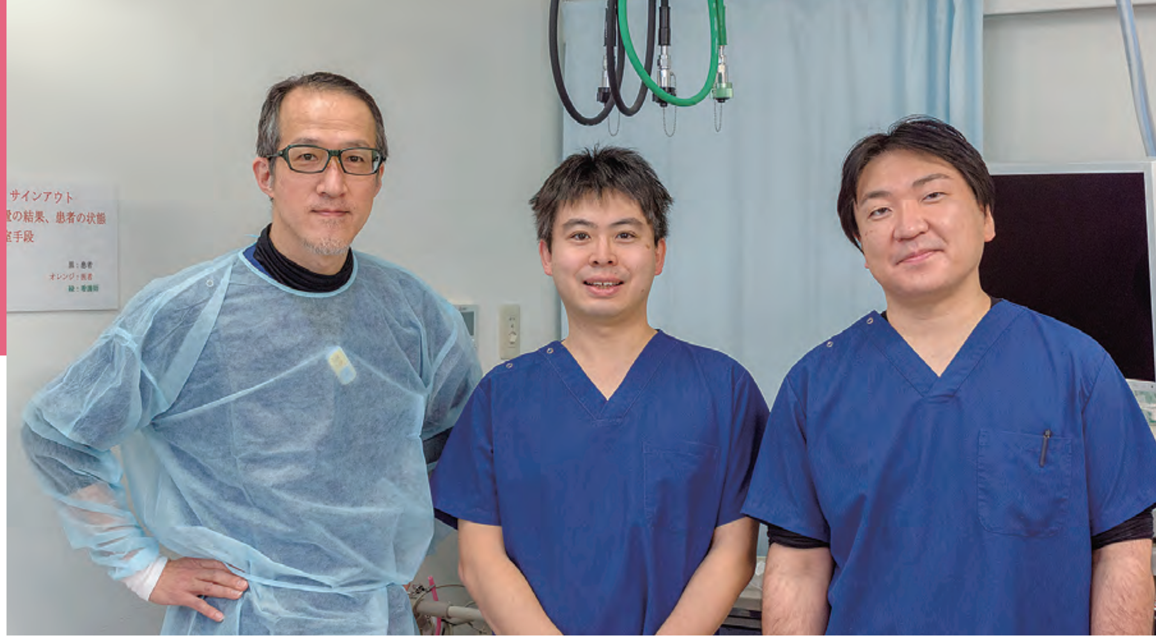
2018年からWHOは運動不足と不適切な食事を排除することにより世界の死因NCDs(Non Communicable Diseases：非感染性疾患：糖尿病・アレルギー・心血管病・癌）の71％（日本の82％）を予防できると発表しました。トランス脂肪酸排除によるNCDSの改善と、グリホサートによる発癌・認知症予防、亜鉛欠乏による胸背腹部痛･感染･発熱、コバルトアレルギーによる痺れや、ネオニコチノイドによるコリン作動性徐脈・胸腹痛・免疫力低下などを的確に診断して治療していきます。

2 消化器内科



部長

日引 太郎



消化管・胆嚢・胆管・膵臓・肝臓等の病気を中心に診断・治療する

診療内容

当科では胃・大腸内視鏡、ERCPを中心に診療しています。また各種消化器疾患の診断・治療を外科はじめ院内各科、近隣の高次医療機関と随時連携して行います。当科疾患の特性上、末期癌の患者さんも多数おられるので、院内緩和ケアチームとの連携、また近隣の在宅クリニックのお力もお借りして診療しています。未だ人員不足ではありますが、できる限り待ち時間を短縮して診断、治療につなげられるよう努力しています。

特色

近隣のホームドクターの先生方との連携を第一に考え、御指導・治療はホームドクターにお願いし、定期検査は当院で行います。また、苦痛なく検査・治療を受けていただけるよう適宜鎮静剤・鎮痛剤を使用しています。常勤医が少ないため早期胃・大腸癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）の件数は少ないですが、区外の医療機関受診が困難な方の対応は随時行っています。

3
循環器内科

部長

清水 誠

急性期に適切な最大限の治療を、慢性期に患者の生き方を支え、再発を予防する医療を目指して

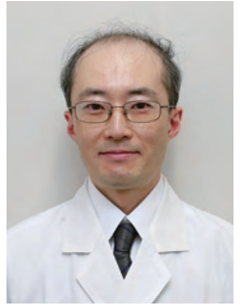
診療内容

当科では心臓と大血管、高血圧など循環器系全般と循環器系に密接に関連する腎疾患、肺疾患、糖尿病、脂質異常症などの生活習慣病の一部を担当しています。虚血性心疾患の急性期治療、カテーテル検査および治療、１次および２次予防、心筋症、弁膜症、その他さまざまな原因の心不全、不整脈疾患、ペースメーカー治療、末梢動脈疾患、肺動脈疾患、静脈疾患、心肺停止蘇生後の全身管理、神経失調性失神、そのほか心臓神経症などの薬物療法を行い、非薬物療法としての運動療法、食事指導についても積極的に行っています。

特色

循環器疾患は発症当日の急性期の治療の質で、その後の予後が大きく変わることがあります。また、軽微な前兆の段階でしっかり治療できればその後の大きなイベントを防ぎ得たということも少なからずあるため、急性期に遅滞なく適切な医療介入を行っています。

4
糖尿病・内分泌内科



部長

本間 正史

糖尿病、脂質異常症、甲状腺疾患、低血糖症、糖尿病性腎症や透析への予防指導や診療を行う

診療内容

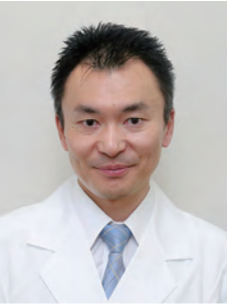
糖尿病足病変に対するリスクが高い方（糖尿病性神経障害、下肢抹消動脈疾患、足の潰瘍／切断の既往）に対しては皮膚・排泄ケア認定看護師によるフットケアも施行しています。看護師からのフットケアを含めた療養指導、栄養相談、リハビリ、医師による診察を月1回、3カ月コースで行います。

特色

当科はインスリンポンプ療法（CSⅡ）、持続血糖モニター（CGM）iPro2®およびFreeStyleリブレPro®を導入しています。特にHbA1cがなかなか改善しない方や低血糖が心配な方など、1日の血糖変動を把握するために取り入れています。また社会的なサポート（居宅サービス／介護保険）などの利用を考慮しつつ、血糖管理を行うことも外来、入院ともに受け入れています。

特に甲状腺疾患についても血液検査、超音波検査など対応しており、甲状腺悪性腫瘍が疑われる場合は、外科と連携して手術療法を依頼する場合もあります。

5
腎臓・高血圧内科



部長

安藤 大作

腎臓疾患の初期病変である検尿異常から、末期腎不全・透析管理の最終段階までを対応

診療内容

当科は検尿異常、急性腎障害、慢性腎臓病、ネフローゼ症候群、多発性嚢胞腎、糖尿病性腎症、血管炎症候群など腎臓疾患全般に対応が可能です。高血圧症では本態性高血圧、二次性高血圧、治療抵抗性高血圧、そのほか低ナトリウム血症、低カリウム血症、高カリウム血症、高カルシウム血症などの電解質異常、人工透析関連・各種特殊血液浄化療法、バスキュラーアクセス管理など多岐に渡り対応しています。

特色

透析療法は患者さんに合わせて、血液透析、腹膜透析の両方が選択できます。また腎移植のご紹介も適宜行っています。血液透析に関しては原則として急性期の患者さんを対象としており、各種血液浄化療法(血漿交換、二重濾過血漿交換、免疫吸着、LDLアフェレーシス、白血球系細胞除去、腹水濾過濃縮再静注法(CART)、持続的血液濾過透析(CHDF)なども適宜行っています。また維持血液透析患者さんのシャントのPTA、再造設、人工血管移植などのバスキュラーアクセス管理も行っています。

6
脳神経内科

部長

三富 哲郎

外来ではパーキンソン病、てんかん、変性疾患症例を主体に診療を行う

診療内容

常勤医1名による診療体制であるため、初診外来は週2回、再診外来は週3回としています。安定した脳血管障害慢性期症状はかかりつけ医へ依頼し、年1回程度の定期的な検査を行うように患者指導する方針を継続しています。脳卒中疑い症例については初期対応から応需する方針で、入院患者が増加傾向にあるのが現状です。

特色

特殊な治療は行っていませんが、神経系疾患の一般的治療には対応しています。脳血管障害については24時間体制で脳神経外科と連携して診断、治療を行っています。救急疾患については時間帯によって迅速に対応するため、始めに救急外来を受診して頂くこともあります。脳神経外科と連携しているので、判断に迷う場合はどちらの科に紹介いただいても対応しています。

7 呼吸器内科

部長

中田 裕介

呼吸器関連の疾患、すなわち肺の病気に対して幅広く診療を行う

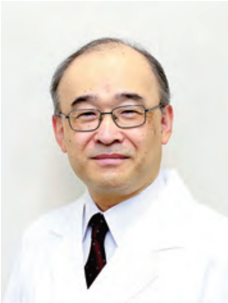
診療内容

腫瘍(肺癌、縦隔・胸膜腫瘍)、気管支喘息、睡眠時無呼吸症候群(SAS)、特発性肺線維症(IPF／UIP)などびまん性肺疾患、呼吸器感染症など取り扱う疾患は多岐に渡っています。特に慢性閉塞性肺疾患(COPD)は急性増悪の呼吸不全に対して、高流量酸素療法を含めた治療が可能で、これまで緊急入院後も呼吸困難に苦しんでいた方の早期症状改善に努めています。

特色

呼吸器疾患・肺の病気は多岐にわたるため、専門的な診察と診断、治療を受けていない方も少なくありません。特に肺癌の治療については、診断から治療(手術・化学療法・緩和治療)まで、一貫した質の高い診療を目指しています。また放射線治療が必要な症例は関連の施設と連携し治療を行っています。長引く咳、痰、息切れ等の呼吸器症状の悩みは早めの相談・診察を呼び掛けています。

8 緩和ケア内科



部長

村井 哲夫

病気に伴う心と体の辛さをやわらげる医療・ケアを目指して

診療内容

緩和ケア病棟、緩和ケアチーム、緩和ケア外来での活動が三本柱です。

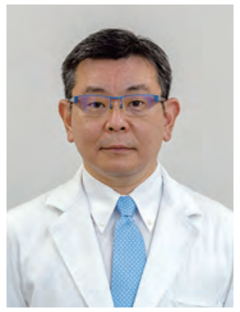
緩和ケア病棟は「その人らしい生き方を支援し、地域との連携を活かす身近な病棟」との理念に基づき、医師、看護師、薬剤師、理学療法士、社会福祉士（ソーシャルワーカー）、管理栄養士など、多職種スタッフが力を合わせて患者さんの苦痛緩和に努めています。緩和ケアチームは一般病棟の入院患者さんが対象で、がんの有無を問いません。緩和ケア外来では通院がん患者さんの苦痛緩和を行っています。

特色

緩和ケア病棟稼働の4年目を迎えた2019年度にようやく常勤2名体制となりました。赴任した医師はこれまでに消化器内科、総合診療科も経験し、特にロゴセラピー※に造詣が深く、スピリチュアルペインを有する患者への対応が一層深まり、当院における緩和医療の幅が広がりました。

※ロゴセラピー（Logotherapy）：フランクル心理学に基づいて作られた「人生の意味」を見出すことで疾患や苦境にある状態から回復を目指す心理療法

9
呼吸器外科



部長

成毛 聖夫

患者さんに寄り添った診断・治療の提案を

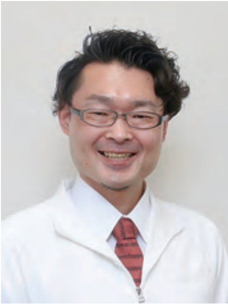
診療内容

呼吸器外科で扱う主な疾患は、肺悪性腫瘍（原発性肺癌や転移性肺腫瘍）や縦隔腫瘍、気管支病変、胸部外傷、気胸、膿胸などの感染症、手掌多汗症であり、呼吸器内科や外科と連携をとりつつ診療を進めています。気管支鏡検査、CTガイド下生検による診断のための検査は、呼吸器内科、放射線科との協力のもと行っており、横浜市肺がん検診にも対応しています。併存疾患についても関連診療科と協力して診療にあたっています。

特色

2020年4月より常勤医が着任し、今後はよりスムーズな患者さんの受け入れと継続的な診療ができるようになりました。診断や治療の提案など、患者さんと十分に相談しながら行っています。手術は胸腔鏡を用いて低侵襲性に配慮して行っています。

10
小児科



部長

畑岸 達也

軽微な風邪から夜尿・先天性心疾患疑いなど幅広く対応する

診療内容

基本的には一般外来主体で診療しており、午後は主に予防接種、健診、予約外来（月曜日：循環器、火曜日～木曜日：アレルギー）を行っています。

診療の結果、高度に専門的な検査・治療が必要な場合には近隣の大学病院、こども病院などに紹介しているため当院は、地域の小児医療を担う「1.5次～2次病院」としての役割を目指しています。

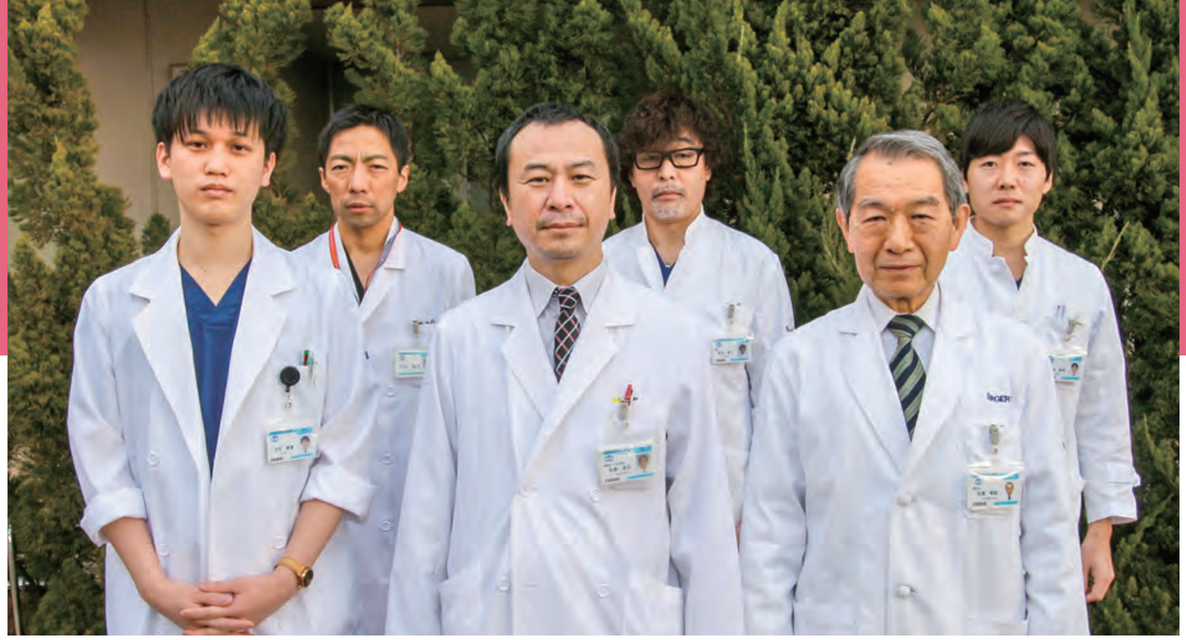
特色

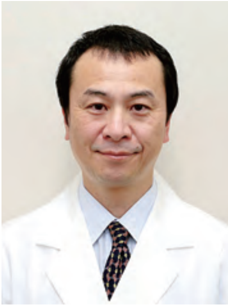
入院診療については重症度の比較的低い症例で実施しており、重症度が高い症例や高くなることが見込まれる症例については近隣の公立病院・大学病院に紹介しています。

2017年より分娩が再開したことで新生児の診療・分娩時のトラブルへの対応を開始しました。

食物アレルギーについては疑い例、リスクの低いものから高いものまで引き続き、経口負荷試験を実施。また小児喘息については呼気NO検査も行っているため、慢性咳嗽で悩む子ども達にも対応しています。

11 外科





部長

佐藤 道夫

各科との連携を図り、診断から治療まで最善の医療の提供を目指して

診療内容

早期癌や良性疾患に対しては、積極的に腹腔鏡手術などの低侵襲手術や内視鏡的治療（EMR、ESD）を行っています。進行癌に対しては、エビデンスに基づいた集学的治療を行い、癌化学療法は外来化学療法室にて、通院しながら癌治療が可能です。さらに癌緩和ケアが必要な方は、緩和ケア内科と連携して緩和ケア病棟にて療養も可能です。このように、癌をはじめとした悪性疾患に対しては、診断・治療から緩和医療までのシームレスな医療を展開しています。

特色

各領域の手術には専門性を持ったスタッフが対応しています。基礎疾患を持った患者さんに対しても総合病院の特長を活かして、関連する診療科やリハビリテーション科、栄養サポートチーム（NST）、呼吸ケアチーム（RCT）などのサポートとともに、安全な医療を提供しています。

2020年はコロナ禍という未曽有の1年で良性の手術が減少しましたが、総手術件数は609（2015年532）件で、うち癌・悪性腫瘍は170（128）件、腹腔鏡手術は317（128）件と5年前と比較して大きく進歩しました。

12 整形外科

部長

山下 裕

最新の知見を取り入れた質の高い医療を

診療内容

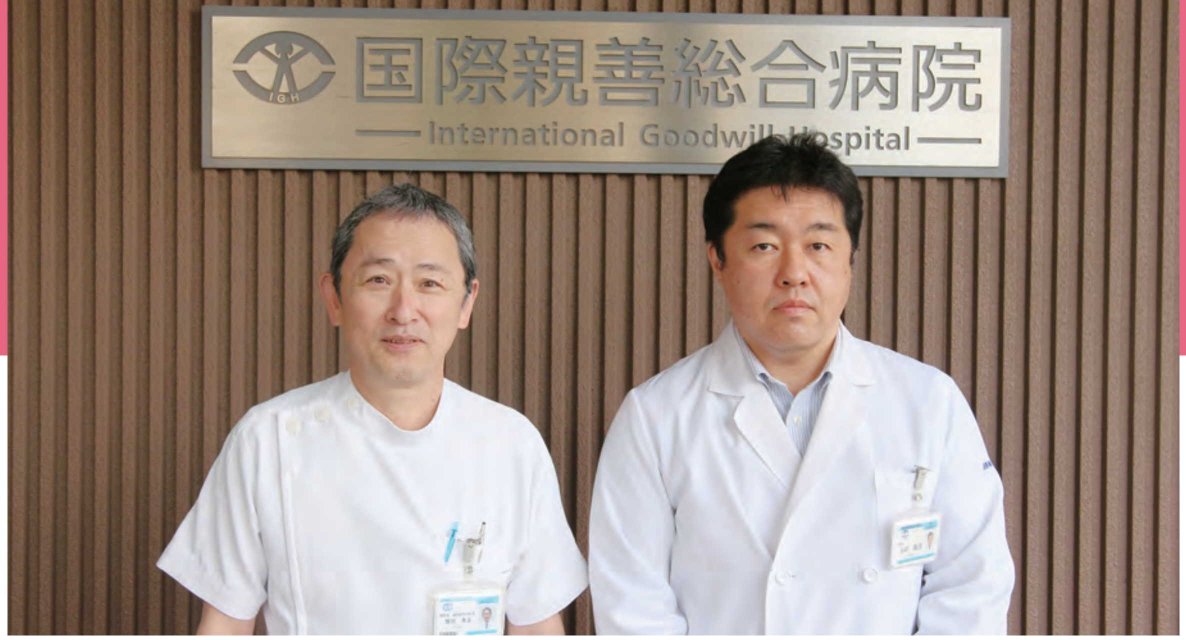
当科は、脊椎、上肢、下肢の各分野の専門医を含む6人の常勤医を配しています。部門別に分けると脊椎脊髄外科部門、手外科部門、膝関節外科部門、人工膝関節部門、外傷部門があり、腫瘍を除く全分野における専門的な診察・治療に臨んでいます。

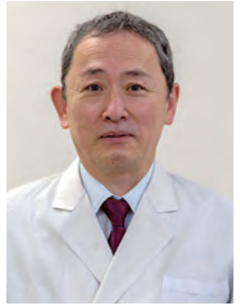
また、泉区を中心とした開業医の先生方と密接に連携をとり、地域に根付いた医療を心掛けています。

特色

当院では外傷患者さんのご紹介・救急車での搬送が多く、2019年度当科手術766件のうち約半数は骨折・脱臼等の外傷の手術です。麻酔科と協力して可能な限り早期手術を、術前術後の早期リハビリテーションを行い、より短期間での社会復帰を目指しています。急性期病院としての性質上、術後長期リハビリを要する、または直接ご帰宅が困難な患者様には地域連携システムを利用し、専門性の高いリハビリテーション病院や施設を御紹介することがあります。

13 脳神経外科





部長

飯田 秀夫

後遺症を最小限に抑えた脳神経外科手術の実施を目指して

診療内容

脳神経外科は遠藤昌孝・市川文彦の2名にてスタートしました。しかし市川文彦は脳腫瘍を発症し平成4年10月に短い生涯を閉じました。その後故矢田賢三教授の指導のもと、北里大学より3ヶ月ごとに4名の医師が交代で診療にあたり1993年4月より永井成樹が入職。1994年4月より飯田秀夫を長とし、藤井清孝前教授、隈部俊宏現教授のもと日本脳神経外科専門医・指導医常勤医師2～3人にて診療を行い現在に至ります。北里大学医学部脳神経外科より非常勤医師として1名派遣していただき、2018年2月より秀拓一郎助教授が外来診療にあたっております。手術は開院当初から顕微鏡手術を行っており、現在は内視鏡を使用した手術も行っています。

特色

頭部MRIは2018年より24時間稼働、脳卒中の検査はいつでも可能になりました。最近、当院では脳動脈瘤破裂によるくも膜下出血は少なくなり、逆に高齢者の転倒による脳挫傷・急性硬膜下血腫・慢性硬膜下血腫の入院が増加しつつあります。

当院脳神経外科でも患者は高齢化しており、手術は合併症なく、後遺症も最小限に抑え、その後の人生を過ごしていただくため、今後も我々は色々なことを習得し努力していく所存であります。

14 産婦人科

部長

多田 聖郎

地主 誠

産婦人科全般にわたり、良質で安全確実な医療を目指して

診療内容

当院は2017年4月より分娩を再開しました。再開当初は分娩件数制限を行いましたが、医師、助産師とも人員の確保が可能となったため、2018年4月以降は分娩件数の制限を緩和しており、お断りすることなく分娩をお受け出来ている状況です。ただし小児科診療体制の関連よりハイリスク制限は継続されています。

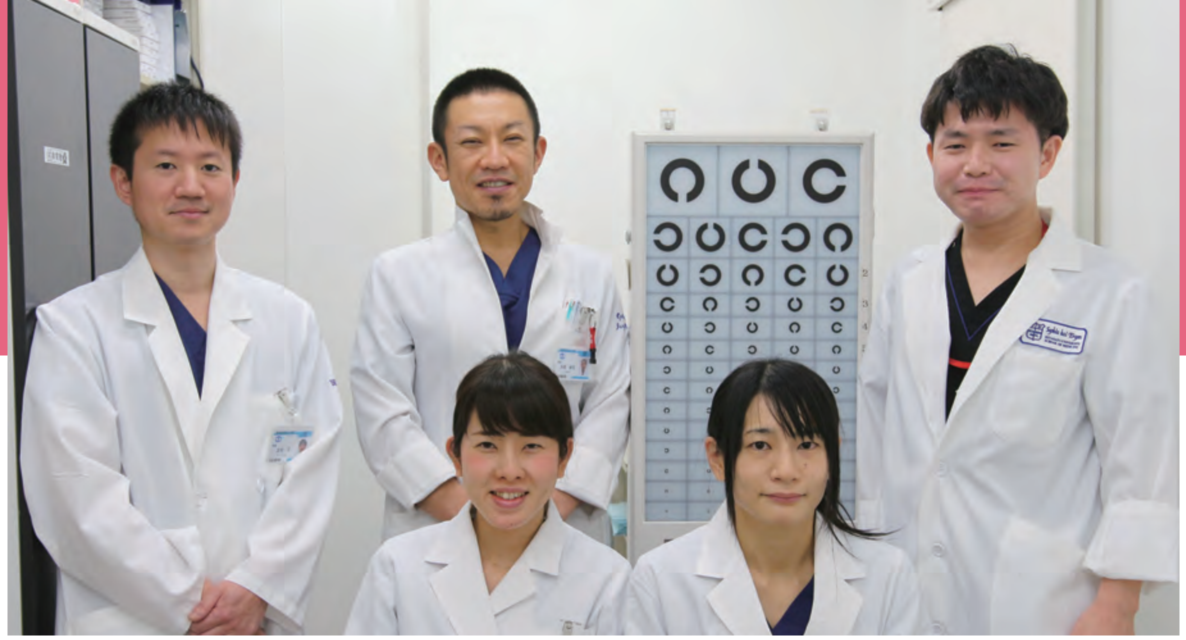
またご希望の方には無痛分娩も行っており、自然陣発による無痛分娩をメインに行っている数少ない病院です。

特色

妊娠、分娩については原則として、合併症のない妊娠、出産を取り扱っています。新生児は36週2200g以上に対応。無痛分娩の24時間体制。妊婦検診はセミオープンシステムも可能です。無痛分娩の正常分娩率80%、満足度95%となっています。

婦人科疾患については、腹腔鏡手術、子宮鏡手術、子宮脱手術、開腹手術、子宮頸部異形成などを行っています。特に腹腔鏡手術はTLH、LMに注力し、低侵襲手術を実現しています。悪性腫瘍についてはマンパワーを産科に向けているため、進行症例は神奈川県立がんセンター等に紹介させていただき、I期症例を中心に対応しています。

15 眼科



部長

大西 純司

眼科疾患全般における正確な診断と より良い治療を目指して柔軟に対応を

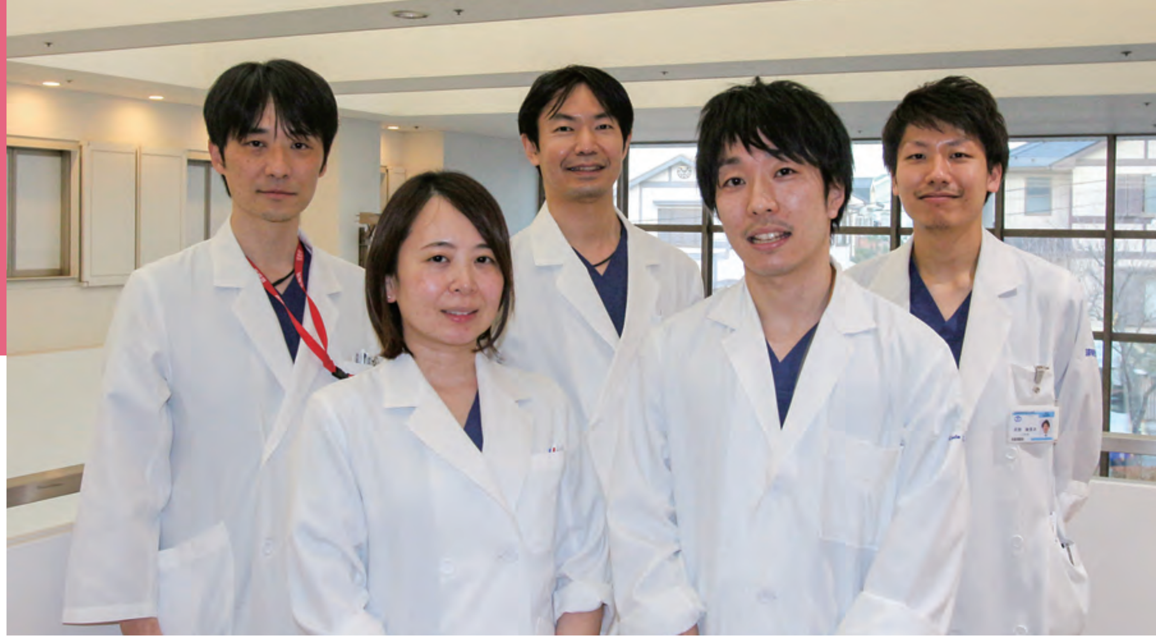
診療内容

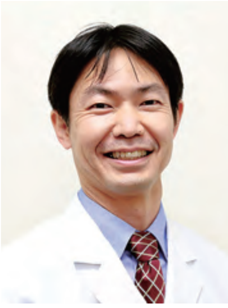
一般外来は平日午前と土曜日午前、平日午後は特殊検査や外来手術・手術説明会などを行っています。外来診療は白内障・緑内障・角膜疾患・網膜硝子体疾患・ぶどう膜炎など眼科疾患全般、手術加療は白内障・網膜硝子体疾患（黄斑上膜・黄斑円孔・硝子体出血など）・硝子体注射（抗VEGF療法）・外眼部疾患（霰粒腫・翼状片など）・ボトックス治療（眼瞼痙攣・片側顔面痙攣）を実施しています。

特色

年間約800件の入院白内障手術を行っており、日帰り手術では対応困難な症例（成熟白内障・狭隅角・落屑症候群など）、全身的なリスクが高い症例についても積極的に受け入れています。黄斑前膜・黄斑円孔・硝子体出血などの網膜硝子体疾患に対する硝子体手術、加齢黄斑変性症に対する光線力学療法は入院にて行っています。また日帰りにて、加齢黄斑変性症や網膜静脈閉塞症、糖尿病黄斑浮腫などに対しての硝子体注射、テノン嚢下注射、麦粒腫・霰粒腫・翼状片などの外眼部疾患に対する手術を行っています。

16 泌尿器科





部長

滝沢 明利

ガイドラインを基本としながらも個々の症状や ご希望に応じた質の高い診療を目指して

診療内容

主に尿路結石や前立腺肥大症、尿失禁などの良性疾患、前立腺癌や膀胱癌、腎癌などの尿器悪性疾患など、泌尿器科疾患全般を扱っています。

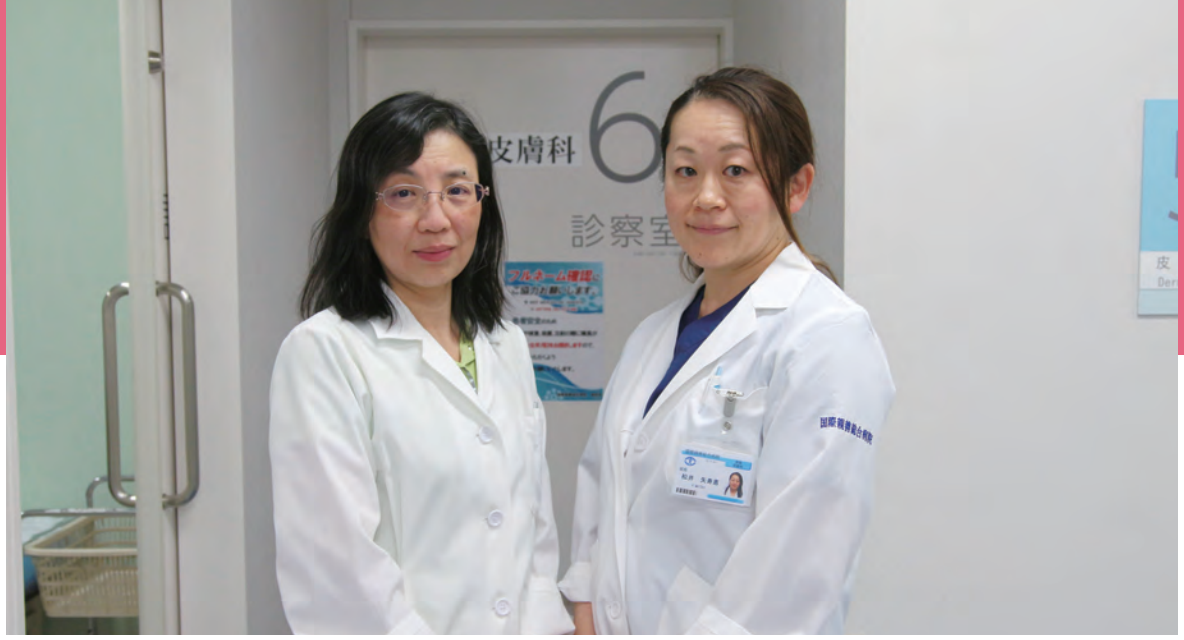
外来診療は基本的には担当医制で、臨時対応などの場合は情報共有により他の医師も対応可能。外来の待ち時間短縮したスムーズな診療を心掛けています。入院診療は、担当医以外も全員が主治医として毎日全員で情報共有し、方針を確認して診療を進めるチーム医療を行っています。

特色

ホルミウムレーザー治療により、尿路結石では軟性尿管鏡を用いた経尿道的レーザー砕石術（f-TUL）や大きい腎結石に対する経皮的腎結石砕石術（PNL）を行っています。また、前立腺肥大症ではホルミウムレーザー前立腺核出術（HoLEP）により、大きい前立腺でも低侵襲で良好な成績が得られ、県内2位の手術実績（67例：2018年）です。

また、3D／4K腹腔鏡手術導入により、主に前立腺／腎／膀胱癌に対して低侵襲で安全性の高い泌尿器がん手術を積極的に行っています。

17
皮膚科



部長

松井 矢寿恵

症状に合わせた細やかな治療で患者さんの悩みに寄り添う

診療内容

一般外来診療は平日の午前で、平日の午後は手術・検査・レーザー治療などを予約制で行っています。（土曜日は初診診療のみ）現在治療中で経過が芳しくない症例の相談を承り、対応可能な患者さんであれば緊急対応も積極的に受け入れています。

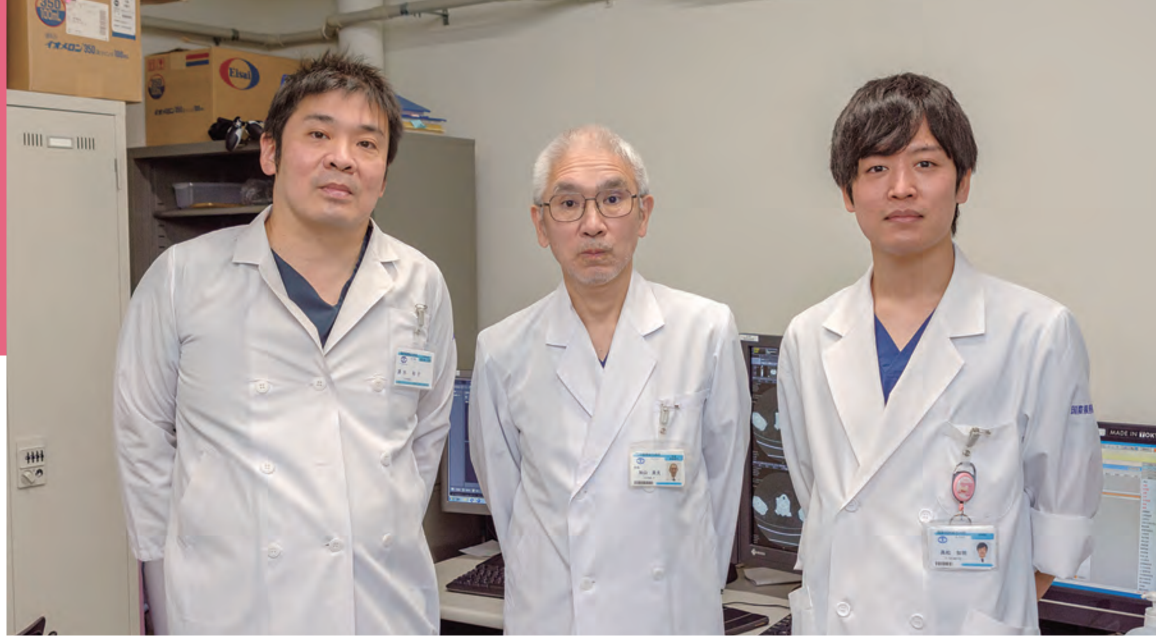
主に皮膚腫瘍手術、皮膚生検や皮下腫瘍の精査画像診断を承っています。手術は当科あるいは形成外科で行い、対応できない場合は大学病院へご紹介しています。

特色

他科との関連を疑う患者さんの窓口にもなっています。疾患によって皮膚科単独では治療が困難な場合があるときは、一度拝見させていただき必要に応じて他科に相談する体制になっており、総合病院ならではの対応が可能です。

美容皮膚科では、しみ・くすみ・肝斑・小じわ・しわ・ニキビ・ニキビあと・レーザー脱毛などをロングパルスアレキサンドライトレーザー、ケミカルピーリング、ビタミンCローション、ハイドロキノン軟膏、トレチノインクリーム等を駆使して治療しています。もちろん男性の方も治療可能です。

18
画像診断・IVR科



部長

加山 英夫

病状に応じた迅速で的確な検査を

診療内容

当科ではCT・MRI・血管造影・消化管造影・乳房撮影・一般撮影等の検査及び診断、血管系IVR、非血管系IVRなどを行っています。特に緊急症例や急性期疾患については、患者さんの病状に応じて迅速に検査や画像診断を行い、臨床医に早急に連絡する体制となっています。患者さんには検査、治療について充分に説明し、医療事故の防止に努めています。

特色

近年、CTやMRIの著明な発展により診断的血管造影は、極めて限られたものとなっています。画像診断・IVR科はベッドを有していないため、院内他科の依頼により、血管造影を利用したIVRを施行しており、主要なものは塞栓術や血管形成術となっています。

胸部領域では、喀血などの動脈塞栓術、腹部領域では、肝細胞癌、腎細胞癌、腎血管筋脂肪腫などの多血性腫瘍に対する塞栓術を施行しています。血管病変としては、動脈瘤や仮性動脈瘤の塞栓術や血管形成術を適宜施行するなど多岐に渡ります。

19 麻酔科

部長

佐藤 玲恵

手術中の鎮痛鎮静、生命維持のほか
全身状態の安全を保ち、手術侵襲から患者を護る

診療内容

患者さんが苦痛なく安全に必要な手術を受け、手術する医師たちがベストを尽くせるように手術中の鎮痛・鎮静、心臓や肺などの機能維持に努めています。

当院においては一部の局所麻酔症例を除いて、全て常勤麻酔科医によって安全に周術期管理され、麻酔は患者さん一人ひとりに専従の麻酔科医が行っています。このことは、患者さんが安全で質の高い麻酔を受けるうえで大変重要なことと考えています。

特色

手術前診察から手術に備えた全身管理に介入し、麻酔法は常勤麻酔科医全員でカンファレンスして決定します。麻酔中のモニターは集中モニターにより複数の麻酔科医で監視。術後は、硬膜外麻酔・神経ブロック・オピオイド・経静脈鎮痛薬を組み合わせ、multimodalな鎮痛による有効かつ副作用の少ない疼痛管理に努めています。

手術室外では、検査室での鎮痛鎮静、集中治療室での重症患者管理や救急外来など院内の救急医療に対応しています。

20 病理診断科

部長

光谷 俊幸

病理診断は診療における最終診断と位置づけられ、
予後の推定や治療方針の決定に大きな役割を担っている

診療内容

病理部門は泉区移転後まもなく、昭和大学藤が丘病院、病院病理科（現在は臨床病理診断科）が病院からの要請を受け、佐川文明教授と2人の非常勤体制で勤務いたしました。当初から組織・細胞診診断業務、術中迅速診断、病理解剖、症例検討会が盛んに行われ、臨床側からの要望に対応していました。

30年間当教室に病理業務が委託され現在も続いています。教室の病理医4人は毎日誰かが勤務し、診断業務、術中迅速診断、病理解剖、症例検討、CPC等に対応してきました。現在は光谷（昭和大学名誉教授）が大学定年退職後、今までの非常勤医から常勤医となり、臨床検査科部長・病理診断部長として勤務し、非常勤医師に加え、2019年4月から石倉直世医師と病理診断業務を担っています。

特色

当科は病理医4名（非常勤2名を含む。4名とも病理専門医、細胞診専門医）と臨床検査科に所属する臨床検査技師・病理検査技師4名（4名とも日本臨床細胞学会認定細胞検査士）の協力のもと、患者さんの診療に欠かせない病気の病理診断を行い臨床医に報告しています。病理医は直接、患者さんにお会いすることはありませんが、病院における質の高い診療の根幹を支えています。

病理診断は検査（内視鏡等により採取された生検組織・細胞診）および手術で摘出した検体を病変の肉眼的観察後、作製した標本を病理専門医・細胞診専門医が顕微鏡で観察し診断を下します。

21

救急科

副院長

清水 誠

横浜市2次救急拠点病院Aの指定を受けた13病院のひとつとして

診療内容

横浜市立大学救急医学教室などからの非常勤医師1～2名の体制にて救急車搬送や状態の不安定な救急患者の対応を幅広く診療しています。内科系を中心に様々な患者の初期診療を担当し、入院が必要な場合は適切な診療科にお願いしています。また平日の外来受付時間以後は内科当日緊急紹介の窓口となり各専門内科と連携し、救急搬送患者同様に適切な専門治療に結びつくよう診療しています。

救急外来に紹介受診される救急患者は必ずしも病態や病名が明らかになっていない場合でも、初期診療を行い院内各科や院外の専門機関へのつなぎ役としての役割を担っています。

特色

当院は横浜市2次救急拠点病院Aの指定を受け、内因性ショックや心肺停止患者を消防本部常駐医師の指示要請に基づき即座に受け入れています。また脳卒中、心筋梗塞、消化管穿孔や消化管出血など緊急を要する重症患者も各診療科と協力して積極的に受け入れています。

22

薬剤部

部長

梅田 清隆

診療の現場で存在感を示す薬剤師に

30年前の開院間もない病院に見学に訪れた時、外来エントランスのホテルのような広々とした佇まいに驚いたことを今も鮮明に覚えています。そして案内された調剤室の中には当時まだ珍しいコンピュータ化された調剤システムが稼働していました。その様なところで私達は新しい病院薬剤師の姿を求めて日々業務改善を行ってきました。薬物治療の安全を担保するため薬歴チェックをしてから調剤する、注射剤は患者別の取り揃えをして払い出す、病棟に常駐して他のスタッフとの連携を密にするなど今では当たり前になった業務を先駆けて行っていたように思います。こうして作り上げられてきた本院の薬剤師としての文化は今のスタッフたちにも脈々と受け継がれています。これからも診療の場で必要とされる薬剤師が育つ場所として有り続けることを願っています。

23

看護部

副院長・看護部長

楠田 清美

地域医療・介護・福祉に貢献できる看護部を目指して

平成2年の新築移転時には7部署でスタートした看護部ですが、現在は集中治療室・一般病棟・緩和ケア病棟・地域包括ケア病棟・外来部門をあわせ14部署で運営しています。医療制度改革に伴う病床機能の明確化により、当院でも入院から退院までのきめ細かな看護ケアの提供を目指し、看護職員が様々な部署や領域で活動しています。当院はもともと人材育成に力をいれていて専門・認定看護師が多く在籍し、看護職の資質の向上とチーム医療の中で専門性を発揮しています。管理職は、次世代育成と病床管理や人的管理の効率化を目的に、これまでの師長と主任の2段階構成から2019年より副師長制を設けました。クリニカルラダーシステムの中で、各自が自身のキャリアを向上させゼネラルな能力と得意とする領域を見出し、これからも医療に貢献できる人材を育成していきたいと考えます。

現在、働き方改革の中で、看護師による特定行為が推進されています。当院は、2020年4月に神奈川県内で13番目の施設として特定行為研修指定研修機関に指定されました。医行為の実施は医師の負担軽減から導入されていますが、患者に最も近い看護師がタイムリーにケアを提供することで、早期回復とQOLの向上につながると思われますので、今後も特定行為看護師の育成を推進していきたいと思います。

移転30年の節目に看護部の今を書いていますが、今年は新型コロナウイルスについて触れないわけにはいきません。パンデミックによる災害時に等しい状況下ではありますが、現在まで院内感染をおこさず職員が一丸となり対応にあたっています。看護部も感染の専門看護師と認定看護師を中心に、看護職員が発熱外来や新型コロナウイルス入院患者対応を行うとともに、入院外来ともに業務も通常通り実施しています。また、研修や実習受入れ体制についても教育の機会を失うことのないよう流行状況にあわせた体制を整備しました。災害はいつ起こるかわかりません。どのような状況下であっても柔軟に対応でき、適応能力の高い看護職として、慢心することなく地域に貢献できる看護部組織づくりを推進していきたいと思います。

看護部理念

病院理念に基づき急性期病院の看護部として、地域住民の健康維持と増進のための安全で質の高い看護を提供する

- 心のこもったあたたかい看護
- 個人を尊重した看護
- 責任のある看護

■看護部構成

部署	主な科別・特徴	役職者
2A病棟	循環器内科 腎臓・高血圧内科 呼吸器内科	師長　竹田 睦子
2B病棟	地域包括ケア	師長　倉田 弥生
2C病棟	産婦人科・一般混合	師長補佐　市之瀬 妙子
3A病棟	泌尿器科・眼科 耳鼻咽喉科・脳神経内科	師長　渡部 沙江子
3B病棟	脳神経外科 整形外科	
4A病棟	消化器外科 呼吸器外科	師長　村上 華之枝
4B病棟	消化器内科 糖尿病・内分泌内科	
4C病棟	緩和ケア内科・他	師長　新 陽子
外来A	一般外来・看護外来 化学療法室	師長　鈴木 千夏
外来B	救急外来・検査部門	師長　石原 佳代子
集中治療室	General　ICU	
中央手術材料室		師長　澁谷 勲
血液浄化・透析センター	血液透析・腹膜透析 血液浄化	師長　山本 幸江
看護管理室		看護部長　楠田 清美 副看護部長　志村 由美子 副看護部長　澤本 幸子 師長　新田 真樹 師長　中村 麻子

■専門看護師・認定看護師・特定行為看護師

	分野	氏名
専門	がん看護	牧野 祐子 小林 愛美
	感染症看護	中村 麻子
	急性・重症患者看護	菅 侑也
認定	救急看護	本間 美幸
	皮膚・排泄ケア	宮﨑 玲美 坂本 つかさ
	集中ケア	山本 幸江 佐々木 亜理沙
	緩和ケア	桑原 芳子 渡辺 恵み 羽白 裕美
	がん性疼痛看護	榛葉 旬子
	感染管理	田中 梨恵
	手術看護	澁谷 勲
	認知症看護	樋口 みどり
	脳卒中リハビリテーション看護	進藤 たかね
	慢性心不全看護	澤田 大輔
特定行為看護師		山本 幸江 佐々木 亜理沙 澁谷 勲

■看護外来

種類	内容	担当
がん看護相談	がんに伴う身体的、精神的、社会的症状や悩み相談や支援	がん看護専門看護師 緩和ケア認定看護師等
WOC	ストーマケア、セルフケア指導、管理困難症例のケア、術前オリエンテーション等	皮膚･排泄ケア認定看護師
リンパ浮腫	スキンケア、医療徒手リンパドレナージ療法（MDL）、圧迫療法、圧迫化での運動療法	リンパ浮腫療法士
フットケア	糖尿病疾患のフットケア、セルフケア指導、潰瘍部の処置	皮膚･排泄ケア認定看護師 糖尿病足病変指導者
助産師	妊娠中の相談・指導、母乳育児準備	助産師
すくすく相談	母乳ケアや育児の相談など	助産師
糖尿病看護	栄養指導、糖尿病や合併症への対応方法指導	管理栄養士 日本糖尿病療養指導士
泌尿器科特殊	清潔間欠自己導尿（CIC）指導、骨盤底筋体操指導、ウロマスター治療、パッドテスト	皮膚･排泄ケア認定看護師 快適自己導尿指導士
禁煙	禁煙に関する相談、指導	保健師、看護師

■実習校

横浜創英大学看護学部	首都医校看護学部助産学科	神奈川県立よこはま看護専門学校
神奈川歯科大学短期大学部	神奈川県立衛生看護専門学校	横浜市病院協会看護専門学校

■教育

教育目標

1. 根拠に基づいた安全で質の高い看護を提供できる看護職の育成
2. 高い倫理観に基づいた看護を提供できる看護職の育成
3. 専門職業人として自己教育力を培い自律的に学び続けられる看護職の育成
4. チーム医療における役割と責任を自覚し協働できる看護職の育成

教育体制

【クリニカルラダーシステム】

「看護師のクリニカルラダー（日本看護協会版）」を標準指標としたラダーを活用しています。教育プログラムは、ラダーレベルと連動した内容となっており、現時点での臨床看護実践能力の段階や目指す能力獲得にむけて、主体的に学べるような研修が計画されています。

【ジェネラリストとスペシャリスト育成】

院外研修や学会参加はもちろん、専門・認定看護師教育研修や看護師特定行為研修受講を支援し、ジェネラリストやスペシャリストなど多様な領域で活躍できる人材を育成しています。

・2019年IVナース認定制度（標準レベル・アドバンスレベル）
・2020年看護師特定行為研修

特定区分	年度	修了者
腹腔ドレーン管理関連	2020年	3
創傷管理関連	2020年	1
動脈血液ガス分析関連	2020年	2
栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連	2020年	2
呼吸器（気道確保に係るもの）関連	2021年	
呼吸器（人工呼吸療法に係るもの）関連	2021年	
呼吸器（長期呼吸療法に係るもの）関連	2021年	

新人看護師

新人フォローアップ研修

ACLS

助手研修

2C 病棟

大規模地震時医療活動訓練

院内防災訓練

COVID-19 隔離エリア①

COVID-19 隔離エリア②

24 放射線画像科

科長

中島 雅人

患者さん中心の医療を目指して

関内駅から程近い相生町から、当時の新興住宅地であった西が岡に移転して30年が経過し、当科では1/3のスタッフが1990年（平成2年）という年を経験しております。早いもので、初々しい20代であったメンバーも逞しい50代となりました。

黎明期を含めた移転後の十数年は、修理の対応に追われたこと。緊急検査を待つわずかな時間に昼食をとっていたこと。先生と意見交換をしながら検査を進めていく事が多々あったこと。人格者でもあった前任技師長の元で充実した日々であったことなどが思い出されます。

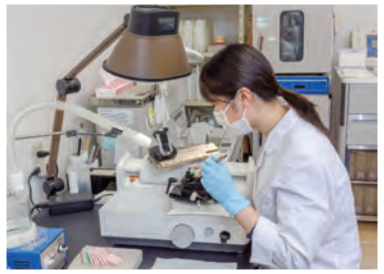
放射線画像の分野も時代が変わり、当院でも現像液を使ったフィルムからデジタル化されたフィルムが主流となり、さらに現在の形である完全フィルムレス化が可能となりました。装置ではマルチスライスCTや3テスラMRIなど、時代のニーズに追いつきながら最新機器の導入も実現でき、次世代を担う若いスタッフも精力的に業務に就いております。

新型コロナウィルスにより大きく世界は変わってしまいましたが、国際親善総合病院の医療が益々発展し、地域へ救急医療の提供ができるよう願い、努めていきたいと思っています。

25 臨床検査科

科長

柴山 弘之



臨床検査科30年の歩み

1990年5月新病院開院に伴い検査スタッフが増強され、12名で新検査室の運営がスタートしました。検査室は病理検査、剖検も行える最新設備でしたが、当時病理経験の技師がおらず、私が病理担当技師としてお声掛けいただき、翌年就任いたしました。さらに、病理医は昭和大学藤が丘病院より非常勤体制で協力を得ることができ、これにより、検体系、生理系、病理系の三部門を備え、総合病院にふさわしい検査体制が整いました。

病院の業績向上に伴い検査件数、検査項目も増加し、これに対応すべく検査スタッフの増員をしていただき、現在は20名で検査に従事しています。

本館施設再整備の際には、検査室の一角を採血室として整備し、2018年より外来採血業務を開始いたしました。検査科の常勤およびパートの臨床検査技師、看護部所属看護師が日替わりで担当しています。

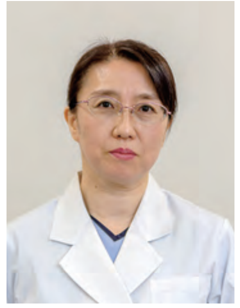
検査スタッフは、新入職員以外全員が諸学会の何かしらの認定資格を取得しています。今後も上位資格を目指し、レベルの高い検査室を目指したいと考えます。

26 リハビリテーション科

科長

岩上 伸一

27 栄養科



科長

高澤 康子

リハビリテーション科 移転30年の変遷

当院においてリハビリテーション科ほど30年の間に様変わりした部署はないのではないかと感じます。平成2年に当院が移転した際、当科は「理学療法部」という名称でマッサージ師3名、事務員1名の計4名でした。翌年に理学療法士（PT）1名が加入し、その後の診療報酬改定により、担当スタッフはマッサージ師からPTへと変更。17年にはPT5名、事務員1名となり、マッサージ師は不在となりました。23年、現在の「リハビリテーション科」に名称が変更。25年に作業療法士（OT）1名が加わることで生活支援や手指、上肢に関する訓練が強化されました。28年に病院改築の一環としてリハ室拡大と言語聴覚室が新設され、スタッフ数はPT13名、OT5名、ST3名、事務員3名に増え、摂食・嚥下の分野についてもサポート可能となりました。29年に開設した地域包括ケア病棟へはPT2名を配属。30年には心臓リハ室の新設と土日祝日365日のリハビリが開始されました。令和2年には専門性の充実と感染予防の観点からフロアー担当制を開始。現在PT16名、OT10名、ST7名、事務員3名の計36名のスタッフで、医師・看護師を中心とした急性期のチーム医療に貢献するよう日々努めています。

脱！厨房

入職後、開院当時の病院紹介らしき冊子を見たことがあり、そこには、ピカピカの厨房機器の前で調理をしている、若かりし頃の調理師さんの姿が載っていました。

それを見た時は「わぁ〜、厨房キレイ！」程度の印象しかなかったのですが、今思えば、「栄養科＝給食を作る科」の時代を象徴した1枚ではないでしょうか。

現に栄養士は栄養相談の時以外、栄養科から出ることは殆ど無く、献立作成・発注・検品等給食業務に係わる仕事で、ほぼ毎日が終わっていました。

それが、当時の科長・先輩の意向もあり、病棟担当制を導入して、昼食時にラウンドし、提供した給食が患者さんに届いてからの様子が分かるようになってから、栄養士業務は大きく変わりました。

NST（栄養サポートチーム）も発足し、栄養の重要性が広く認識されるようになり、多職種協働から医療について学ばせて頂く機会も増えました。今では、多くの委員会やチーム活動に栄養士が参画しています。

まだまだ、進化の途中ではありますが、より患者さんに近い存在で、早期回復のお手伝いに尽力して参りたいと思います。

28
医療機器管理科

科長

増山 尚

医療機器管理科の歴史

私が当院に来たのは1997年の春でした。当時、臨床工学技士は一人しかいなかったため専門部署はなく、施設用度課に配属されました。最初に始めたのは「医療機器の中央管理化」で、各部署の所属となっている医療機器を集約し、医療機器をより良い状態で使用できるように整備しました。その後、腎臓内科開設により透析業務が2004年11月に開始。業務も増加し2007年に二人体制になりましたが、翌年には立会業務規制に基づく業務が一気に拡大しました。2009年には「医療機器管理室」として独立、翌2010年には透析センターが開設するなど変化の激しい時期がありました。そして2011年3月11日、東日本大震災の発生に伴う「計画停電」により、途絶えることのない電源供給の必要性を再認識しました。

そして現在の医療機器を取り巻く環境は、情報の電子化によるユビキタスな環境や医療機器の単独運用からシステムによる運用への移行など利便性が上がることとなります。

29
管理部

管理部長

林 秀行

質の高い医療を提供するための健全経営を目指して

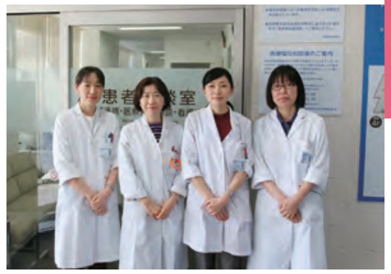
管理部は、経営企画室、経理課、総務課、職員課、施設・用度課、医事課、医療情報課で構成されています。組織図上では、診療部、看護部、診療技術部等各部と並列の位置付けになっていますが、各部門間の調整を図りながら、安定した病院経営を目指すという大きなミッションを担っています。

当院では2016年4月に緩和ケア病棟開設、17年4月には14年8月以降休止していた産婦人科における分娩を再開、また15年10月から始まった本館の改修工事が18年3月に終了し17年8月末からは病棟がフルオープンしています。こうしたこともあり医業収益は14年度の6,383百万円から5年間で約2,000百万円増加しています。しかし医業利益は依然として赤字が続いており、今後収支を改善して黒字化を目指すためには、人件費をはじめとした費用を極力圧縮した効率的な経営を進めていくことが喫緊の課題となっています。

当院が属する社会福祉法人では、特別養護老人ホーム2カ所、介護老人保健施設、地域ケアプラザ、訪問センターそれぞれ1カ所、さらに17年11月に相鉄線弥生台駅前にオープンしたサテライトクリニック「しんぜんクリニック」を運営しています。これら法人内機関の結束をより強化し、医療・福祉の連携を進めることによりサービスの質向上を図り、あわせて利益改善にも努めてまいりたいと考えています。

30

地域医療連携部



部長

飯田 秀夫

地域医療連携部は、病院正面入口を入り左側にあり、医療福祉相談室・入退院支援室・地域医療連携室・患者相談室・がん緩和相談室から成ります。この部は泉区を中心とする横浜西部地区の医療に本院を根付かせるために重要な役割を担っています。

【医療福祉相談室】

医療福祉相談室では、無料低額診療を行う病院のソーシャルワーカーとして、生活保障や社会福祉制度の利用など経済的・社会的な問題に対し、関係機関との連絡・調整を含め、ご相談に応じています。また退院支援看護師と協働し、入院早期より課題の検討や支援に携わり、関係職種とも連携しながら患者さんやご家族のよりよい生活のために福祉的な立場で関わっています。

【入退院支援室】

入退院支援室は、地域医療連携部内でMSW、看護師、事務職員が連携して活動しています。入院前より患者・家族へ関わり、安心して治療や療養ができるよう支援することが役割です。住み慣れた自分の家へ退院できるよう社会資源の調整をはじめ、退院後訪問など継続して関わっています。また更なる療養を必要とする場合は患者・家族の意向に沿って病院や施設を検討し、継続した療養ができるよう橋渡しを担っています。

【地域医療連携室】

地域医療連携室は、2001年に発足し2007年に正面玄関に移行後、2015年より地域連携部の一部として確立しました。構成は部長（副院長）1名、室長（看護師）1名と事務6名です。業務内容は地域医療機関・施設などと病院内各部署との連携をはかることで、地域の方々が継続した医療が受けられるように懸け橋となっています。また、研修会などを通し地域医療の向上に努めています。2020年12月より地域支援病院となり、さらに地域全体で質の高い医療を提供していくため連携推進しています。

【患者相談室】

患者相談室は患者さんが抱く病院や診療に対する不安や不満、要望、苦情に耳を傾け、個人情報に関する要請対応などを主業務として2012年患者さんと医療従事者の対話を促進することを目的に設置され、現在は医療対話推進者と総合案内担当者の2名で運営しております。
日々の対応や問題点は患者サポートカンファレンス（週1回）にて協議。医師1名、看護師3名、社会福祉士1名、医療対話推進者1名により事例の検証やチームメンバーの情報共有、各部署への情報提供などを検討しています。患者さんやご家族の不安や疑問に寄り添い、医療従事者や診療科・地域の医療機関と連携し信頼関係や医療安全の向上に資していきたいと考えます。

【がん・緩和相談室】

がん・緩和相談室は、主にがんと診断された方やそのご家族が、安心した療養生活を送れるようにサポートをさせて頂くための相談窓口です。がんによる身体や心のつらさを和らげたいとき、治療に関するご相談、緩和ケアに関することについて知りたいとき、そのほか困っていること不安なことを誰かに相談したいというときに、がんに関する専門資格を有する看護師が対応しています。
また、必要に応じて、他職種と連携し支援しています。

31

医療安全管理室

室長

清水 誠

医療安全管理室の発足と現状

医療安全については、日本では1999年（平成11年）におきた2つの医療事故（手術患者の取り違い、消毒薬静脈誤注射）により世間の注目が集まり、医療安全体制の構築が進みましたが、アメリカでも同年に米国医療の質委員会から『To Err is Human（人は誰でも間違える）』という歴史的な報告書が発表されています。当院においては、まさにこの同じ年に安全管理委員会が発足し、インシデントレポートの分析、マニュアルの改訂、医療安全研修などが、看護部安全管理委員会などの協力で行われています。その10年目となる2008年（平成20年）に病院長直轄の組織として、医療安全管理室が設置され、専従の医療安全管理者を含む4名の体制で業務が始まりました。この年に各部署に医療安全推進担当者（リスクマネージャー）が配置され、リスクマネージャー部会が発足しました。

現在の医療安全管理室は、室長：副院長（兼務）、副室長：副院長（兼務）、副室長：看護師・医療安全管理者（専従）、看護師長（兼務）、薬剤師（兼務）、臨床工学技士（兼務）、患者相談室長（兼務）、事務員で構成されています。医療安全管理者によるインシデントレポートの収集と分析、医療事故に対する対応、院内巡視、各種指針やマニュアル、説明文書等の整備や改訂、医療安全に関する研修会の開催および広報活動、優秀事例の表彰など活動は多岐に及んでいます。

あたかも事件が起こると現場に出向き尋問を行う刑事や、刑を宣告する裁判官のようなイメージで見られる部門でありますが、複雑かつ予測不能で多様性に富む医療の現場で、多くの医療従事者が自分たちの創意工夫で危険の芽を摘み取り困難な実務をこなしているすばらしい現場の取り組みを、職員全体で共有し、その中からより良い医療安全文化を構築していくことを目指して、日々活動しています。

32

感染防止対策室

室長

飯田 秀夫

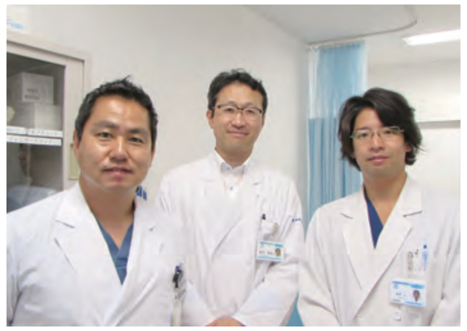
感染症との戦い

感染症対策は開院時、吉村尚高先生中心に院内感染対策委員会として活動し、2002年ICTを発足。2004年飯田秀夫委員長就任、2006年食中毒対策。2007年葛原健太感染看護認定看護師取得、2007年院内感染対策委員会から感染制御委員会(ICC)に名称を変更。2009年新型インフルエンザ対策として、建物の外にテント設置し発熱外来実施。2010年酒井政司先生委員長就任、2012年飯田、中村麻子（感染看護専門看護師）・田中梨恵（感染看護認定看護師）・島崎信夫（感染制御薬剤師）・梅田清隆（薬剤部長）・若山美優（臨床検査技師）をメンバーとする感染対策室が病院長直轄の組織として設置され、2013年から酒井政司先生が飯田にかわり室長へ就任。2013年季節性インフルエンザアウトブレイク対策、水道水中のレジオネラに対する対策、2014年ノロウィルスアウトブレイクに対する対策。2018年飯田が感染対策室に再就任。2020年ICC委員長に滝沢明利先生就任、同年新型コロナウィルス感染対策の実施。

当院において、土曜日に1名の患者が感染すると、翌月曜日にはあっという間に院内多くの患者に感染が広がってしまうことを経験しました。感染対策室は常に感染情報を収集・対策を立案・実施し、感染症が広がることを抑えていかなければならないことを実感しました。

最後に、いろいろご指導いただいている横浜市立市民病院、近隣病院、横浜市健康福祉局のみなさまに感謝いたしますとともに、今後ともご指導等よろしくお願い申し上げます。

33 手外科センター



センター長

森田 晃造

2018年9月に上肢疾患の専門的治療体制の周知および強化のために新たに開設しました。当センターは手を含めた上肢疾患の専門センターとして横浜市西部地域で初の開設となります。治療内容は、肩から指先までの骨折全般、腱・靭帯・神経損傷などの外傷のみならず、手根管・肘部管症候群などの末梢神経疾患、腱鞘炎、テニス肘、関節リウマチなどの炎症性疾患に伴う機能障害など多岐に渡ります。上肢の治療は専門性が高いせいか、開設以来近隣のみでなく遠方からも多くの患者さんが当院を調べて来院され、また整形外科以外の各科の先生方からも患者さんをご紹介いただいています。

受診患者数も増えるにつれて手術件数も並行して増加し、年間300件以上の上肢関係の手術を行っており、県内の病院の中でも有数の手術件数を誇っています。

手のリハビリテーションも専門性が高く治療において重要ですが、当院では専門性を持った作業療法士が計10名在籍し、当院及びしんぜんクリニックのどちらでも施術が可能であり、「診断・治療・リハビリ」といった一連の治療が当院で完結できる体制を整えています。

34 人工膝関節センター

センター長

川﨑 俊樹

国際親善総合病院整形外科では下肢の手術として、半月板手術（縫合術）や前十字靭帯再建術、人工股関節手術などを積極的に行っていますが、中でも私どもが得意とする人工膝関節置換術に力を入れています。当院の人工膝関節置換術は患者さん本来の膝のKinematicsを再現することを目指し、各々の膝の変形の程度や靭帯バランス、骨強度、生活様式やご年齢などに応じて、最適な手術手技とimplantを選択しています。また周術期の疼痛管理に力を入れ、神経ブロックや術中関節包局所注射法の導入により、長期のみならず術後早期の鎮痛は飛躍的に改善しており、非常に好評です。

今後もより安全で侵襲の少ない人工膝関節手術の技術を獲得し、満足のいく看護やリハビリと共にそれらの技術を患者さんへ提供することを心掛けていきたいと考えています。

午前中の一般外来で患者さんに人工関節置換術を十分に理解していただくことは容易でないため、月曜日の午後にインフォームド・コンセントの専門外来を開設して、ご家族と一緒に説明を受けて頂くなどの対応をしています。

35 血液浄化・透析センター

センター長

安藤 大作

当センターでは末期腎不全に対する血液透析（HD）を中心に血漿交換、アフェレーシスなどのあらゆる血液浄化療法に対応しています。腹膜透析（PD）の導入および外来腹膜透析患者の管理・指導も積極的に行っています。医師・看護師・薬剤師・臨床工学技士・管理栄養士がチームで診療を行っています。

透析ベッド数は9床（うち個室1床）、透析装置：10台（うち単身用透析装置1台）で、月・水・金は午前午後の2クール、火・木・土午前1クールで血液透析を行っています。透析を開始（導入）する際には、当院に入院し、数回透析を行って状態をチェックしたのち、自宅近くの透析クリニックを紹介しています。他の病気で当院に入院した際には、入院中の透析を行っています。

36 内視鏡センター

センター長

佐藤 道夫

当センターでは、主に上部消化管（食道・胃・十二指腸）、下部消化管（結腸・直腸）、胆道・膵臓（ERCP）、肺・気管支の4領域を、消化器内科、外科、呼吸器内科、呼吸器外科の専門医師が担当しています。実績としては年間6,000件を超す内視鏡を行い、診断と内視鏡的治療を行っています。

当センターの特徴としては鎮静剤・鎮痛剤を使用して苦痛のない検査を心がけるとともに検査中のモニター、検査後のリカバリールームを使用し、安全を確保しています。

また関連する各診療科が連携を取り、最新の内視鏡機器を常備した的確な診断と最善の治療を患者さんへ提供しています。

さらに地域の医師会の先生方からは、内視鏡検査（上部・下部内視鏡）をFAXにて受け付けているため、検査がスムーズに行うことができます。

2020年より内視鏡室を拡充したことで患者さんにはますます快適かつ迅速に内視鏡検査を受けて頂けるようになりました。地域の患者さんのご健康を守るため、内視鏡センターは今後とも精進していきたいと考えています。

37 化学療法室

室長

冨田 眞人

癌を取り扱う科では集学的癌治療の一環として手術加療以外の化学療法が重要な位置を占めています。一言に化学療法と言っても術前化学療法、術後補助化学療法、切除不能もしくは転移再発に対する化学療法など多岐にわたります。また医学の進歩により、たとえ切除不能もしくは転移再発病変であっても良好な成績を得られるようにもなっており、薬剤の種類によっては入院による管理を要する場合もありますが、可能な限り患者さんの生活スタイルを重視して通院による外来化学療法を積極的に施行しています。

当院では2013年9月から化学療法室を設置、ベッド数を10床確保して、通院による内服抗癌剤以外の治療にも取り組んでいます。年間総施行件数はここ数年、547件、639件、704件と年々増加にあり、2019年度は805件と右肩上がりに増加しています。これからも安全を第一に安心できる化学療法室であるように努めていきたいと考えております。

38 血管撮影室

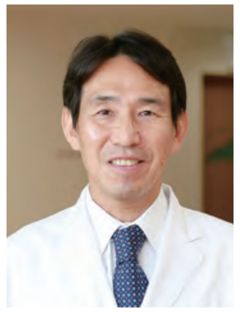
担当部長

高村 武

循環器内科では心臓カテーテル検査（冠動脈造影・血管内超音波・光干渉断層法OCT・冠血流予備量比FFR・左心室造影・スワンガンツカテーテル検査・静脈サンプリング・肺動脈造影・電気性理学的検査・心筋生検）・治療全般（冠動脈ステント留置術・バルーン拡張術・下肢動脈ステント留置術・バルーン拡張術・一時ペーシング・永久ペースメーカ植込術・大動脈内バルーンポンピングIABP・経皮的心肺補助装置PCPS）を行っています。また、腎臓・高血圧内科ではシャントPTA、脳神経外科では脳血管造影を行っています。

循環器救急については24時間365時間対応が可能です。2018年8月にキャノン社製（旧東芝）Biplaneシネアンギオ装置を導入したことにより、鮮明な画像で検査・治療がスムースに行えるようになりました。ガイドラインに準拠した適切で安全な検査・治療を常に心掛けており、低侵襲で患者さんに優しい治療を一層進め、また地域の先生方にとって真に必要とされる医療をタイムリーに提供することが重要と考えています。

39 しんぜんクリニック



院長

有馬 瑞浩

より身近な存在として地域医療に貢献を

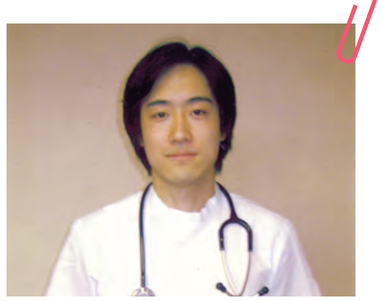
しんぜんクリニックは、平成29年11月1日より弥生台駅前に国際親善総合病院のサテライトクリニックとして開院しました。1階はリハビリテーション施設となり、医療に加え介護の両面から運動機能や生活自立度の改善、社会生活への復帰、障害予防・健康寿命増進を図り、外来リハビリテーションと通所リハビリテーションを行っています。2階は外来診療（内科、小児科、整形外科、泌尿器科、皮膚科）で健康診断や予防接種などを含めて、お子さまからご高齢の方まであらゆる世代の方々の「かかりつけ医」として幅広い疾患に対応しています。また、院内にはエックス線一般撮影装置、心電図、ホルター心電図、骨密度測定装置、超音波画像診断装置、オートケラトレフラクトトノメータ、3次元眼底画像撮影装置、ミラクルチャート、スリットランプマイクロスコープなどが設置されており、国際親善総合病院と電子カルテシステムにより情報を共有化することで、連携を取りながら地域の皆さまへ安全で安心して信頼させる医療提供の充実に努めています。

平成30年4月より横浜市から委託されている医療機関併設型の病児保育室「しんぜん病児保育室」を開設し、仕事や出産等で家庭での育児が困難な期間、病児を一時的にお預かりし看護師・保育士が対応しています。

歴代研修医紹介

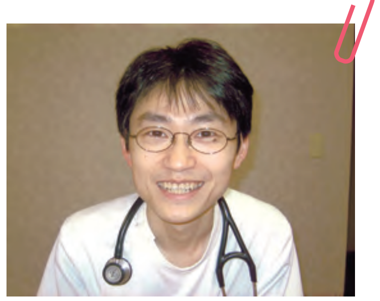
第 1 期生

中尾 裕太



第 2 期生

尾鼻 考慈



第 3 期生

山本 真理子（左）
春山 圭（右）

第 4 期生

飯國 洋一郎（左）
松永 幸治（中）
大塚 剛（右）

第 5 期生

金田 朋也（左）
清水 学（右）

第 6 期生

岡﨑 有恒（左）
新坂 真実子（中）
上原 ありさ（右）

第 7 期生

渡辺 利奈子（左）
寒河江 三太郎（中）
石原 茜（右）

第 8 期生

山本 亜矢子（左）
髙畑 創平（右）

第 9 期生

佐々木 妙子（左）
江原 洋介（中）
竹重 恵子（右）

第 10 期生

松尾 史郎

第 11 期生

西山 智哉（左）
高橋 みなみ（右）

第 12 期生

黄 志芳（左）
鈴木 皓（右）

第 13 期生

宮尾 直樹

第 14 期生

米花 知伸

第 15 期生

石川 重史（左）
矢ヶ部 浩之（右）

第 16 期生

内田 大輔

第 17 期生

木村 友彦（左）
李 眞娥（中）
坂口 顕弘（右）

第 18 期生

石田 裕子（左）
岡田 浩幸（右）

第 19 期生

坂本 和海（左）
須藤 大策（中）
岩佐 絵連（右）

第 20 期生

髙松 知明（左）
平 遥（中）
中村 順子（右）

2018年度研修医修了式

2019年採血実習

宿泊オリ

手術シミュレーション

研修医卒業記念写真2012

多職種新人研修

新型コロナウイルス感染症
（COVID-19）との

闘い、
そして共生へ

感染防止対策室紹介・インタビュー

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）との闘い、そして共生へ

〈感染防止対策室〉

感染対策を円滑に運営するため、2012年4月に設置された組織。室員は病院長が指名する以下のメンバーで構成され、院内感染防止のための実働部隊として、調査・研究・および対策の確立に関し、迅速かつ的確な対応を心掛けて活動しています。

室長　飯田 秀夫 （上段左から2番目）	副院長／脳神経外科部長／インフェクションコントロールドクター（ICD）、ICTリンクスタッフ会委員長
副室長　中村 麻子 （下段中央）	看護師長　看護師／助産師／感染症看護専門看護師 （2011年資格取得※県内第1号の認定）
主任　田中 梨恵 （下段右）	看護師／感染管理認定看護師（2013年資格取得）
滝沢 明利 （上段右から2番目）	泌尿器科部長／インフェクションコントロールドクター（ICD）／感染制御委員会委員長／日本泌尿器科学会専門医
梅田 清隆 （上段右）	薬剤部部長／医薬品統括責任者／医療情報課課長／感染防止対策室兼任／神奈川県病院薬剤師会教育研修委員
島崎 信夫 （上段左）	薬剤部部長代理／感染制御専門薬剤師／抗菌薬支援チームリーダー／神奈川県病院薬剤師会学術情報委員
遠藤 真佐美 （下段左）	臨床検査科主任／細菌検査室担当臨床検査技師／緊急臨床検査士／2級血液学臨床検査士

田中 梨恵主任（左）と中村 麻子副室長（右）

Interview

副室長
中村 麻子 看護師

主任
田中 梨恵 看護師

国際親善総合病院では2020年2月のクルーズ船の接岸時より、横浜市保健所と連携をとりつつ「重点医療機関協力病院」という立場で陽性および、疑い患者の入院を受け入れてきました。同時に発熱外来を設けPCR、抗原検査を活用しつつ、クリニックの先生方や患者さんからのご依頼、ご相談に随時応じてきました。このような未曾有の事態のなか、専門知識とチームワークで病院全体を支えてきたのが感染防止対策室の存在です。

コロナ禍で迎えた西が岡移転30周年という当院にとっての大きな節目。これまで受診の判断や院内外からの相談に応じるなど、まさに医療現場の最前線で闘ってきた対策室メンバーの中村麻子看護師と田中梨恵看護師の2人に話を聞きました。

一陽性患者受け入れから1年が過ぎました

中村：私は元々、産科病棟での業務と兼任でしたが、2020年5月から当対策室の専従になりました。まさに生活が一変しました。受け入れ開始当時は医療現場でもガウンやマスクが不足して、同じものを使わざるを得なかった。加えて、衛生用品の不足が余計に市民の皆さんの不安を煽っていましたから、日々掛かってくるご相談の電話の内容も最初は攻撃的なものも多くて。さすがに気が滅入ってしまうこともありましたが、できるだけ皆さんに寄り添いながら、適切な判断を下すことに尽力してきた1年でした。徐々に物資が十分に行き届くようになり非常に安心しました。

田中：これまでの対策室の主な業務は、院内の患者さんや先生方への対応がメインでしたから、受診前の一般の方の対応は初めてでした。私たちは主に電話での対応で、つまり相手の顔が見えない。中村さんの話にもありましたが「陽性者を受け入れているなんて怖くて外来に行けない」というような相談や、時には心ない言葉を投げかけられることもありました。けれど、特に持病がある方に関しては継続して受診してもらわないといけない。皆さんに安心して受診してもらえるよう、院内での具体的な感染対策の説明などを丁寧に行ってきました。

中村：誰もが、何から何まで初めての状況。だからこそ、私たちはお互いの存在に救われて

います。そしてもちろん、感染防止対策室のメンバーの皆さんにも。ここに寄せられる相談内容は具体的にメンバー間で共有して、次の対応の参考にしています。

田中：1つの病院につき、250床に1人の割合で感染症対策を専門とする者が設置されることが理想とされています。当院は287床ですので本来であれば1人。ただ、このような緊急事態のなかで全て1人で対応するのはかなりの重圧ということで、早くから看護部長を含め上層部のご決断で私と中村さんの2人体制を築いて頂きました。迷ったとき、相談する仲間がいるのは非常に心強かったですね。

―「感染防止対策室」というチームの雰囲気の良さが伝わってきます

田中：感染対策については、チームで決定したことが病院全体を動かすことになります。だからこそ、それぞれの分野の専門的な知識や意見をすり合わせながら、適切な判断を下さなければならない。そういった流れの中で、自然と足並みも揃うのだと思います。

中村：毎日多くの相談がありますが、実際の件数などのデータ処理は事務の方が担当し、私たちの業務を支えてくれています。メンバーは医師、薬剤師、検査技師とそれぞれがその分野においてはプロフェッショナルなので、悩んだときはすぐに相談しています。病院全体としても非常に協力体制が整っていて「まずは感染症対策を」という空気が醸成されたのは院内すべての職員が同じ方向をみて努力していたからであり感謝しています。

―お二人が注意していること、心掛けていることはありますか?

中村：ここで受けた電話の総数は記録開始の2020年3月から数えて約3,000件（2021年2月現在）。私たちが不在の夜間休日にもこうした相談には外来スタッフが対応しており、実際の受診者数は、約2,300件となっています。そのような中で、感染症対策を専門とする看護師が2人、すなわち2通りの意見があることは大きな強みでもありますが、それと同時に異なる見解が生まれてしまった場合、現場を混乱させる可能性もあるんです。

田中：これはその通りで、どちらも言っていることは正しかったとしても2人のジャッジがバラバラでは不信感を与えかねません。お互いの意見をすり合わせて、一致した意見を伝えるようにしています。感染症対策を専門にやってきたとはいえ、この未曾有の事態。まさに、一から2人で一緒に学んできました。

―感染拡大当初と現在を比べて、変化を感じることはありましたか?

田中：小さなことですが、例えば院内でマスクを着用していない患者さんを見掛けて声をかけたときの反応の違いでしょうか。当初は怪訝な顔をされることも多かったのですが、今では素直に病室に戻ってマスクをつけてくれる人が大半です。一般の方の感染対策に対する意識が大分浸透してきて、私たち自身も声掛けをし続けてきた甲斐があったなと。こうしたほんの小さなことも私たちの大事な役目。繰り返しリスクやメリットをお伝えすることで、病院全体が感染予防対策を十分に行っているというアピールにもなりますから。

中村：そうですね。あとは、自分たち自身の対応力や伝える力のようなものが身に付いたような気がしています。感染拡大当初から、院内に向けた感染症関連の情報や対策をメールで送っているのですが、世の中の流行状況によって対策も変わるので、毎日のように送っていた時期もありました。医師をはじめメールを読む時間もないくらいそれぞれ忙しいなか、「どうしたら読んでもらえるのか」を必死で考えました。

田中：インパクトのある件名を考えたり、冒頭の数行で内容が分かるように工夫したり…

中村：はい。メールを開いてもらえないのならプリントを配ったり、ポスターを掲示したり。横浜市西部地区の地域医療を担う急性期総合病院として、地域の開業医の先生方や高齢者福祉施設をはじめとした施設にも感染対策のレクチャーや情報発信を行ってきました。今考えれば、「人へ伝えること」の大切さを学べた良い機会で、私たちにとって大きな財産になっています。

田中：こう振り返ってみると、業務が多岐に渡り過ぎるあまり、世間一般がイメージする「看護師」っぽくはないですよね。けれど人が成長していくというのはこういうことなのかなと。これまでやってきたことには必ず意味があると思う。必ず私たちのこれからの糧になっていくと思います。

―新型コロナウイルスとの「共生」時代の今、思うことはありますか

中村：私はこの病院に20年ほど務めており、平成14年に設立された感染制御委員会の立ち上げメンバーとしても、長らく感染対策に関わらせて頂いています。苦しいことも多いですが、病院一丸となって感染症と闘いながら克服してきたこれまでの歴史に携われて感慨深くも思っているんです。医学は感染症の対策や治療の探求により発展してきたと言っても過言ではありませんから。いつかきっとマスクなしで笑い合える日が来ることを信じて、目の前の仕事をひたすらこなしていきたいと思っています。

田中：感染管理認定看護師の資格を取った時はまさか、世の中がこんな事態に見舞われるなんて想像もしていなかったことです。未だ先行き不透明で、正直息切れすることもあります。しかしワクチンの接種も進んでいます。WHOは新型コロナウイルスの世界的な大流行について「100年に1度の衛生上の危機」との見方を示していますが、自分が今こんな時代に生きて、現場の最前線に立っていることを誇りに感じながら、大切な「人生の一部」として自分に出来ることを精一杯やっていきたいと思っています。

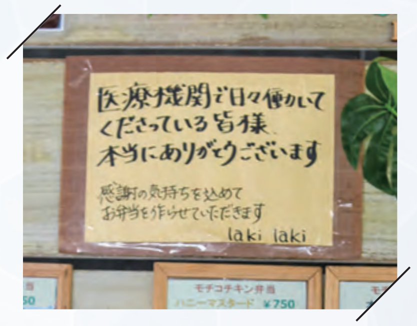
フードトラック

検温チェック

4B 隔離室前

臨時感染制御委員会

サーモグラフィー



応援メッセージ

中和田南小学校より

第Ⅲ部

そして未来へ

若手職員座談会

それぞれの職種で活躍している若手職員９人が入職動機や現在の仕事、そして
国際親善総合病院の風土や環境、これからの未来について本音で語り合いました。

出席者
看護部（外来B）平井 愛 ／ 看護部（4B病棟）平塚 かおり ／ 看護部（集中治療室）菅 侑也 ／
薬剤部　綿貫 真優 ／ 放射線画像科　佐藤 正和 ／ 臨床検査科　今井 貴将 ／
リハビリテーション科　大木 宗平 ／ 栄養科　嶋 美菜子 ／ 医事課　丸山 裕衣　※順不同

入職当時を振り返って

佐藤：私は2019年に入職し、3年目になります。急性期の病院を志望したのは、希少疾患から一般的な疾患まで、様々な疾患の治療に関わりたいと考えたからです。ただ規模が大きすぎると、患者さん一人ひとりと丁寧に接する時間を確保するのはなかなか難しい。そういった点から考えると、親善は病床数やモダリティ等の設備も充実しているのでまさに理想でした。

大木：私も急性期のリハビリテーションに関わりたいという想いから親善に入職を決めましたが、規模が「ちょうどいい」分、患者さんの入院から退院までを自分が一貫して見守ることが出来るのが嬉しいです。病気やけがで治療を受けた人を早期から支援していく過程で、機能や能力の改善を実感することができますし、短い時間で多くの症例を経験することもできますから。

綿貫：その分、個人個人の責任が大きくなるのも事実ですね。薬剤部であれば調剤も、在庫の管理も服薬指導も全て行います。大変とひと口に言ってしまえばそれまでですが、逆に言えば若手のうちから様々なことに挑戦できるということ。流石に1年目の夏に当直を任されたときは緊張で寝られなかった記憶がありますが、今となっては忘れられない良い経験になりました。

今井：私は入職前の病院実習先が規模の大きい大学病院だったこともあり、正直「検査技師は目の前のものをひたすらこなすだけ」といったイメージがどこかにありました。実際、親善に入職してみたらそのイメージは見事に覆されました。血液検査など外来の対応もするので予想以上に患者さんと触れ合える機会も多い。もちろん検体を調べることができる環境も整っているので、様々な知識も身に付きました。

平井：当院は人口15万人の泉区内唯一の救急医療機関として、泉区を中心とした近隣地域から救急搬送を受け入れています。患者さんの状態が変化しやすく深刻な場合もあり、常に緊張感が漂う状況ではありますが「地域の人たちのために働いている」という実感が湧きやすいことが、大きなやりがいに繋がっています。突然の病気や怪我など不安のある患者さんの心理面や家族への配慮を忘れることなく、「国際親善総合病院に行けば大丈夫」という安心感を持っていただけるよう努力していきたいです。

医療も人も「あたたかい」のが親善

平塚：地域との距離も近いですが、院内の雰囲気も非常にアットホームですよね。先輩・後輩関係なく意見を交わしやすい雰囲気があります。だからこそ、若手でも活躍できるチャンスがある。これまでの親善の先輩方が積極的にそういう雰囲気づくりをしてきてくださったおかげだと思っています。

菅：確かにドクターもナースもリハも、とにかく良い意味で距離が近いですよね。部長も副院長も、皆さん気さくに声をかけてくださいます。だからこそ気軽に患者さんのことも相談しやすい空気があるので、チームワークもとても良いのではないかと思います。

嶋：チーム医療を円滑に進めて、患者さんの状況に的確に対応した医療を提供するためにも、日々のコミュニケーションが重要になってきますよね。

佐藤：新しいことに挑戦するときも先輩方が「責任はとるから思いっきりやりなさい」とどんな時も優しく見守ってくださいます。失敗を恐れずに様々なことに挑戦できる環境を整えて頂けるなんて、これほど心強いことはないです。

大木：リハ科は若手も多いので明るく勢いがあります。また科長自身が家族思いな方ということもあって、職員の家族のことまで考えてくださいます。だから休みも柔軟にとれる雰囲気があるんですよね。

放射線画像科　佐藤 正和さん

看護部（4B病棟）平塚かおりさん

リハビリテーション科　大木宗平さん

丸山：確かに皆さん働き方にメリハリがあります。職場全体で「帰れるときはさっと上がる」というような雰囲気が醸成されていることが毎日気持ちよく働ける大きな理由だと思います。下の世代のためにも、今後は私たちがこの温かい風土を継承していけるように努力していかなければいけないなと改めて思いますね。

最大のやりがいは「患者さんの笑顔」

嶋　：管理栄養士として一番嬉しい瞬間は患者さんが食事を摂ることができなかったところから食べられるようになって、無事に退院まで見届けることができたとき。治療食の提供や栄養療法の提案をするなかで「私が行ったことで、もし患者さんに悪い影響が出たらどうしよう」という緊張感は常にありますが、食も治療の一部を担っているのだという誇りや責任は大切にしていきたいです。

丸山：来院した方を最初に対応させて頂くのが医事課の職員です。そしてお帰りになる前のお会計も担当する。そういった意味では患者さんの最初と最後に立ち会えるので、表情の変化や「ありがとう」の一言が最高に嬉しいです。いつも当院の職員を代表する気持ちでその言葉を受け取っています。その度に背筋が伸びる気持ちです。

綿貫：医師や看護師、リハビリテーションスタッフなど異なる職種のスタッフとのやり取りが欠かせない病院薬剤師の仕事には、難しさを感じることもあります。ただそういったチーム医療のなかで薬物療法が安全かつ最大限の効果を得られるように症状や効果、副作用についてアセスメントすることが薬剤師の役目です。また、患者さんのすぐそばでサポートできることも魅力のひとつであり、私にとって大きなやりがいを感じるときもあります。

平井：救急外来では初めて接する患者さんやその家族がほとんどで、滞在時間も短く、信頼関係を築くことが難しいですが、限られた時間の中でも笑顔を忘れずコミュニケーションを多く取るようにしています。医師や看護師、コメディカルが協力し、患者さんの苦痛緩和や救命のための検査や手術へ無事に送り出せた時にやりがいを感じます。

今井：臨床検査科では血液検査や心電図エコー等、院内のほとんどの検査を行っているのですが、その分、広く色々な症例が見られるのが興味深いです。ひとつの疾患に対して様々な見方ができる。私たちの行った検査が疾患の早期発見や診断に繋がる事もあり、責任とやりがいを感じています。

菅　：私はICUを担当しているのですが、医療と看護を組み合わせて患者さんを上手く回復に導くことができた瞬間はとても嬉しい。私たちにとっては当たり前でも、患者さんにとって「入院」というのは人生で最も重大な出来事のひとつですよね。だからこそ患者さんとそのご家族に安心していただけるように出来る限りのことをしていきたいです。

未来に向けて

平塚：私は現在コロナ病棟で勤務しているのですが、やはり下の世代の職員たちの緊張感は高まっている雰囲気があります。患者さんのケアはもちろんですが、今後も出来る限り後輩たちのフォローにも力をいれていきたいです。また、現在4B病棟では看護学生の実習受け入れもできていないので早く学生の皆さんとお会いしたいです。私自身、実習の雰囲気が決め手となって親善を選んだこともあるので。

今井：様々な検査を行うので、一通りの検査業務をこなせるようになってからも勉強は欠かせません。10年以上の経験がある技師でも見破れない難しい症例もあるんです。私自身も2年目くらいの頃、壁にぶつかっていた時期がありました。技師の意見をもとに医師が診断を下すこともあるので、日々進歩する治療法や検査機器などについてしっかり学び続けなければいけないと思っています。

地域を支え、次世代を担う医療人として

嶋　：昨年8月から、専任医師や看護師など多職種からなる栄養サポートチーム（NST）のメンバーとして活動しています。重篤できめ細かな栄養サポートを必要とされる患者さん方を担当するなかで、採血の結果やリハビリの具合、数値のチェックをしながら多職種の皆さんと情報交換をしたりしています。院内を上から下まで駆け回る日々は忙しいですが、食事も治療の一環だという責任を胸にこれからも成長し続けていきたいです。

丸山：医事課の職員は直接患者さんを治療することはできませんが、治療を行う医師や看護師たちが患者さんにとって最善の治療を提供できるよう、仕事に専念するためのサポートができるという大きな魅力があります。これからも患者さんが訪れやすく、職員の働きやすい環境づくりに努めていきたいと思います。

菅　：この春で入職して10年目になりました。昨年、無事に「急性・重症患者看護」専門看護師の資格を取得できたので、色々な意味で節目の年になると思います。専門分野に関しての教育や研究を通して、生涯にわたって知識やスキルを向上させることを目標に、これからも目の前の患者さん一人ひとりの命に真摯に向き合っていきたいです。

大木：私は昨年、がん患者を対象としたリハビリテーションの資格を取得しました。がんそのものによる痛みや、手術、放射線治療などの影響で身体の機能が落ちたり、精神的な面でも苦痛を抱えている患者さんたちにどう向き合うかが、自分のこれからの大きな課題だと思っています。恐らくすぐに答えが出るようなものでないと思いますが、患者さんのQOLを支え、一人ひとりが自分らしく生活できるように全力を注いでいきたいです。

平塚：親善病院に新卒で入職し8年目になります。先ほど菅さんのお話にも少しありましたが、今後、専門分野を極めるのか、または人材育成に力を入れるのかといった、自分の方向性を決めキャリアアップを考えていく時期になってきたのではないかと思います。現在は教育担当として、学生指導に力を入れていますが今後、新しく入ってきてくれた方たちに「親善で働いていて良かった」と思ってもらえるような環境づくりをしていきたいですね。

臨床検査科　今井 貴将さん

薬剤部　綿貫 真優さん

看護部（外来B）平井 愛さん

看護部（集中治療室）菅 侑也さん

栄養科　嶋 美菜子さん

医事課　丸山 裕衣さん

未来への展望

働きたいと思える職場環境にしていきたい

総務課 鈴木 啓太

年々医療ニーズが高まる一方、若年層人口減少による労働力不足で高齢者を支える側の機能が衰え、医療を支える医師不足・確保は課題となっています。

現在、私は初期臨床研修医の担当事務を任されており、研修医にとって良い環境づくりを目指して日々過ごしています。各科多忙ではありますが、指導医の先生方には研修医にさまざまな症例経験をさせていただきたく、そのためには現在よりも積極的に救急患者や紹介患者の受入を行い症例確保することが大切だと思います。

研修医は初期研修修了後、大学医局に所属または他病院に就職などいろんな形で医師としてキャリアを積んでいきます。そのとき親善病院で研修して良かった、将来医局人事などでまた戻ってきたいと思われる病院にしていきたいです。

親善病院の放射線技師として

放射線画像科 宇野 和也

近年の技術革新により、放射線の医学利用は必要不可欠なものとなりました。今後も放射線医学領域は進化・発展を続けることが予想され、常に最先端の技術や知識を更新し続けていく必要があります。そのためにも学会等へ参加して得た技術や知識を職場で共有しやすい環境を整え、若い技師の育成や放射線検査の質向上に努めたいと思います。

放射線技師にとって被ばく管理は非常に重要な仕事の１つです。2020年4月の医療法改正により診療用放射線安全管理が義務化され、線量管理などが今後厳しくなっていくことが予想されます。放射線を扱う医療職として放射線安全管理へ積極的に携わり、患者や放射線診療従事者のために安心・安全な放射線検査を提供していきたいと思います。

今までもこれからも

看護部 進藤 たかね

今まで急性期医療に携わり、患者さんの回復がその後の生活の質に与える影響の大きさを強く感じてきました。そして患者さんの回復に看護の質が与える影響が大きいことも実感しています。「看護は目と手で看るもの」と新人の時に言われた言葉。患者さんを目で見て、手で触れて、何が必要かを感じ、患者さんの思いを推し量り、そこから必要なケアを提供していく。それはこれからも変わらない看護なのだと思います。ニーズが多様化していく中、もっと感じる力を研ぎ澄まし、患者さんが「その人らしく生きる」ことを支援できるようになりたい、患者さんに「この病院でよかった」そう感じてもらえる病院にしていきたいです。

臨床工学技士として考える医療の将来

医療機器管理科 菅原 優己

2025年には団塊の世代が75歳以上の後期高齢者となり、2040年になると働く世代に対して高齢者の比率が最大になると言われています。これからの超高齢化社会に向けて、医師の負担軽減を目的に、医療機器分野ではAIやIoT（モノのインターネット）をコンセプトとした新技術の開発が進められています。

私たち臨床工学技士は、将来そういった新しい機器が導入された時、機器と病院スタッフの架け橋となれるように、新技術の動向に目を向けていきたいと考えています。

私が目指す 薬剤師になるために

薬剤部　綿貫 真優

10年前の私は、患者さんを笑顔にする薬剤師になりたくて必死に勉強しました。そして10年を経た今の私は、かつて憧れていた薬剤師になれただろうか？いや、まだまだ目指したい薬剤師にはほど遠い。しかし、これから10年後の私がどうなりたいのか見えてきました。多くの経験を積み、感染症治療の認定薬剤師の資格をとり、感染症の治療に薬剤師として貢献したい。そして患者さんを笑顔にできる存在でありたい。まさに学生時代から目指していた薬剤師像そのものです。

私たち薬剤師の使命は「薬物治療の安全の確保と質の向上」です。私は、この使命を果たしていけるよう努力し、患者さんや他の医療スタッフに信頼されるために、現状維持に満足することなく邁進し続け、私が目指す薬剤師になりたいと思います。

10年後20年後の リハビリテーション

リハビリテーション科　作業療法士　吉田 倫子

日本の人口のピークは2008年であり、徐々に減少傾向となっています。その中で65歳以上の人口は増加を続け2042年にピークを迎え、その後は減少に転じると推計されています。少子高齢化は進み2050年には1人の若者が1人の高齢者が支える構図となるとも言われています。2000年に介護保険制度が開始され、2015年には新オレンジプランが打ち出され健康寿命の延長と自助・互助・共助・公助から地域包括ケアシステムの構築や在宅生活の延長がすすめられています。

そして最近のリハビリ業界では、IT化もすすみVRの使用などスマートリハと呼ばれる分野の拡大がされています。また新型コロナウィルスの感染拡大により遠隔リハビリテーションも検討拡大されています。

これらの変化・状況から、10年20年後のリハビリの可能性は無限であり、必要性が高いことは確かです。また、目の前の患者さんへの1対1の介入へも変化が生じることは違いないと言えます。そんな未来に向け、地域の中核を担う当院は、目の前の患者さんだけでなく院内スタッフはもちろん地域住民や地域企業のニーズへの対応ができる柔軟性を身につけていきたいです。

過去を積み重ね、未来の臨床検査へ

臨床検査科　安藤 俊

今年で親善病院に入職して、丁度20年となりました。免疫・血液・一般・病理・輸血と様々な検査を経験し、輸血では多くの指導・刺激を得て認定輸血検査技師の資格を取得できました。

20年の間で輸血検査を例にとっても用手法の試験管検査から自動機器での検査へと変遷を遂げ、輸血製剤もiPS細胞由来血小板製剤の開発が進み、将来的にも多くの臨床検査環境は変化すると思われます。しかし、機器で判定できない難解な血液型や緊急時の輸血準備には、過去から積み重ねた試験管検査の技術・知識が重要であります。

未来においても、日々めぐりあう人・症例・疑問を大切にして、考え悩み謙虚な技術・知識を積み重ね親善病院に必要な未来の臨床検査を柔軟に作りあげていきたいです。

2年間の研修医生活を終えて

研修医　岩佐 絵連

私は初期研修医として、当院でこの2年間たくさんの経験を積ませていただきました。研修医の人数が少なく自由度が高いため、どの科でも十分に症例を学び、志望科を長期間回るなど希望も通りやすく有難い環境でした。上級医の先生方にはご迷惑をおかけすることも多々ありましたが、根気強く指導をしていただいて感謝しております。またコメディカルの方々にも本当に良くしていただき、充実した研修生活を過ごすことができました。

来年度からは泌尿器科医に立場を変え、改めて当院で研修させていただくことになりました。この2年間で得た経験をもとに、地域医療に貢献できるよう努めていきたいと思います。

Memories

病院だよりNo.244号表紙

飯田副院長・安藤病院長・清水副院長

2020年1月年賀の会

泉区消防出初式

緩和ケア病棟開設時
神奈川新聞インタビュー

外国人墓地にて

2018年 入職式

制服インタビュー

Memories

医局会　外科系

医局会　内科系

看護フェスティバル

医局会

はなみずき保育園児訪問

キッズセミナー

部活動

2016年バレーボール部優勝

2016年ミニコンサート

2016年 野球部準優勝

書道部
書道教室

2017年山登り隊

2019年ゴルフ部

誕生日会

祝還暦

Memories

接遇研修

病棟カンファレンス

ICUカンファレンス

CVC講習会

JMECC研修

ICLS研修

防災訓練

テロ訓練

2016年 竜巻防災訓練

バースクラス

ボランティア感謝会

産婦人科地域連携の会

芹が谷地域ケアプラザフェスタ

健康懇話会

しんぜん院外健康教室

泉区地域医療連携の会

分娩再開後
親善ベビー第1子誕生

2014年 雪かき

管理部

2C病棟にて

Memories

クリスマスイベント

お花見

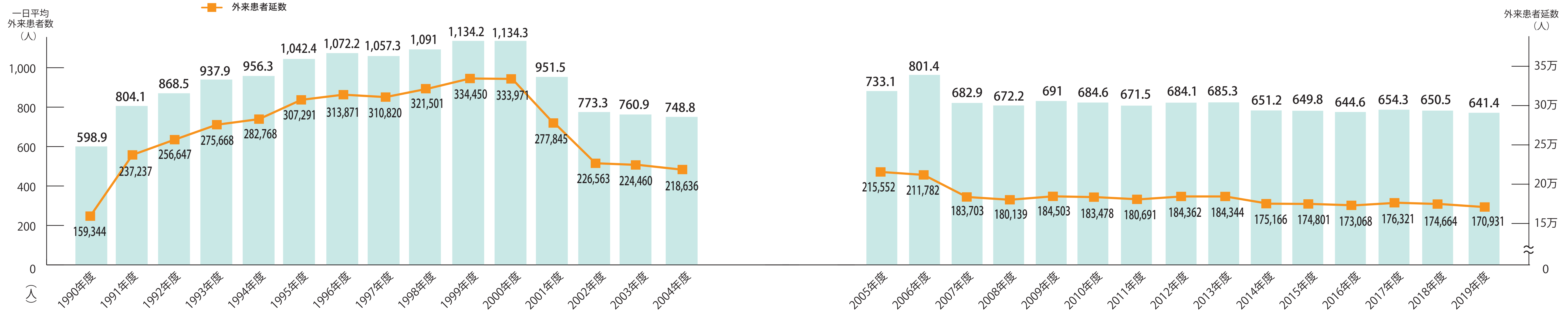
チーム亀山

忘年会

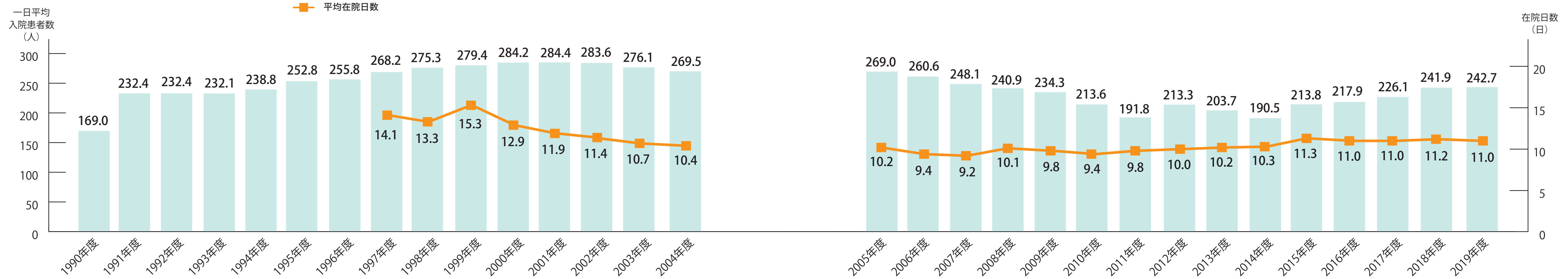
資料編

●職員数／病床数

●外来患者数の推移

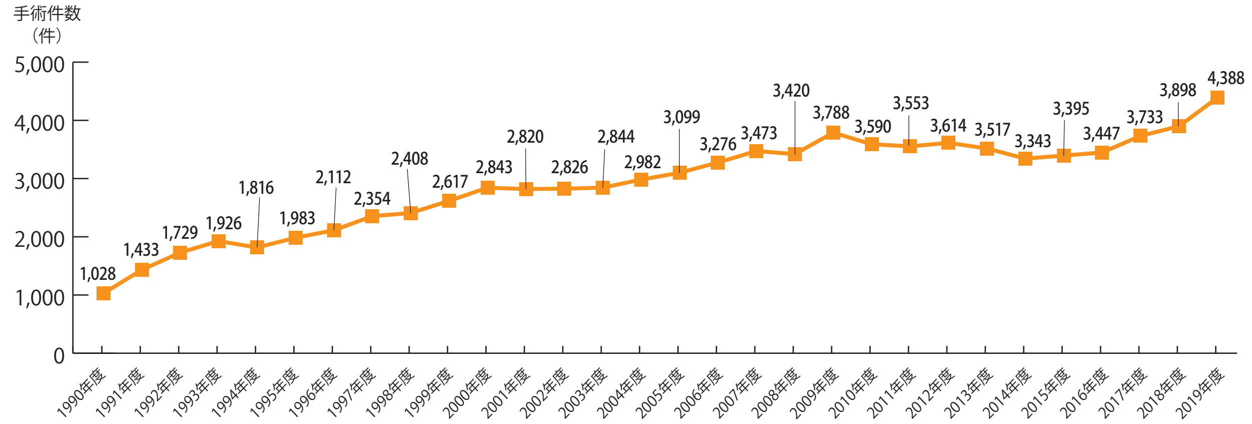


●入院患者数・平均在院日数の推移

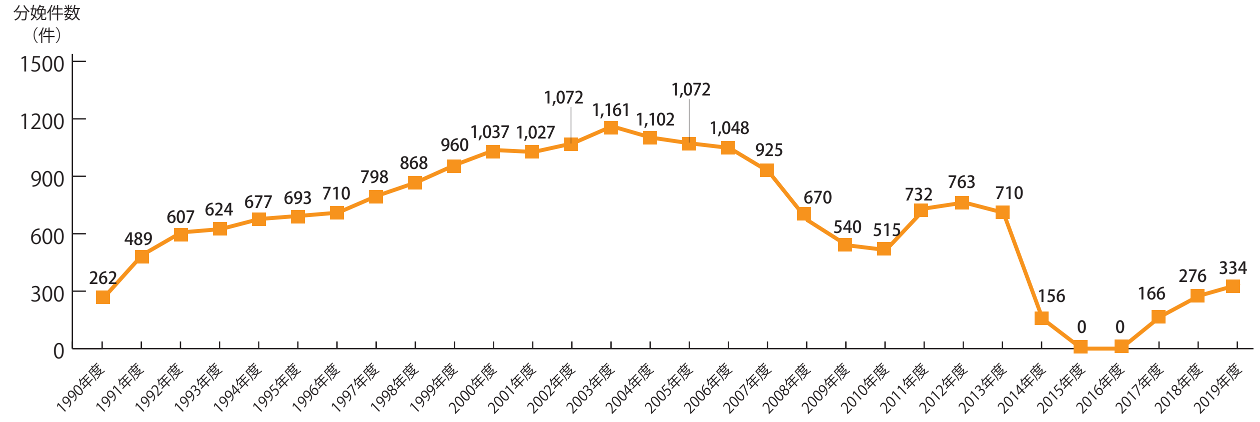


資料編

●年間手術件数（中央手術室）



●年間分娩数

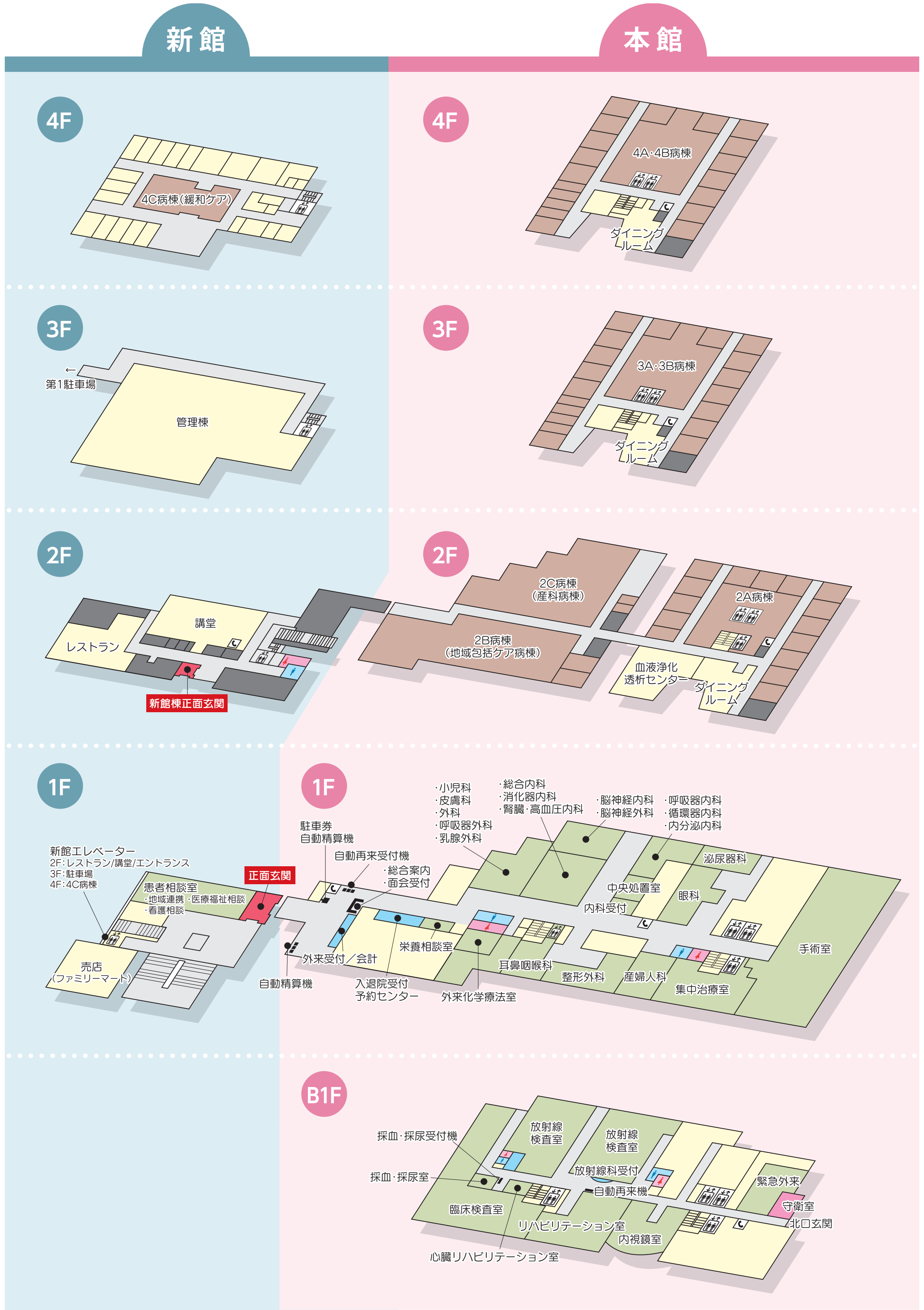


●手術実績

	腎臓・高血圧内科	呼吸器外科	外科	整形外科	脳神経外科	泌尿器科	産婦人科	眼科	耳鼻咽喉科	皮膚科	麻酔科 ※
1990年度（移転後）	―	―	184	159	34	73	291	212	66	1	1,028
1991年度	―	―	283	162	47	181	443	198	98	9	1,433
1992年度	―	―	345	171	232	39	471	308	143	7	1,729
1993年度	―	―	346	212	59	203	506	423	150	18	1,926
1994年度	―	―	332	179	67	187	478	413	153	7	1,816
1995年度	―	―	322	167	99	275	497	499	121	3	1,983
1996年度	―	―	379	194	98	285	502	535	115	4	2,112
1997年度	―	―	372	207	112	271	611	692	66	23	2,354
1998年度	―	―	385	238	93	301	573	729	77	7	2,408
1999年度	―	―	474	285	70	256	631	810	89	2	2,617
2000年度	―	―	482	267	79	245	684	961	90	3	2,843
2001年度	―	―	442	297	91	252	634	940	136	1	2,820
2002年度	―	―	453	242	81	256	686	939	121	3	2,826
2003年度	―	―	482	450	82	383	760	599	85	3	2,844
2004年度	―	―	500	565	84	453	734	536	73	1	2,982
2005年度	―	52	535	593	94	438	709	571	98	2	2,126
2006年度	―	41	554	569	68	467	737	721	85	4	1,926
2007年度	―	60	556	681	58	474	652	898	91	―	2,015
2008年度	―	56	526	616	73	528	651	889	79	1	2,020
2009年度	9	33	614	641	86	628	595	1,086	93	1	2,121
2010年度	25	36	544	541	89	587	570	1,107	80	11	1,989
2011年度	37	57	513	498	77	612	630	1,058	70	―	2,010
2012年度	41	31	511	598	107	544	632	1,068	82	―	2,093
2013年度	50	46	487	608	59	560	503	1,127	77	―	1,920
2014年度	40	35	576	666	91	512	56	1,269	90	4	1,611
2015年度	57	44	508	695	98	524	81	1,283	97	6	1,591
2016年度	75	40	556	635	99	610	174	1,166	87	4	1,659
2017年度	73	13	662	675	74	593	221	1,398	21	―	1,832
2018年度	60	8	620	713	75	608	277	1,506	27	―	1,927
2019年度	67	3	626	778	68	702	281	1,834	27	―	2,019

※ 1990 ～ 2004 年度まで局所麻酔含む

●フロアマップ



●組織図

- 病院長
  - 副院長
  - 医療安全管理室
  - 感染防止対策室
  - 健康管理室
  - 各委員会・部会
  - 診療部
    - 診療科
      - 総合内科
      - 消化器内科
      - 循環器内科
      - 糖尿病・内分泌内科
      - 腎臓・高血圧内科
      - 脳神経内科
      - 精神科
      - 呼吸器内科
      - 呼吸器外科
      - 小児科
      - 外科
      - 整形外科
        - 人工膝関節センター
        - 手外科センター
      - 脳神経外科
      - 産婦人科
      - 眼科
      - 耳鼻咽喉科
      - 皮膚科
      - 泌尿器科
      - 形成外科
      - 画像診断・IVR科
      - 麻酔科
      - 救急科
      - 緩和ケア内科
      - 病理診断科
    - 中央診療支援部門
      - 化学療法室
      - 新生児未熟児室
      - 内視鏡センター
      - 血液浄化・透析センター
      - 医療クラーク室
  - 診療技術部門
    - 放射線画像科
    - 臨床検査科
    - リハビリテーション科
    - 栄養科
    - 医療機器管理科
  - 薬剤部
  - 看護部
    - 外来A
    - 外来B
    - 集中治療室
    - 中央手術材料室
    - 2A病棟
    - 2B病棟
    - 2C病棟
    - 3A病棟
    - 3B病棟
    - 4A病棟
    - 4B病棟
    - 4C病棟
    - 血液浄化・透析センター
    - 看護管理室
  - 管理部
    - 経営企画室
    - 総務課
    - 経理課
    - 職員課
    - 施設用度課
    - 医事課
    - 医療情報課
  - 地域医療連携部
    - 地域医療連携室
    - 入退院支援室
    - 患者相談室
    - がん・緩和相談室
    - 医療福祉相談室

●病院概要

名　　　称	社会福祉法人 親善福祉協会 国際親善総合病院
所　在　地	〒245-0006　神奈川県横浜市泉区西が岡1丁目28番地1
電話番号／FAX	TEL.045-813-0221（代表）／ FAX.045-813-7419
役　　　員	理事長／山下 光　病院長／安藤 暢敏　副院長／飯田 秀夫 副院長／清水 誠　副院長／佐藤 道夫 副院長・看護部長／楠田 清美　管理部長／林 秀行
診 療 科 目	総合内科　消化器内科　循環器内科　糖尿病・内分泌内科　腎臓・高血圧内科 脳神経内科　精神科　呼吸器内科　呼吸器外科　小児科　外科　整形外科　脳神経外科 産婦人科　眼科　耳鼻咽喉科　皮膚科　形成外科　泌尿器科　放射線科　麻酔科　救急科 緩和ケア内科　病理診断科　リウマチ科
敷 地 面 積	29,430㎡
建物延床面積	20,900㎡
病　床　数	287床（一般 287床）
外 来 患 者 数	約641人／日（2019年度）
平均在院患者数	242.7人（2019年度）
職　員　数	常勤604人／非常勤212人（2020年4月時点）
設　　　立	開設年 1863年4月／移転開院 1990年5月8日
特　　　色	急性期型地域中核的病院 日本医療機能評価機構（認定第GB76-2号 一般病院） 厚生労働省指定臨床研修病院 特定行為指定研修機関 地域医療支援病院
診療受付時間	平日／8：30～11：00／13：30～15：00 土曜日／午前8：30～11：00
面 会 時 間	平日／14：00～20：00　土・休日／13：00～20：00 ※ICUは14：00～16：00／18：00～20：00の2回
休　診　日	日曜、祝祭日、年末年始（29日午後～1月3日）

施 設 基 準	基 本 診 療 科	一般病棟入院基本料7対1 超急性期脳卒中加算 診療録管理体制加算1 医師事務作業補助体制加算1のイ　15対1 急性期看護補助体制加算25対1（看護補助者5割以上） 看護職員夜間配置加算12対1（1のイ） 夜間100対1急性期看護補助体制加算 夜間看護体制加算 栄養サポートチーム加算 医療安全対策加算1 医療安全対策地域連携加算1 感染防止対策加算1 感染防止対策地域連携加算1 抗菌薬適正使用体制加算 患者サポート体制充実加算 褥瘡ハイリスク患者ケア加算 呼吸ケアチーム加算 病棟薬剤業務実施加算1

施 設 基 準	基 本 診 療 科	データ提出加算2.イ 入退院支援加算1 地域連携診療計画加算 入院時支援加算 地域医療体制確保加算 排尿自立支援加算 総合機能評価加算 臨床研修病院入院診療加算（基幹型） 救急医療管理加算 救急搬送看護体制加算1 特定集中治療室管理料3 早期離床・リハビリテーション加算 早期栄養介入管理加算 緩和ケア病棟入院料1 緩和ケア診療加算 せん妄ハイリスク患者ケア加算 ハイリスク妊娠管理加算 ハイリスク分娩管理加算 認知症ケア加算1 地域包括ケア病棟入院料2 後発医薬品使用体制加算3
	特 掲 診 療 科	糖尿病合併症管理料 がん性疼痛緩和指導管理料 がん患者指導管理料1 がん患者指導管理料2 エタノールの局所注入（甲状腺） 院内トリアージ実施料 ニコチン依存症管理料 がん治療連携指導料 薬剤管理指導料 医療機器安全管理料1 在宅療養後方支援病院 在宅患者訪問看護指導料 持続血糖測定器加算及び皮下連続成グルコース測定 HPV核酸検出及びHPV核酸検出（簡易ジェノタイプ判定） 検体検査管理加算（Ⅰ）（Ⅳ） 内服・点滴誘発試験 CT透視下気管支鏡検査加算 画像診断管理加算2 CT撮影及びMRI撮影 冠動脈CT撮影加算 大腸CT撮影加算 心臓MRI撮影加算 抗悪性腫瘍剤処方管理加算 外来化学療法加算1 無菌製剤処理料 心大血管疾患リハビリテーション料（Ⅰ） 脳血管疾患等リハビリテーション料（Ⅰ） 運動器リハビリテーション料（Ⅰ） 呼吸器リハビリテーション料（Ⅰ） がん患者リハビリテーション料 早期離床・リハビリテーション加算（集中治療室管理料3） 透析液水質確保加算及び慢性維持透析濾過加算 ペースメーカー移植手術及びペースメーカー交換術

施設基準	特掲診療料	大動脈バルーンパンピング法（IABP法）
		早期悪性腫瘍大腸粘膜下層剥離術
		体外衝撃波腎・尿管結石破砕術
		膀胱水圧拡張術
		乳がんセンチネルリンパ節加算2及びセンチネルリンパ節生検（単独）
		経皮的冠動脈形成術
		経皮的冠動脈ステント留置術
		輸血管理料（Ⅰ）
		輸血適正使用加算
		人工肛門・人工膀胱造設術前処置加算
		胃瘻造設時嚥下機能評価加算
		麻酔管理料（Ⅰ）
		夜間休日救急搬送医学管理料
		神経学的検査
		医科点数表第2章第10部手術の通則5及び6（歯科点数表第2章第9部の通則4に含む。）に掲げる手術
		ヘッドアップティルト試験
		下肢末梢動脈疾患指導管理加算
		糖尿病透析予防指導管理料
		時間内歩行試験及びシャトルウォーキングテスト
		腹腔鏡下前立腺悪性腫瘍手術
		腹腔鏡下膀胱悪性腫瘍手術
		腹腔鏡下肝切除術（亜区域切除）
		腹腔鏡下肝切除術（1区域切除）
		腹腔鏡下肝切除術（2区域切除及び3区域切除以上のもの）
		腹腔鏡下肝切除術（部分切除及び外側区域切除）
		内視鏡下甲状腺部分切除、腺腫摘出術
		内視鏡下バセドウ甲状腺全摘（亜全摘）術（両葉）
		内視鏡下副甲状腺（上皮小体）腺腫過形成手術
		乳腺炎重症化予防・ケア指導料
		外来排尿自立指導料
		在宅持続陽圧呼吸療法指導管理料の遠隔モニタリング加算
		心臓ペースメーカー指導管理料の注5に規定する遠隔モニタリング加算
		人工腎臓
		導入期加算2及び腎代替療法実績加算
		酸素の購入単価
		病理診断管理加算1
		悪性腫瘍病理組織標本加算
		内視鏡下甲状腺悪性腫瘍手術
		外来緩和ケア管理料
		椎間板内酵素注入療法
		腎代替療法指導管理料
		婦人科特定疾患治療管理料
		腹腔鏡下膵腫瘍摘出術
		腹腔鏡下膵体尾部腫瘍切除術
		リンパ浮腫複合的治療料
		緑内障手術（水晶体再建術併用眼内ドレーン挿入術）
		遺伝学的検査
		小児運動器疾患指導管理料
		経皮的冠動脈形成術（特殊カテーテルによるもの）
		療養・就労両立支援指導料注3に規定する相談支援加算
	食事療養	入院時食事療養／生活療養（Ⅰ）

2021年3月時点

●沿革

1863年横浜の外国人居留地にできた病院は、4年後に横浜ゼネラル・ホスピタルとなり、居留民を中心とする患者の医療を行う公共的な病院でありました。

第2次世界大戦中敵産に指定後、日本人を中心とする財団が設立され、名称を横浜一般病院（ゼネラルを一般と邦訳）と変更しました。戦後連合軍進駐によって山手地区の病院は欧米人の運営による横浜ゼネラル・ホスピタルと元通りの名になりました。関内相生町の横浜一般病院は国際親善病院と改称し、その後さらに国際親善総合病院となり、平成2年（1990）西が岡に移転いたしました。

1863年（文久3年）		外国人居留民のための公共的な病院として「YOKOHAMA PUBLIC HOSPITAL」が欧米人を中核とする委員会によって、居留地88番（現在の横浜市中区山手）に設立された。1866年末頃閉鎖。
1867年（慶応3年）		山手のオランダ海軍病院が「THE YOKOHAMA GENERAL HOSPITAL」（以下GENERAL H）に改組され、外国人居留地の公共的な病院が再建。各国居民のほか、日本人も治療日本人医師も学ぶ。
1942年（昭和17年）	6月5日	GENERAL Hは敵産管理法施行令第3条第4項に基づき大蔵大臣より敵産に指定された。（敵産管理人三菱信託株式会社）
1943年（昭和18年）	6月	GENERAL H病院委員会は1月21日の会議で改組に関する日本帝国政府の計画に原則的に同意したと、日本側（外務省）に通報した。新しく構成された委員会の委員は日本人6名、外国人4名　日本人名：委員長 松島肇、以下山本順市、中野太郎、蓼沼憲次、隅川八郎、坂本直道
	9月15日	財団法人横浜一般病院設立に関し、厚生大臣宛申請書提出
1944年（昭和19年）	1月20日	「財団法人 横浜一般病院」設立認可、大蔵省は敵産として接収した国有財産たる病院財産を本財団法人に無償譲渡、2月22日登記
	3月	山手地区外人立ち入り禁止海軍の要請により病院を横須賀海軍病院に賃貸、代わりに横浜関内にある関東病院を買収、移転（3月23日）。診療科は内科、外科、産婦人科、X線科、開業準備期間をおいて診療開始は7月1日
1945年（昭和20年）	5月29日	横浜大空襲病院周辺は焼夷弾攻撃により、見渡す限り焦土と化したが病院は職員の奮闘により、一部の病室を除き焼失をまぬかれた。わずかに残った建物はニューグランドホテル、横浜正金銀行、県庁、当院ぐらいであった。
	8月15日	太平洋戦争終了、28日連合軍進駐、30日マッカーサー、ホテルニューグランド入り。横浜一般病院山手病舎（分院）は進駐軍に接収され、病院は欧米人の運営に復帰。
1946年（昭和21年）	7月1日	山手地区の病院は寄付行為変更、THE YOKOHAMA GENERAL HOSPITALと元通りの名称に戻る。なおこの病院は昭和25年（1950）The Bluff Hospitalと改称した。
	3日	相生町の病院は新しく「財団法人 国際親善病院」として寄付行為の変更、主務官庁、厚生省の認可及び許可を得て、設立された。標榜科目 内科（小児科を含む）、外科、産婦人科、理学診療科の4科 病床数59床（以降昭和21年7月3日を創立記念日） 初代斉藤良俊病院長就任
1948年（昭和23年）	1月	皮膚泌尿器科開設
1952年（昭和27年）	5月17日	財団法人を「社会福祉法人国際親善病院」に組織変更認可（登記5月30日）
1954年（昭和29年）	7月	渡辺千春病院長就任
1955年（昭和30年）	7月	村井出病院長就任
1956年（昭和31年）	3月	神経科開設
1957年（昭和32年）	5月	高橋修三病院長就任 眼科開設

1958年(昭和33年)	3月	耳鼻咽喉科開設
1959年(昭和34年)	1月	永田鉄二病院長就任
1963年(昭和38年)	6月	神経科閉鎖
	10月	村井出病院長就任
1964年(昭和39年)	4月	整形外科開設
1966年(昭和41年)	8月	放射線科開設(理学診療科−レントゲン科を改める)
1967年(昭和42年)	2月	総合病院となり「国際親善総合病院」に名称変更
	3月	皮膚泌尿器科閉鎖
	4月	小児科開設
1968年(昭和43年)	7月	泌尿器科開設(外科に併設)
1973年(昭和48年)	4月	形成外科開設
1974年(昭和49年)	2月	水野重光病院長就任
	4月	形成外科閉鎖
1981年(昭和56年)	1月	森英雄理事長就任
1985年(昭和60年)	1月	加藤英夫病院長就任
1987年(昭和62年)	9月25日	医師会との基本協定成立
1988年(昭和63年)		病院建設発注(大成建設)、宿舎花水木発注(三井不動産建設)
1990年(平成2年)	5月8日	新病院開院一般内科･消化器内科･循環器内科･呼吸器内科･神経内科･心療内科･小児科･外科･脳神経外科･整形外科･産婦人科･皮膚科･泌尿器科･眼科･耳鼻咽喉科･放射線科･麻酔科の17診療科、300床
	8月	「社会福祉法人 親善福祉協会」に名称変更(病院の名称は「国際親善総合病院」を継続)
	9月	特別養護老人ホーム「恒春ノ郷」開設入所100床、一時入所20床(平成14年 入所104 一時入所16に変更)
1995年(平成7年)	4月	掛川暉夫病院長就任
1997年(平成9年)	4月	内分泌内科開設
		産科棟を増築
1998年(平成10年)	12月	財団法人日本医療機能評価機構から病院機能評価(Ver. 4.0・一般病院種別B)の認定証を発行(神奈川県内第一号)
2001年(平成13年)	3月	厚生労働省から臨床研修病院に指定される。
	4月	地域連携室開設
2003年(平成15年)	11月	財団法人日本医療機能評価機構から病院機能評価(一般病院)の更新認定証を発行される。
2004年(平成16年)	5月	腎臓内科開設
2005年(平成17年)	4月	呼吸器科開設
2006年(平成18年)	4月	救急部開設
2007年(平成19年)	4月	村井勝病院長就任
2008年(平成20年)	4月	院内保育園開園
2009年(平成21年)	1月	山下光理事長就任
		中央手術室1室増室、中央材料室改修
	2月	財団法人日本医療機能評価機構から病院機能評価(Ver. 5.0・一般病院)の更新認定証を発行される。
	4月	医療安全管理室設立
	6月	医療機器管理室設立
	7月	DPC導入
2010年(平成22年)	2月	「社会福祉法人親善福祉協会」内に特別養護老人ホーム「恒春の丘」開設　入所定員130名、短期入所10名
		「社会福祉法人親善福祉協会」内に介護老人保健施設「リハパーク舞岡」開設　入所定員(短期入所含む)100名、通所定員30名
		2B病棟用途変更(小児科病棟→血液浄化・透析センター予定)
	4月	人工膝関節センター開設
2011年(平成23年)	5月	電子カルテ導入
		院外処方開始
2012年(平成24年)	2月	内視鏡センター開設
		「社会福祉法人親善福祉協会」内に横浜市芹が谷地域ケアプラザを開設
2012年(平成24年)	4月	感染防止対策室設立
		患者サポート室設立
2013年(平成25年)	7月	国際親善総合病院創立150周年式典・祝賀会
		外来化学療法室設立
2014年(平成26年)	1月	国際親善総合病院創立150周年講演会
	8月	新館棟工事着工
2015年(平成27年)	4月	安藤暢敏病院長就任
	8月	新館棟開設
	10月	本館改修工事着工
2016年(平成28年)	4月	緩和ケア病棟開設
		患者総合相談部設立
		健康管理室設立
		入退院支援室設立
2017年(平成29年)	1月	サテライトクリニック開設準備室設立
	11月	しんぜんクリニック開設
2019年(平成31年)	3月	病院機能評価(Ver.2.0・一般病棟2)の更新認定
2020年(令和2年)	2月	特定行為研修指定研修機関に指定される。(4区分:腹腔ドレーン管理関連、創傷管理関連、動脈血液ガス分析関連、栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連)
	11月	地域医療支援病院に承認される。
2021年(令和3年)	4月	特定行為研修区分追加(3区分追加:呼吸器(気道確保に係るもの)関連、呼吸器(人工呼吸療法に係るもの)関連、呼吸器(長期呼吸療法に係るもの)関連)

シンボルマーク

両足で大地を踏みしめ、両手でしっかりと大空を支える人間を
デザインしたもので健康の喜びを高らかに謳歌しています
（IGH：International Goodwill Hospital）

職員一言メッセージ

テーマ
❶親善病院の好きなところ
❷働いていて良かったこと

❶患者さんのために努力し協力しあえる、プロ意識の高さがすごい。
泌尿器科・滝沢

❶新卒からずっと親善です。
働きやすい環境です！
外来 B・中丸

❶職員間の連携がとても良く、働きやすい病院です。
腎臓高血圧内科・千葉

❶経営より前に、熱い思い、尊厳を思いやる心、スタッフのチームワーク。
経理課・島田

❶泉区の医療を担っているところ。
施設用度課・佐藤

❶中庭が好きです。心安らぐ空間があるのは素敵だと思います。
外来受付一同

❷素晴らしき仲間達にめぐり会えたこと。
臨床検査科・大野

❷ご飯を食べて元気に退院される姿を見られること！
リハビリテーション科・内澤

❶希望に沿って休みが取れるので、プライベートも充実させ働ける。
2A 病棟・當目

❶食堂で働いている方たちが明るく、美味しいごはんを提供してくれるところ。
放射線画像科・古見

テーマ
❶親善病院の好きなところ
❷働いていて良かったこと

❶他職種問わず、気兼ねなく話せること。

リハビリテーション科・佐藤

❶弥生台の街並み・景色が素晴らしい。
特に春は桜の花吹雪が幻想的。

薬剤部・山根

❶スタッフがみんな明るくて働きやすい。

2A 病棟・大野

❶大き過ぎず、小さ過ぎず、スタッフの顔が見えて仕事ができること。

医療福祉相談室・井出

❷患者さんが自分ことを名前で呼んでくれたり、顔を覚えてくれた事。

2A 病棟・関

❶他部署ともコミュニケーションがとりやすいところ。

リハビリテーション科・寺島

❶頼れる仲間がたくさんいます。

総務課・鈴木

❷入院中に撮影した患者さんが少しずつ元気になっていくのを見ているとこちらも元気をもらいます。

放射線画像科・岩澤

❷チーム親善･心不全で仲間に恵まれた！
これからも頑張ります！

2A 病棟・澤田

❶スタッフの雰囲気が良く、患者さんに誠実で一生懸命なところ。

2A 病棟・稲垣

テーマ
❶親善病院の好きなところ
❷働いていて良かったこと

❷とっても忙しくても患者さんに必要な看護を考えているところ。

3A 病棟・渡部

❶アットホームで働きやすい。

3B 病棟・深沢

❷安心して検査が受けられて良かったと笑顔で言われた時。

放射線画像科・印南

❶我が家から見える景色は国際親善総合病院！初孫もここで生まれました。

2A 病棟・鎌田

❷退院した患者さんが外来でリハビリ室に来て元気な姿を見せてくれること。

リハビリテーション科・山田

❷光差し　恩師の事を　思い出す
地域と共に　30 年。

医事課・白井

❶他部署ともしっかりコミュニケーションをとりチーム医療に対する意識が高いところ。

放射線画像科・佐藤

❶向上心の高い人が多く、学ぶ環境もそろっているため自己研鑽に励みやすい。

2A 病棟・新井

❶病棟スタッフの仲が良く、師長も優しい！

2A 病棟・佐藤

❷患者さんから「ありがとう！」と言われた時にやりがいを感じます！

リハビリテーション科・石渡

職員一言メッセージ

テーマ
❶親善病院の好きなところ
❷働いていて良かったこと

❷福利厚生が充実し楽しんでいます。
3A 病棟・矢部

❷「いつも笑顔で元気な姿を見ると俺まで元気になれる！」と受け持ち患者さんに言われたこと。
3B 病棟・小池

❷学びたいことを積極的に学ばせてくれて、スタッフ同士の仲が良く、環境が良いこと。
2A 病棟・古本

❶制服がシンプルなところ。
医療情報課・山田

❶プリセプターの先輩が新人フォローについてくれる。
2A 病棟・末永

❷創立 150 周年を経験し、病院のルーツや昔の横浜に関心を持てたこと。
薬剤部・伊東

❷幅広い経験が積めること。
薬剤部・嶋田

❶やさしいスタッフが多いところ！
医療情報課・石川

❶ほどよく田舎で、自宅から通勤しやすいところ。
放射線画像科・遠藤

❷信頼できるスタッフがいて、家族を安心して診てもらえるところ。
2A 病棟・竹田

職員一言メッセージ

テーマ
❶親善病院の好きなところ
❷働いていて良かったこと

❶患者さんのためにスタッフ全員で協働し、看護をおこなっているところ。
2A 病棟・丸山

❷患者さんを第一に行動できること。日々成長できること。
薬剤部・網野

❶明るいスタッフが多くコミュニケーションがとりやすいこと。
リハビリテーション科・大木

❷仕事のおかげで毎日 8000 歩以上歩いています。
医事課・小泉

❶急性期～地域包括ケアまで幅広く学べること。
リハビリテーション科・増渕

❶アットホームな職場でスタッフみんなやさしく頼りになる。
3B 病棟・鈴木（朱）

❷職員の方々が優しいこと。
薬剤部・佐野

❷長女は親善で元気に誕生　感謝 !!
臨床検査科・松岡

❶他職種連携にて多くの学びをする機会が得られやすいこと。
リハビリテーション科・吉田

❶先輩方が優しく教えて下さるので色々なことが学べる！
リハビリテーション科・徳峯

テーマ
❶親善病院の好きなところ
❷働いていて良かったこと

❷周りの方々に見守られながら業務を任せていただけるところ。

医事課・山村

❶スタッフみんながフレンドリーで明るく元気なこと。

職員課・渋谷

❷移転の時から携わらせて頂き、上司・同僚に恵まれています。

医事課・吉田

❶生活と仕事の両立がしやすい所が良いです。

2B 病棟・長南

❷相談できる人、共に頑張っていかれる人に助けられました。

2B 病棟・倉田

❷地域の皆様に信頼され、スタッフ間も仲がよく働きやすい。

3A 病棟・田口

❷自分の最後の職場。最後まで無痛分娩頑張ります。

産婦人科・多田

❷仕事熱心で真面目な方が多いので、毎日が勉強になります。

医事課・斉藤

❶駅から近く通勤しやすい

2B 病棟・戸祭

テーマ
❶親善病院の好きなところ
❷働いていて良かったこと

❷患者様に顔を覚えてもらい、声をかけてもらえること。

医事課・有本

❶母として働いていますが、働きやすい環境です。

2B 病棟・萩原

❷この病院で人生を共に歩むパートナーと出会えたこと。

総務課・伊藤

❷患者さんに笑顔で「ありがとう」と言われた事

看護管理室・坂井

❷30 周年おめでとうございます。毎日楽しく看護ができる親善病院で働けてとても感謝しています。

外来 A・石川

❶良好な人間関係で働きやすい。

2B 病棟・五十嵐

❷教育体制が整っており、成長できる。

2B 病棟・山口

❷スタッフ同士のコミュニケーションが取れている。

2B 病棟・稲村

❷職場環境に恵まれ働けて幸せです。

看護管理室・小口

編集後記

「来年5月で移転30周年。何かやりたい」

2019年暮れ頃、本文中にもたびたび登場した総務課、伊藤課長のこの一言でこの企画は始まりました。

特に編集委員会を立ち上げることはありませんでした。総務課の課長以下3名という少数精鋭部隊で進められました。

そしてすぐに襲ってきたのが新型コロナウイルス。当然、人を集めて式典をやるなどという企画は吹き飛びました。それでは記念誌作りに専念しよう。方針が決まりました。

どのような内容を盛り込むか構成を考え、お手伝いいただく編集・印刷業者を選定し、ほぼ具体案が固まってきたのが夏頃。7月に最高意思決定機関である病院運営会議にて承認されました。「7年前に創立150周年記念式典を盛大に行い、記念誌も発行している。今回はそこまで大々的にする必要はなく、記録を残すという意味で実施すればよいのでは」というのが大方の意見でした。

さてそれからがたいへん。院内、院外も含め誰にご挨拶、祝辞をお願いするか、歴代病院長の特別対談を企画しよう、日程はいつにすればよいか、これまでのあゆみ、年表を作ろう、資料・写真を集めなくてはいけない、診療科はじめ各部署の紹介記事を作ろう、写真をどのように配置するか、記事内容はどのようにするか、若手職員の座談会もやってみたい、これまで実施した数々のイベントの写真を集める、病院のいいところを一言メッセージで集めよう、病院概要がわかる基本的な統計資料を集めるなどなど。精鋭部隊は多忙な通常業務のなか、昼夜を問わず記念誌作りに明け暮れました。

ようやく最初のゲラが出てきて全体像が見えてきたのは20年暮れから21年初めくらい。そして最後に集めたのが一言メッセージでした。2月初め、全職員に向けて応募を呼びかけました。ところがこれがなかなか集まらない。締め切りが月末だったため間延びしてしまったのかもしれません。そこで締め切りを一週間前倒しにしました。そうしたらどどっと出てきた。最終的に70人ほどのメッセージが集まりました。

3月5日にすべてのゲラをいただきました。全量チェックしてみると直したい箇所が出るわ出るわ、やはり形式や言い回しがバラバラだったり、一度は執筆者の校正は通っているものの誤字や抜け字があったりと、これはまだまだたいへんだと思いつつ総務課担当者とよくすり合わせをして、再度多方面に校正をお願いするよう手配しました。

このままのペースで行くと31周年記念誌になってしまう。そのような恐怖感に苛まれながら最後の力をふり絞っていきました。

そして4月、ついに発行することができました。万歳！

長きにわたり苦労を重ねて制作を成し遂げてくれた総務課職員に心より感謝申し上げます。冒頭申し上げたように編集委員会は組成していませんでしたが、最後に編集委員としてお名前を列挙させていただきます。そして私はちゃっかりと委員長に入っておきます。恥ずかしながら。

また編集から印刷までお願いした株式会社タウンニュース社の星野菜穂様にはたいへんお世話になりました。当院に何度も足を運んでいただき、編集会議、撮影、座談会の司会等にご尽力いただき、一時期は病院職員と見まがうほどでした。ありがとうございます。

そして本誌に登場していただいた多くの方々、皆さまのおかげで素晴らしい記念誌を作成することができました。コロナ禍において各持ち場持ち場で奮闘努力されている姿を見ることができました。このパワーを結集してこれからも益々地域の皆さまのお役に立ちたい。そんな思いを込めて筆を置くことといたします。

編集委員長　林 秀行

編集委員

委員長	管理部長	林 秀行
委員	総務課課長	伊藤 美恵子
	同主任	鈴木 啓太
	同	卓 真澄

国際親善総合病院 移転30周年記念誌

発行

2021年4月
社会福祉法人 親善福祉協会 国際親善総合病院
〒245-0006
神奈川県横浜市泉区西が岡1丁目28-1
☎045-813-0221

制作・印刷

株式会社 タウンニュース社